
緋の剣士に捧ぐ交響曲

槇田理奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋の剣士に捧ぐ交響曲

【Nコード】

N1631M

【作者名】

槇田理奈

【あらすじ】

「俺は真実を知る為にこの道を選んだ」
尊敬する父の死、周りで起きている奇怪な出来事、親友達の悲しき恋心、厳しい掟に翻弄され、それでも真実を追求し続けた者達の葛藤から結末までを唄う、悲劇の交響曲。 ……聞こえるは、憎しみを抱く者達の呻き声と断末魔の叫び。

序文

序文

“俺は誓う。真実を知るために、仇を討つために、悲しみを絶つた
めの手掛かりを残すために。”

これは、ある男の… たった1人で真実を突き止めようと奮闘した悲
劇の物語である。

勇敢なる男の名はシャルル… シャールは真実を知るために、救うた
めに、悲劇を絶つために孤独な闘いを続ける。

悲劇の前奏曲とも言えるであろう物語を今此処で紡ごう… 死を恐
れず、悲しみすら乗り越え、様々な苦悩を抱えたシャルルの悲しみ
を。

様々な人々が関わってゆく物語を。

シャルルに関わった者達の物語を。

シャルルは何故危険を承知の上で真実を知ろうとしたのだろうか。

第一節：悲劇の序章

いつも、疑問に思っていた。何故、父は怯えた表情をしているのだらう。

大きな仕事場を持ったのだから嬉しい筈なのに。出世して、人々の役に立つ、少しでもそれに報いる事が出来ると喜んでいたら…アルデイ家の監視下でより自由になった事に、援助も受ける事が出来ると喜んでいたのに。

どうしてそんなに辛そうな表情をしているの？父さんの技術を活かせるんだよ？

もう、父さんが疲れきった表情をしなくていいんだよ、俺、知っているよ。

父さんがずっとと苦労して、一生懸命色んな人と話していたり励ましてくれていた…。

もう、苦労や悩みを分かち合ってくれる人がいるんだよ、父さん。幼い俺はまだ何も知らなかった…父さんが沈んでいる理由もアルデイ家の専門医師になった本当の理由も。

「ただいま、母さん。シャルルもただいま」

「お帰りなさい、あなた」

「父ちゃん、お帰りなさいー！」

シャルルは父の帰りを知ると母の腕を引っ張って玄関まで走った。

「シャルル、ダメだろ。廊下を走って転んだら痛いんだから」

父が優しくたしなめるのを見た母は穏やかな笑みを浮かべながら

「ずっと早く戻って来ないのかって言うていたのよ、あなた」

「シャルルには寂しい思いをさせているからなあ…いつもごめんな」

父が少し寂しそうな表情をして呟くが、シャルルはニッコリ笑って

「俺も父ちゃんみたいになりたいもん。だから大丈夫！」

本当は全然違うのに大丈夫だなんて…シャルルの笑顔を見る父の眼差しはどこか悲しそうだった。

その眼差しにシャルルは首を傾げたが、どう父に聞いたら良いのかわからず、ぽかんとした表情で見ただけだった。

「ああ、すまん。イザベラ、悪いが晩飯出来ているかな？」

「アクロイド、出来ているわ、早速一緒に食べましょう」

イザベラがニッコリ笑って父であるアクロイドとシャルルに言った。するとシャルルは満面の笑顔を浮かべ、足音を立てながらリビングに向かう。一見和気あいあいとしたイザベラとアクロイド…そして、シャルル…。

技術等も優れ、有名になるが、それに満足する事もなく病気等で困っている人がいたという事が分かったら自らそこに向かう。

けれども個人では全く出来ない事もあるのだ…アクロイドは医師であると同時に有名な学者でもある。それがアルディ家の幹部が聞き、アクロイドの対応や容姿等を見て、心惹かれたという…そして、幹部との対談等を経てアクロイドは専門の医師としてアルディ家に雇われた。

しかし、それはアクロイドの誇りや理想を打ち砕く無惨なものだった。

だが、この時はイザベラもシャルルも何も知らなかった。

「あなた、明日から大聖堂に行くの？」

カチャカチャとナイフとフォークの音を響かせながらイザベラはアクロイドに質問するとアクロイドは頷きながら

「当主様の直属の部下の一員として明日から大聖堂に行かねばならない」

アクロイドの答えにイザベラは驚きを隠しつつ、

「まあ！最高幹部に！？という事は明日から早速大聖堂に行くの？」

と、聞くとアクロイドは首を振って

「本当は今日の夜には出なければならぬのだが、今回は仕方ない」

そう言いながら苦笑した…つまり幹部に無理を言っただけで帰宅したという事だ。それを聞いたイザベラの表情が曇る…アルデイ家の幹部に無理を言っただけで帰宅したという事は嬉しいが幹部に逆らったかどうかと考えると不安になるのも分かる。

「母ちゃん、顔が怖いよ…」

イザベラの隣で食事をするシャルルの瞳にはイザベラの不安そうな表情が怖く映ったのだ…それに気付いたイザベラは慌てて笑いながら

「シャルル、大丈夫。怒ってなんかいないわ」

シャルルを安心させるように言った。

幼いながら父は何かとんでもない事をしてしまったのではないかとシャルルは内心不安に思っていた。

「シャルル……」

アクロイドは寂しそうな表情を浮かべてシャルルを見ていた…自分のような医師になりたいと本気で思っていることを聞いたが、彼の心は複雑だった。

アルデイ家の最高幹部になるという事はシャルルの目指している医師になるという目標とは正反対なものであるという事を何と無く知っているのだ。

金と自らの保身の為ならどんな手段も選ばない幹部の中でも一番上の地位に立つという事である…シャルルが目指しているのは苦しんでいる人々全てに手を差し伸べたいという目標とは正反対である。

自分達の利益になるような事しかするな、自分達を不利な状況に追い込んだら反逆者扱いし、無礼打ちや処刑をされるとい事だ。

しかし、そんな薄汚れた事実など幼いシャルルに理解出来るわけがない。

アクロイドは困ったように笑うだけだった。

イザベラもアクロイドが最高幹部になるとい事には戸惑いを隠せないが、断る事が出来ないという事も知っていた…しかし、アクロイドは後々大きな過ちを犯す事になるが、この時は僅かな不安が心の中に渦巻くだけで、はっきりと形になることはなかった。

言葉少なに食事を終え、アクロイドは申し訳なさそうな表情でイザベラを見た。

イザベラは黙って首を縦に振り、目でアクロイドにもう寝るよう伝えた。

言葉にするとシャルルが頬を膨らまずに違いないし、アクロイドもシャルルと遊んでしまい、明日の早朝に大聖堂には行けないだろう。アクロイドが目でお礼を言ってそのまま去っていくのをシャルルは首を傾げ、イザベラに向かつて

「父ちゃん、部屋に行くの？」

と、イザベラに聞いた。

イザベラはシャルルの問いかけに

「お父さんは忙しいから今日はもうお休みよ、シャルル」

と、言った。

シャルルは少し残念そうな表情を浮かべたが、仕方ないと無理矢理納得し、イザベラの後を追って寝室まで向かった。

アクロイド達の心を表すかの如く月と星は雲に隠され、うっすらとしか見えなかった。

次の日、シャルルは早朝に起きた。

今日は家庭教師がやってくる日なのだ…アクロイドも起き、早速準備を整え始める。

その間にイザベラは台所で朝食の準備を開始する。

まだ夜は明けきっていないが、アクロイドの都合ならば仕方ないし、昨日はシャルルもアクロイドを見送りたいと言って聞かなかつたのでシャルルも早い時間に起こしたのだ。今日で事実上最後の家族の団らんの時間である。大聖堂に行けば最低数週間、忙しい時は数ヶ月も帰る事が出来ないのだ。

「よし…シャルル、着替えたか？」

アクロイドの隣で着替えるシャルルはニッコリ笑って

「もう少し!」

と、言った。アクロイドは笑いながら「早く着替えないとな」と、シャルルに言った。

シャルルは頷き、ブラウスのボタンを止める。

シャルルがボタンを止めるのに手間取っている間にアクロイドは準備を完了させ、シャルルがブラウスのボタンを止め終わるのを待っていた。

「出来たーっ!」

今までボタンを止める事が出来なかったシャルルだが、初めてブラウスのボタンを全部1人でしたのだ。

「お、出来たのか?偉いなーシャルルは」

「えへへ」

アクロイドが褒めるのをシャルルは照れくさそうな笑顔で聞いていた。

「シャルル…母さんが朝ご飯を作り終えているのかも知れないな、行こうか」

アクロイドはそう言って微笑むとシャルルは大きく首を縦に振る。リビングへ向かうアクロイドの手を握り、シャルルも向かう。

「父ちゃん、昨日顔色悪かったね、大丈夫？」

シャルルが何気ない様子でアクロイドに聞いたが、アクロイドは笑いながら「大丈夫だよ、気を遣ってくれて有難う」と答えた。きちんとして見ているという事を思い、アクロイドは苦笑するしかなかった。

シャルルには悟られないよう感情をなるべく表情に出さないようにしたが、子供は意外と鋭い…子供だからこそ、鋭いのかも知れないとアクロイドはますます心を痛めた。

シャルルには…どうかシャルルにはこのような辛い思いはさせないよう、アルディ家の幹部に目をつけられないよう、ただただ心の中で祈る事しか出来なかった。

「2人とも！ご飯出来たわよ！」

イザベラのはきはきした声を聞いたシャルルは満面の笑みを浮かべて「はい！」と、答えた。

「父ちゃん、早く行こうよ！」

「そうだな、シャルル」

アクロイドもニッコリ笑ってシャルルの手を繋ぐと、早歩きでリビングまで向かう。

リビングに着くと、イザベラが用意を済ませていた。

「母ちゃん、俺今日ボタンを全部1人で止めたんだよ！」

シャルルはピースをしてそう言うといザベラは驚いたように目を見

開き、笑いながら

「まあ！いつも父さんにしてもらっていたのに1人で出来たの？偉いわね〜シャルル…」

「だろう？イザベラも驚いただろう…私も驚いたよ」

アクロイドも誇らしげな表情でイザベラに言うと、彼女も頷き、思わずアクロイドの隣にいるシャルルの頭を撫でた。

「えへへ、ちょっと成長したでしょ、俺」

シャルルは照れくさそうに笑いながらもそう言うとイザベラもアクロイドも頷いた。

「ああ、昨日まで父さんに泣き付いていたのにな」

とアクロイドが返すとシャルルは頬を膨らませ、アクロイドに「そんなことないもん！」と、言った。

そんなアクロイドとシャルルのやり取りをイザベラは微笑みながら、しかし寂しそうな表情で見ている。

明日からはアクロイドは大聖堂でアルデイ家のために働き、滅多に帰って来ることはない。やはり内心イザベラは最高幹部になることを反対していたが、アクロイドが何故最高幹部になつてほしいという推薦を受け入れたのかということも知っていたので、無闇矢鱈と反対出来るはずもなかった。

「もー、早く食べないとご飯が冷めちゃうわよ」

イザベラは気を取り直し、笑いながらアクロイドとシャルルに向かって言うとアクロイドもシャルルも慌てて手を合わせた。

「いったただきまーす！」

3人で声を揃えて言った後、シャルルはパンを一気に頬張る。アクロイドはパンを千切りながら食べていたが、シャルルが物凄い勢いで口に頬張るのを見ると、くすりと笑った。

カチャカチャ：またナイフとフォークの音が響き渡るが、昨日は少し陰険な雰囲気が多い、話しかけられなかったシャルルが母や父に話しかける。

「今日はねーお隣のレディシア君と遊ぶんだよー！レディシア君が此方に来てくれるって！家庭教師が一緒らしいんだ」

「まあそうなの？レディシア君も来てくれるならシャルルも大丈夫よね」

と、イザベラが言っているとシャルルはピースをしながら

「僕はレディシアの兄だからしつかりしないと！」

胸を張って言った。それを見たアクロイドは微笑みながら、シャルルの頭をぐわしゃっ！と撫でた。

「シャルルもお兄さんになったのかあ…父さんは嬉しいよ」

アクロイドの言葉にシャルルは胸を張って

「うん！レディシア君のお兄さんになるんだよ！」

と、シャルルは自慢気に言うとアクロイドは少しだけ真剣な表情で

「じゃあ、何があってもレディシア君を守らないとダメだぞ？」

と、言うとシャルルは大きく首を縦に振って

「勿論だよ！」

ニツコリと微笑んだ。

それを見たアクロイドは頭を撫でた。

イザベラもアクロイドもシャルルの成長を見守りながら2人で笑った。

そんな微笑ましい時間は終わり、父はいよいよ大聖堂に向かって立つ時が来た。

イザベラは用意していた鞆をアクロイドに渡し、アクロイドの肩を叩いた。

「有難う」

シャルルはアクロイドに向かって手を振りながら

「行ってらっしゃーい！」

と、元気な声で父に言うとアクロイドは

「行って来る、シャルル」

笑いながらも何処か真剣な表情を浮かべて返した。

しばらくシャルルの小さな手を握っていたが、やがて手を離し、イ

ザベラから鞆を受け取ると改めて

「行って来ます」

と、言っただアを押した。

青い空が広がり、アクロイドはゆっくりした足取りで玄関を出て、ドアを閉めた…。

ガチャン…。

アクロイドの寂しそうな後ろ姿をイザベラは見送りながら身を案じていた…。

アクロイドが無事に帰って来るように。

しかし、アルデイ家の幹部が何故アクロイドを推薦し、彼を最高幹部にした本当の理由をシャルもイザベラもまだ知らなかった。

この朝が悲劇の序章へと繋がる第一歩であることもまだ知らなかったのである。

第二節：少年達（前書き）

命の重みと儚さを知った少年達は涙を流し、反逆を誓う。

それは、大人の理不尽で傲慢で身勝手な理由を知らない純粹な心から生まれた感情だった。

怒り、憎しみ、悲しみ、恐怖。

純粹で無垢な少年達は黒い感情を持て余していたのだ。

第二節：少年達

あれから何年か経ち、シャルルはすくすくと育っていた。

「まだかなあ…レディシア君」

シャルルはそわそわしながら待っていた。
今まで守られていただけの彼にとってレディシアの存在は特別だったのである。

「レディシアを守らなきゃダメなんだ」

自分よりも年下である彼を守ることが使命であり、生き甲斐でもあると、幼いながらに感じていた。

「あの子を守ることが出来るのは俺だけなんだ」

そう、あの日から…アクロイドが大聖堂に行った後、彼が自分を頼って来た時からシャルルはそう感じていた。
アクロイドが出ていった後、イザベラと2人きりで片付けをしていた。

とは言うものの自分は小皿やスプーンを渡してただけだったが。
最後に残ったアクロイドの分を片付けていると

コンコン

玄関の扉から響く音…イザベラは忙しそうだ。

「ごめん。シャルル、手が放せないの…出てくれる？」

「任せてよ。」

シャルルは胸を張って、元気良く返事をし、玄関に向かって走った。

「まあ…シャルルったら」

イザベラはどこか寂しそうな表情を浮かべてシャルルの後ろ姿を見守っていた。

この子も何時かアクロイドと同じ運命を歩む事になるのだろうか？
そんな事をぼんやりと考えながら。

イザベラの寂しそうな表情を見ていないシャルルは玄関の扉を開けた。

「あ、シャルルさん…」

おどおどしながら話しかけるのはレディシア・キース。

アルディ家に仕える牧師一家「キース家」の一人息子である。

「レディン、よく来てくれたね。さあ早く入りなよ、退屈だろ？」

「あ、はい…ありがとうございます」

たどたどしい言葉遣いで感謝の言葉を述べるレディシアにシャルルは頭を掻きながら手首を引っ張ってレディシアを中に入れて、リビングまで走る。

「シャルルさん…」

「なんだよ、遠慮しなくてもいいよ。お母さんも歓迎してくれるし。」

大丈夫だつて」

「うん、うん……」

そう言いながらもレディシアはどこか不安そうな表情を浮かべていた。

レディシアがこんなにも内気になったのには理由がある……彼はキース家の一人息子ということで両親から愛情を受けた一方で、両親の期待も背負って育ってきたのである。

将来はアルデイ家の有望な最高幹部として活躍するべき人間としてこんなにも幼いうちから様々な教養を身につけなければならないのだ。

彼は、誰に対しても控えめな態度を崩さない……いや、崩せないのだ。絶対に崩すわけにはいかないのだ。

だから、シャルルはレディシアを守りたい、少しでも彼の力になりたいと思っていたのだ。

この孤独な少年の心を守らなければならぬと彼は思い、そして、支えになって壊れないように守らなければならぬと……それが自分の役目だと思っていた。

「レディン、今日の勉強はどうだった？」

もう彼も幹部実習生としてアルデイ家の中枢に建つ大聖堂で学ばなければならぬ……そのため、今から読み書き、礼儀作法なども習得しなくてはならない。

「うん、疲れたかな……特に分からないところはなかったけれど……あ、でもここは分からないや。どうすればいいの？」

レディシアは持ってきたマニュアルを開き、シャルルに見せた。

その内容は当主や現最高幹部、上流階級の者たちに対しての振る舞いや言動についてだった。

「…当主に会った時には如何なる場合でも跪ひざまづかなければならぬ…上流階級、現最高幹部に対しては最敬礼…か」

「跪ひざまづくってどうやるの？」

レイディアには跪くという動作が分からないのだ。

「えつとな…こうするんだ」

シャルルはレイディアに向かって片膝をつき、腰を折った。

その姿を見たレイディアは左右に首を激しく振ってシャルルに向かって懇願した。

「…シャルルさん、やめてよ…やめて」

レイディアにはその様を見るのが耐えられなかった…自分はそんなに立派な人間じゃない、ただ、両親の事があるだけでこんな事をさねなければならぬのか、しなければならぬのかという怒りと虚しさを子供ながらに感じたのだろう。

どんなに差があっても皆は同じで、それぞれに才能や可能性があつて、それを高めて発揮すること…それが生まれなどで区別されることに悲しさを覚えてしまった…皆が賞賛される権利があるのにとレイディアは思ったのだろう。

…穢れの知らない少年、正義感が強く、清らかな精神…シャルルはこの子が将来、アルディ家の最高幹部になる事などできない、したくないという思いがわき上がった。

キース家の長男でなければ彼は自分の信念を貫き通せるのかもしれ

ないが、アルデイ家の最高幹部になつたらしきたりや規律、聖職者独自の決まりを守ることを強要されるだろう。

「レディン…俺には何もできないんだ…君の両親を止めることも…」
俺も君も子供だから。

シャルルは父を思い出した…あの時は素直にうれしく思ったものだ、父の医師としての信念や実力、成績を認めてくれたから何のコネもない父が最高幹部に抜擢され、自分達もその恩恵を受けたと思っ
ている。

だが、レディシアは自分がアルデイ家の恩恵を受けていることをどう思っているのだろう。

両親のことも知っているのだから最高幹部のことも知っているのではないかと推測した。何らかの事情で人に跪かれるのを拒絶している…大聖堂に行ったことがあるのかもしれない…最高幹部とは言えアルデイ家に昔から仕えていないので、事情が分からない。

精神的なものだけではない…きつと様々な事情もあるのかもしれない…それを知る必要がある。

シャルルは知りたいという好奇心に駆られ、レディシアに聞いていた。

「ねえ、レディシア…お父さんとお母さんと最近話した？」

突然のシャルルの問いかけにレディシアは少しだけ顔色を変えた…シャルルの真剣な声と両親のことを聞かれたからである。

「…っ、っっ」

レディシアは戸惑いながらも頷いたが、その先について答えることはなかった。怖かったのかもしれない…両親に話すなど言い付けら

れているのか…自分が怖くて話せないのか…しかし、シャルはレディシアが話してくれるのを待っていた。

「シャル」

レディシアは怯えているようにも憤っているようにも捉えられる表情でシャルに向かって懸命に答えようとした。幼いながらに…いや、幼いからこそなのだろう。両親や周りの理不尽な生活や考え方に、やりきれないほどの疲れと激しい怒りを感じているのかも知れない。

「なんだい？レディシア」

シャルはレディシアの肩を掴み、真っ直ぐと彼の目を見ていた。レディシアは狭間でさまよっていた。

両親の言い付けを守るか、シャルの手を取るかの狭間に立たされた。怖かったのだ、一人になってしまつのではないかと…そんな恐れを彼は抱いていた。

「レディシア：大丈夫だよ、君はもう自分で判断しなきゃならないんだ…5歳だろ？」

シャルは優しい光をたたえながらレディシアを見つめていた。あと1年もしたら彼は幹部実習生として大聖堂に行かなくてはならない。

もう、彼には大人になつてもらわなければ困るのだ。酷な事を言っているのかも知れないが、あと1年でレディシアにはもっと過酷な使命を背負っていかなければならない。

「…シャルル…」

意を決したレディシアが言葉を紡ごうとしたとき…。

「いやあつ！」

「……！」

イザベラの悲鳴が庭から聞こえた。

「シャルル…」

レディシアは顔を歪め、シャルルの手を握り締めた。

「レディシア、行くぞ」

シャルルは震えるレディシアの手を強く握り返し、母がいるであろう庭に向かって歩いた。

庭ではイザベラとアルディ家の幹部が話していた。

「残念ですが…アクロイド卿は…」

「いや！そんなの嘘よ！あの方が、そんな…っ！」

イザベラは悲鳴を上げながら何度も首を横に振って否定した。

「…お気持ちは分かりますが、アクロイド様は昨日…毒を飲んで自殺を…」

話の内容は大聖堂で医師をつとめていたアクロイドが毒を飲んで自殺したという報せだった。

大聖堂には一般人は立ち入る事ができない…イザベラはアクロイドを助ける事ができなかった事と、アクロイドが自殺するはずがないという思いがあった。

しかし、幹部の口から告げられたのは残酷な真実。

「……イザベラ様…此方に…」

イザベラがアクロイドの死を頑なに否定したので、幹部達が彼女を連れて立ち会わせようとしていた。

「……！」

それをこっそりと聞いていたシャルルは愕然とし、レディシアはシャルルの背に隠れ、幹部達を睨み付けていた。

幼いながらに叩き付けられた現実…厳しく育てられた故に身に付けた現実を見る力…。

2人とも幼かったが、アクロイドの事が分からないほど幼くない。

「シャルル…」

レディシアはギュツとシャルルの手を握り締めたまま、じっと耐えていた。

「…大丈夫…大丈夫だよ、レディシア…」

今にも崩れそうな程、悲しいのに。

それでも耐えようとする…レディシアにはシャルルが痛々しく見え

て仕方無かった。

「…ごめんね」

レディシアは謝った。

ただ、目を潤ませて謝った。それ以外に何が出来ようか。幼すぎる心に残酷な真実が受け入れられるものか。

「シャルル、ごめんね」

レディシアはシャルルの背中に顔を押し付け、涙ながらに謝罪の言葉を口にした。

「レディシア……」

耐えようとしていたのに、レディシアが泣きながら、何度も何度も謝罪の言葉を口にしてているのを見るのも聞くのも辛かった。耐えられない…憧れていた父の死を受け入れる…だなんて。

「レディシア……！」

シャルルはレディシアの方を向いて胸に顔を埋め、すぐるように泣いていた。

レディシアは戸惑いながらシャルルを全身で受け止めていた。

熱い…体が熱く感じる。

シャルルが顔を埋めて泣きじゃくっているのだから無理はないが、もう一つ…様々な感情が込み上げる。

(悲しませる事が母さん達の仕事なの?)

両親は知らないだろう…両親達が上の地位に立ち、名誉と得て私欲が満たされているとき、組み敷かれた大勢の人々が怒りに震え、涙を流し、悔やむ姿を。

レディシアは何の躊躇いもなく、シャルルの背中に手を回した。

「シャルル…僕も協力するよ」

何を戸惑う必要があるというのか。

自分は泣いている人々の為に上の地位に立たなければならないのに。

「大丈夫だよ、シャルル」

シャルルは泣いており、何も答えなかったが、行き場のなくした手を動かしてレディシアの背中に回した。

まだ、昼下がりの事であった。

それから夕方になり、ようやく泣き止んだシャルルはレディシアの手を握り締めていた。

「シャルル、また明日」

もう帰らないといけない時間らしい…シャルルは名残惜しそうな目でレディシアの手を見つめていたが、仕方無いと手を放して別れを告げる。

「またな」

涙声でレディシアに向かって言った。

側にいてと言えばレディシアは側にいてくれるだろうか。
でも、言わなかった。

アクロイドを奪われた悲しみ、怒り、憎しみ…抑えがたい感情と何もかもを滅茶苦茶にしてしまいたい衝動をレディシアにぶつけるのは酷だ。

彼を傷付けてはならない…彼を守らなければならない。

シャルルはアクロイドを失った悲しみを堪えながら家に入った。

「ただいま…」

「お帰り」

イザベラが妙に明るい声で返してきた。

「…お母さん」

シャルルは今にも泣きそうな声で母を呼んだ。

それを聞いたイザベラはハツとして、リビングまで歩いてきたシャルルの方に駆け寄った。

「シャルル!」

アクロイドの事を聞いたのだろうか…イザベラは泣いているシャルルを抱き締めた。

「シャルルッ!」

声にならない…イザベラはシャルルをひたすら抱き締めていた。

シャルルは二度目の涙を流し、母に体を預けて泣いた。

でもレディシアの時とは違う涙…。

アクロイドの死を突き止めようと、母を守ろうという堅い決意と自身を含むアクロイドの死を救えなかった者達への怒りと悔しさから流れる涙だった。

第三節：十字架（前書き）

君は知ってるかい？

俺は知ってるよ。

薄らと感じていたなんて言ったら君はきつと怒るだろうから。

目の前に広がるのは血で真っ赤に染まった残酷な世界。

第三節：十字架

シャルルはイザベラに知られないように、こっそりと勉強を始めた。一般の人間がアルデイ家の小姓になるには、難しい試験に合格しなければならぬ。

レデイシアに頼れば彼の護衛としてアルデイ家に潜入出来るかも知れないが、まずは実力でアルデイ家に認めてもらわなければ彼の力を借りても有力な情報を得る事は難しいだろう。

「はあ…」

溜め息が出た。もう何回目だろうか…溜め息をついたら幸せが逃げると言うのではないか。

（せっかく聖書やら歴史書やらを買ったんだ。勉強しないとな）

アルデイ家の小姓になるならば必要だろう。

後は炊事雑用をきちんとなしたら良い。

あと3ヶ月しかないが、必死に勉強したら何とかなる。

（今度、キース家に行ってみようかな）

キース家に行つて挨拶でもしようかなとシャルルは思ったが、イザベラの事を考えると心苦しいものがある。

それに噂では任務に行っていたカインが帰って来るらしい。

「兄貴…」

アクロイドの親友であったソフィアとシリウスの息子で家族ぐるみ

の付き合いをしていた。

「ソフィアさんとシリウスさんはどうしてるかな」

シャルルはカインと遊んでいたのでシリウスやソフィアとはあまり面識がない。唯一知っているカインも任務でなかなか帰って来ない。だから余計にカインが帰って来るといいう知らせは嬉しかったが、それはカインと再会した瞬間にかき消されるとは思わなかっただろう。

「母さん、カインさんのところに行つてきてもいいかい？」

シャルルは何の躊躇いもなくイザベラに向かって出掛けの許可を得ようと思ひ、問い掛けた。

「…ええ、なるべく早く帰って来るのよ」

肝心のイザベラの返事はどこか濁っていた。

イザベラの濁った返事にシャルルは戸惑いながらも

「…？…うん、分かってるよ」

と頷いた。

カインは任務を終えて帰って来たのだから忙しい…だからイザベラはそう言ったのだ。

シャルルはカインに会いに行くのが楽しみで何故突然カインが帰って来たのかという事を全く考えていなかった。

いや、予想もつかないだろう。

まさか、こんな展開になつていようとは。

「母さん！父さん！」

カインの声だ…シャルルはカインの悲痛な声を聞いてしまい、身を強張らせた。あの声は少し離れた刑場から響く声ではないか。この村は元々アルデイ家の刑場として使用されており、今でもここで凄惨な死に様を目の当たりにする事が多い。この村に名前がないのはそのため、アルデイ家の都合のいいように蹂躪されるだけの哀れで寂れた村だった。今は此処から3キロぐらい離れているので救われる事が多かったが、蹂躪されるだけの存在であることに変わりはない。

シャルルはこの村が嫌いだった、蹂躪されようとも抵抗せずに黙ったままにいるこの村が。

「兄貴はどこにいるのだろう」

カインはどこにいるのだろう。

この村はどうなってしまうのだろう。

蹂躪されたまま、悲惨な運命を背負うことになるのだろうか。

カインを探しながらもシャルルは全く別の不安が心に過っていた。

この村は近い将来、消えてなくなるだろうと。

カインの帰還はいつたい何を意味するのか、シャルルの心には不安だけが膨らむばかりだった。

「…あああつ！」

悲鳴？

シャルルは後ずさった…この声はレディシアの声ではないか。

自分よりもはるかに幼いレディシアが悲鳴を上げている…シャルルはいよいよ焦り、恐怖が芽生える。

「レディシア…っ！」

掠れた声しか出ない…誰か、誰でもいい。

シャルルは震えた声で助けを求め、渴望するがこんな人気のないところには現れるわけもなく。

「…待つてて！」

シャルルは一步踏み出した…レディシアを見捨てるものか。カインもレディシアも見捨てるものか、助けるんだ、必ず助けて見せるんだ。

アクロイドの言葉が蘇る…。

『シャルル、レディシアを守らないとなあ』

それに頷いた幼い自分…そうだ、我が身可愛さに逃げ出すなんてレディシアの兄貴分失格ではないか。

恐怖心を堪えながらシャルルはひたすら刑場の周りを歩いた。危険すぎる冒険をしているということが分からないほど子供ではない…もう直ぐ自分は1桁を卒業する年齢なのだから。

「兄貴！レディシア！」

少しも怖く無かった…レディシアを思えば、アクロイドを思えばこんな暗闇など少しも怖くなかったのだ。

…この刑場に踏み入れた事が、後の彼の幼い心をズタズタに引き裂くきっかけにもなるうとは知る由もない。

「…怖くない」

そつだ、怖くない。怖くないのに足が纏れて動かない。シャルルは悲鳴を上げて逃げたくなる心を懸命に抑えながら歩く。昼なのにこの場所は刑場と言う名前の影響なのか人氣がなく、どこか不気味えあつた。

「…誰か、誰か…」

思わず助けを求めたくなる。何と言つても彼もまだ10に満たないのだから当然と言つたら当然なのだがアクロイドの後を継いでアルデイ家に向かおうとしている彼がこんなことで泣き事を言っている場合ではない。必死に走りながら深い深い森の中に入っていく。

刑場は直ぐ近くにあるが、刑そのものは人が寄り付かない場所で行われる。しかし辺りには血生臭い香りと赤で染まっているため、やはり誰も顔を真っ青にして近寄らずに刑を行った後の始末を行う担当となつている人が護衛をつけて向かうだけだ。

「レディシア……！」

こんな場所に来るのは御免だがカインとレディシアを探して事情を聞かなければという思いが彼を駆り立てる。ありつたけの声で自分の弟分の名前を叫び、返答を待ちながら走る。暫く走っているとレディシアの悲痛な叫びとカインの怒鳴り声が聞こえてくる。

「カイン様！もうやめて！」

「うるさい！お前に何が分かるんだ！」

何やらもめているようだ…シャルルはカインの身に何かがあつてレディシアがそれを制止していると思ひ、走る速度を上げた。走れば走るほど2人の声が近くなる。

「お前だつてアルデイ家の幹部の息子のくせに！」

「やめて、やめて下さい！カイン様」

「離せよっお前に俺の何が分かるんだ、この愚か者め！」

「やめて！離して…離して！」

「裏切り者が！」

カインが怒りのあまりにレディシアに襲いかかるつとしていゝのではないか？

「兄貴！」

シャルルは走つて走つて…そして。

「兄貴、レディシア！」

レディシアの方を揺さぶるカインのところへ辿り着いた。しかし、そこに広がる凄惨な光景が幼いシャルルの心を容赦なく抉つた。

「ソフィア様?!」

グロテスク…そして悲劇。

カインの母親だつた女が倒れている。幸いにも彼の妹であるレイと弟のイザは共に修道院にいるからいいのだが。

「どうして…どうしてなんだ!？」

シャルルも錯乱しそうになった。

あんなに優しく誰からも慕われて、そして元々は孤児であったレイとイザを引き取り、まるで我が子のように育てていたのに。

イザが病弱で良かった。レイもイザもそのためにこの惨劇から逃れたのだから。

犠牲者が少なくて助かった。

そんな事を考える自分は冷たいのだろうか。

「母さん！ねえ母さん！」

恐らく彼は母の事で慌てて帰って来たのかもしれないとシャルルは察し、彼を宥めようとするレイディアの手を引いた。

「シャルル？」

「…帰るんだ」

無惨な姿にした者達に対する怒りと憎しみ、母を助けられなかった嘆き、これからどうすればいいのかわからないという不安、どうする事も出来なかったという絶望。

負の感情で冷静になれないカインに何を言っても意味がない…今の彼は何をすることも顔色すら変えず行ってしまうのだろうか。

「うん…」

納得がいけないと言わんばかりの表情を浮かべるレイディアにシャルルは少しだけ苦笑した。きっとこれが彼なりの優しさなのかもしれない。

しかし、優しさは時に凶器となることだってある事をレイディアは

知らないのだ。

「父さん…」

アクロイド…彼も自分達を守ろうとして自殺を図ったのだ…確信はないのにそんな気がする。やはり自分は真実を知る必要がある。

「レディシア、帰るよ。帰って母さんに話すから」
「…シャルル！」

レディシアは目を見開いた。確かにシャルルは並はずれた能力があるけれど、無謀過ぎる。

「大丈夫さ、お前と一緒になら何だって出来る」

危険な場所へ丸裸で飛び込もうとしているのに、いつもと変わらぬ自信満々な表情で言ったシャルルにレディシアは思わず頷いた。

彼はこう言う人なのだ。

例え、残酷な結末が待ち受けていたとしても、真実を知る事を断念しようとはしない。

家を目指しながらシャルルはごくりと唾を飲んだ。

第四節：別離（前書き）

焼け付くような感情が全身を駆け巡る。

凍り付くような寒さと焼け付くような熱さが支配し、交錯する。

様々な感情が入り乱れるこの時、この空間で1人、失われていく温もりに悲しみを覚える。

嗚呼、もう戻れない。

故郷とも別れを告げる時が刻一刻と迫るばかり。

煌めいた瞳だけが、唯一の光。

第四節：別離

ちっぽけな存在。

直ぐに踏みつけられて終わってしまう悲しい存在。

それでも立ち向かうのは無垢で純粹で建前を知らないから。

純粹無垢な清らかな心が最大の悲劇だと、後に彼等は知ることになる。

枷のない清らかな心は時に仇となり、悲しみを生み、破滅へ導かれる。

「ただいま」

重々しい声でシャルルはいつもの挨拶をした。

「お帰りなさい」

母もまた返した。しかしいつもの弾んだ声ではなく、重々しくて真剣な声だった。

シャルルは戸惑った。

母の弾んだ声だけが支えだったのに、それすらも聞く事が出来ないということに深く傷付いた。

慰めてほしい、励ましてほしい。

自分の心は悲鳴を上げている。

「シャルル、此方に来なさい」

呆然とするシャルルの耳に透き通るような声が響く。

それは酷く冷たい声。

シャルルは怯えたような表情を浮かべてリビングへと向かう。

ガチャリ

シャルルはゆっくりとドアノブを回して入った。

静寂が怖い。

「シャルル……」

怒られると思った。無謀な真似をしようとしたことが暴かれて怒られると思った。

恐る恐る母の元まで歩いた。

「シャルル！」

母の発した声は怒りに満ちた鋭い声でも何でもなかった。

「母さん……」

どうして泣いてるの？

シャルルは苦しくてそれ以上何も言えなかった。

もういい歳しているのに赤ん坊のように抱き締められて頬擦りをされた。

「お父さんを守れなくてごめんね、怖い思いをさせてごめんね、シャルル」

恐らく刑場の事だと思った。

レディシアが何か言ったのかも知れない。

「母さん…」

背負うには重すぎた悲劇。

追い詰められて痛めつけられた。

「ごめんなさい」

いつも自分は心配させてばかり。

シャルルは目の前に訪れた悲劇に立ち向かえないちっぽけな存在である自分を責めた。

母もレディシアも守れない、カインの支えにすらなることが出来ない自分を責めた。

責めて、責めて、極限まで責めた。

「母さん、俺は」

母の温もりを感じながらシャルルは告げる。

「立ち向かう」

母は何も言わない。

「シャルル…っ！」

嗚咽を漏らすだけだ。

「残酷な結末が待ち受けようとも、俺は立ち向かう」

シャルルは母に甘えることを捨てた。
捨ててしまった。

「ごめんなさい、母さん」

やはり母は何も言わない。何も言わないが、それ以上に確かなものがある。

母も共に行くと言葉以上のものでシャルルに伝えている。

シャルルの脳裏には先ほどの赤い世界が過った。

残酷で凄惨で醜い世界。

自分達は逃げる事を赦されない籠の鳥。

そんな籠の鳥にも等しい子供が絶対的な権力に立ち向かうなんて無謀にも程がある。

「許してね」

それでも、血のように真っ赤な世界へ向かわなければならぬ理由がそこにある。

シャルルはイザベラにしがみ付き、延々と己の未来を考えていた。

「イザベラさんに言ったらしいけど…」

その頃、レディシアは一人で家の中にいた。シャルルが自暴自棄にならなければいいのだがと思い、イザベラに刑場へ行った事を友人に伝えてもらったのだ。

カインに強く揺さぶられたせいか、体中が疲れてしまった。痛いほ

どに肩を掴まれて揺さぶられて罵声を浴びせられて。

「カインさん…」

両親を失ってしまった彼の悲しみを誰が拭う事が出来ようか。
妹？弟？

いいや、幼い2人にカインの悲しみを拭う事なんて出来ない。カインの殺気に怯えるだけだとレディシアは考えた。
でも…。

「何で刑場で…」

カインの両親が特別な何かを背負っているのだろうか。

「少なくとも事故ではない」

事故ではない…そうならば残された結論は1つ。

「抹殺された…」

殺されたんだ、ソフィア様は。

レディシアは確信を抱いた。

アクロイドの死も気になるしソフィアの事も気になる。

「此処はやるしかないよね」

シャルルも自分と同じ小姓になってアルディ家に潜入して調査すれば真実が掴める。しかも自分の両親はアルディ家の中にいるし上手く言えば無条件でシャルルも…。

「母さん達に言えば無条件でシャルルを…」

レディシアは希望を得た。

子供が絶対的な存在に立ち向かう事なんて出来ない。

しかし、子供だからこそ見えるものもあると彼は思っていた。

(建前と言つに文字を知らない僕らはどこまでも深みにはまる)

レディシアは息を呑んで母が帰ってくるのをずっと待っていた。

これは、禁忌。許されざる禁忌を犯そうとしている。

ふと、レディシアの脳裏には禁忌と言つ言葉が思い浮かんだ。シャルルをアルデイ家のところへ行かそうとする事が禁忌と思われたからだ。

後ろめたい事をしたわけでもないのにレディシアはずっと怯えた。

(シャルル、君に会いたいよ)

怖いもの知らずの勇ましい少年に会いたい。

レディシアは孤独に耐えながら両親の帰りをずっと待っていた。

「母さん、何処へ行くの」

涙声でシャルルは母に問い掛ける。

「貴方の望んでいるところ」

イザベラはシャルルの手を強く握り締めながら答える。

彼女もアルデイ家に行くとした。そう、決めた以上向かう場所はただ一つ。

「キース家…か？」

「そうよ」

冷たい声で母は答えた。

ぞくりとするような凍てついた声にシャルルは再び恐れ戦く。

背中に戦慄が走ったがシャルルは懸命にそれを抑え、黙って大地を踏みしめる。

そこから先はイザベラもシャルルも無言だった。言葉など要らない。ただ黙って目的を果たす為に動くだけだった。

握り締める手に力が籠り、シャルルもそれに応えるように握り返す。重苦しい沈黙のまま暫く歩いていると、小綺麗な家が見えてくる…キース家である。

「ヘレン様、ジェイソン様、いらっしゃいますか？」

淡々とした声でイザベラが尋ねる。

レイシアの両親の名前であることをシャルルは把握しつつ黙っていた。

すると…。

「はい、どちら様でしょうか」

「…レイシア様、ね？」

「…もしかして！」

ガチャリ

レディシアはイザベラとシャルルであることが分かり、扉を開けた。

「イザベラ様にシャルル様」

「レディシア様、突然申し訳ございませんわ」

「…いえ」

レディシアはイザベラ達の訪問に最初は驚いたが彼女達が何故ここに来たのかを直ぐに理解した。彼も悶々としていたので丁度良かったのだ。

「どうぞお入り下さい…母も父も不在ですが」

か細い声でイザベラ達を中に招き入れた。

「有難う」

相変わらず淡々とした声で返すイザベラ。

シャルルとイザベラの強張った表情を見たレディシアは内心オロオロとしていた。

アクロイドを奪われた怒りと悲しみと憎しみが混じった気が体中から放たれていたからだ。申し訳なさが募るレディシアの耳に聞こえてきた声。

「只今、レディシア」

甲高くて耳に付く女性の声。

「…………お母様、お帰りなさいませ」

レディシアはシャルル達の激しいエネルギーに圧されながらも母に

言葉を返した。

ガチャリ

「まあ、イザベラ様にシャルル様」

突然の訪問に驚いた女性は更に甲高い声を発した。

イザベラは全く気にする様子もなくニッコリと笑ってヘレンに向かって恭しく頭を下げた。

「ヘレン様、貴方の帰りを待つておりました。本当はジェイソン様にお話があるのですけれど…」

「ま、まあジェイソンに？でも今は任務で家には帰って来ないのですよ。私でよろしければ…」

ヘレンは笑みを浮かべてイザベラに座るよう促し、話を切り出した。

「何か御用ですか？」

「ええ、レディシア様とシャルルの事で少しお話があるのですよ。

ヘレン様」

「そうなのですか…」

このやり取りをシャルルとレディシアは慌てふためきながら聞いていた。恐ろしい程のエネルギーが部屋中に迸る。少しでも触れたらこのエネルギーによって千々に引き裂かれてしまいそうだ。

「是非とも息子シャルルをレディシアと同じところに入れてくれませんか？レディシア様も一通りの講義を受けるのでしょうか？シャルルも是非アルディ家のお役に立てたいのです。シャルルもそう望んでいますから、そのためにも貴女の御力が必要なのですわ」

と言って申請状を突き付けた。傍から聞いたら何と冷徹な女だと思
うだろう。アクロイドの仇打ちに息子を利用するとは何事かと思っ
に違いない。

「…シャル様も望んでいるのですか？」

ヘレンの問いかけにシャルは口角を上げて頷いた。

ぞくりとするような笑み。

レディシアは顔を強張らせた。

こんな凍てついたシャルの笑みを見た事がない…口だけで笑みを
作った彼にレディシアは恐怖を覚えた。

「ええ、是非とも勉強を重ねてアルディ家に貢献したいと思ってお
ります」

淡々と、感情のない言葉。

「…レディシア、お前はいいの？」

ヘレンの問いかけがレディシアに向けられる。

こくりと首を縦に振るレディシアにニッコリと笑ったヘレンはイザ
ベラの方に向かって

「分かりましたわ。推薦状を送っておきますね」

と言った。

推薦状と言うのはアルデイ家の最高幹部のみが良き人材を見つけ、決定権を持つ王家の当主に向けて推薦する人物について詳細に記載して送ると言うもの。

「有難うございます。くれぐれも確実に送って下さいね？」

レディシアはヘレンに見えないように頷いた。それと同時にヘレンもこくりと頷いた。

そんなことよりも仇打ちに捉われてしまい、正気を失いそうになるシャルとイザベラの身を案じていただけだった。変わってしまう、悪い方向に物事が動き出す。

じわじわと何かが動いて行くのが分かった。

「成功したわね」

「うん」

まだ成功したわけではないことイザベラとシャルには分かっている。しかし、何故だか知らないが確実にシャルがアルデイ家の幹部になれると言う確かな手応えを感じていた。

アルデイ家は確実にアクロイドの息子であるシャルを囲い込んでおこうとするだろう、野放しにしていたらアクロイドを超える存在になるかもしれない。

そうなってしまうえばアルデイ家は更にアクロイドの事を隠蔽し出すだろう。その前にシャルを内部に置いておけば向こうは安心し、油断をするだろう。

「母さん、大丈夫かな」

シャルルはイザベラに問い掛けたが、彼女は自信満々にシャルルに向かって

「大丈夫よ、何れ不満が溢れるわ」

と言った。

イザベラは近い未来を見ているとシャルルは思い、母には一生敵わないと苦笑した。

母のように冷徹で逞しくなりたいとシャルルは決意し、家に帰って行った。

「…あれが、シャルル・レイモンド…アクロイドの息子が」

イザベラとシャルルの様子を遠くから見ている男はぽつりと呟いて考える。すると後ろにいたもう1人の男は

「ホーリア様、アクロイドの息子をどうするのですか？」

と問い掛ける。

勿論答えは1つだ。

「アルデイ家の…私の部下として採用しようか」

その答えに後ろをついていた男達は驚きの声を上げる。

「アクロイドの息子ですよ？内部に入れたら危険です、それにシャ―少年…かなりのキレ者です。ヘレン達のところに行ってわざわざ推薦状を書いてもらうよう申請するなんて！」

普通、ヘレンのような地位にいる人間にわざわざ推薦状を書いてもらうよう頼まない。口だけで契約を交わし、当主に言えば小姓として採用されるのだ。しかし、シャルル達はそれをせずに推薦状を書くように申請した。

申請書を出された以上は書くしかない。それを拒んだら批判されるからだ。只でさえ人手が不足していると言つのに自らアルデイ家の小姓として志願してきた人間を拒むことは出来ない。

「良いではないか」

ホーリアは満足そうに言つて笑つた。
慌てるのはホーリアの部下達。

「ホーリア様…しかし、それではラーナ様が…」

と言つて説得するがホーリアはすっかりシャルルを気に入つたようだった。

「貴様等はもつと楽しむべきさ、クツクツク…」

部下達に楽しめと言つた後、ホーリアは低い声で笑つた。

シャルルの決意を。

イザベラの慈愛の心を。

それらをただ嘲笑つた。

唸るように低い笑い声が辺りを震わせる。

「法王様に伝えよう、シャルを私の部下として採用することをな」

やはり唸るように低い声でホーリアは言った後、身を翻した。

「行くぞ」

「御意、ホーリア様」

ホーリアの命令に頷いた部下達は静かに歩き、あっという間にその姿は見えなくなった。

第五節：血染めのロザリオ（前書き）

煌めく瞳を見つめた。

何も知らない無垢で純粋な瞳だった。

少年達、お前たちはまだ知らないだろうか？

お前たちの恐れを知らぬ心が更なる悲劇を生み出そうなんて考えたこともないだろうか？

少年達、知らないままで平和に過ごせばよかったのにあこがれの存在を失った事による憎しみが止まらずに暴走し始めているようだよ。

それでも恐れないと言えるのかい？

なあ、君にはわかるかい？

残酷な結末を目の前にした者達の辿る結末もまた血に塗れた残酷な結末でしかないと分かって進もうとしているのかい？

第五節：血染めのロザリオ

「…法王様、ホーリア様がお戻りになりました」

暗い広間で凜とした声が響き渡る。

「…大方シャー少年の事だろう」

シャルルの名前が出たことに周りは驚いた。

「アクロイド・レイモンドの息子！」

アクロイドと同じくかなりのキレ者だと言っ噂が広まっている。

ホーリアが何故シャー少年を偵察しに行ったのか。

「シャー少年をどうするつもりなのですか？」

その疑問を法王は抑揚のない声で答えた。

「…ホーリアはシャー少年を手下にするつもりだろう」

その瞬間、一斉に声上がる。

「…なっ！ホーリア様は一体何を考えておられるのか！」

「我がアルデイ家の中に穢らわしい者共を誘うとは！」

ホーリアの行動が読めない魔術師達は焦りと苛立ちから口々に彼を罵る…法王も頭を抱えてしまった。

宥めようにもホーリアの行動が読めない。

彼にとってシャルルは邪魔な存在である筈なのにどうしてこのような事を。

(…兄上、貴方は何をお考えになっておられるのですか)

疑問は次々と浮かんでくるが、名前だけの己ではホーリアに意見等言える筈がない。

「アイシア様、どう致しましょうか？」

幹部達の問いに法王・アイシアは険しい表情を浮かべながらも凜とした声で言い放った。

「…ホーリアをここに連れて参れ」

若々しい顔立ちとは裏腹に法王らしい威厳の籠った声で命令を下した。

…ホーリアと法王達の亀裂がどんどん広がっていくのみだった…。

野原で語らうレディシアとシャルル。

「大丈夫なの？」

心配そうなレディシアの問いかけにシャルルは曖昧に笑っただけだった…彼はレディシアに嘘をついていた。

アルディ家に行くのは父親の死を追求する為だけではないからだ。もっと、もっと先の目標の為にアルディ家に潜り込むのだ。

後戻りできないところまで進んでいて、どんどん冷酷で孤独になっ

ていく。

(レディシアには笑ってほしいんだ)

何も知らなくていい。

無垢な少年の煌めく瞳の輝きを奪う事なぞしてはいけない。この少年に話すと言う事は共に堕ちてくれと言っているようなものだが、もしも……もしも、目的を話したら少年はどうするだろう。

……もしも、彼にこの手を差し伸べたら……。

幼いながらに禁を犯す事に対する後ろめたさと逃れようもない快楽を覚えた。

いつそのこと、奪ってしまおうか。自分の未来を映し出す黒い闇の中へ引き摺り込んでしまおうかとも考えてしまう。

憧れだった父親と親しみを感じ、尊敬していた男女を奪われたシャルルの心は酷く歪んでしまった。

この歪みを忘れさせてくれるのはレディシアの穢れのない瞳だけだった。

しかし同時に激しい衝動を覚えてしまう。

滅茶苦茶にしていみたい。

負の衝動とそれを止める理性が入り乱れて激しい葛藤が続き、思わず眉間に皺を寄せてしまう。

「……シャルル？」

レディシアはシャルルの内なる葛藤に気付くはずもなかったが、やはり彼の様子が可笑しい事には気付いたのか、首を傾げながら問い

掛ける。

ドキリ。

シャルルは動揺してしまい、心臓が激しく動くのを感じた。

…レディシアは優れている。相手の心を鋭く見抜く能力を持っている…不幸な事に。

アルデイ家にはそのような人間は邪魔なだけだろうと思った。何故ならばアルデイ家が求めているのは使い勝手のいい抗う術を持たない非力な存在だからだ。そう、血に塗れた上でアルデイ家は成り立っている。それは仕方ない、全てを形成する上で血を流す事は多かれ少なかれ必要なのだ。そして重要なのは血を流す多くの儂い存在だ。

抗う術を持たず、感覚が麻痺しきったか弱い存在が欲しいのであって心を見抜く能力を持つ存在は邪魔なのだ。

…相手の思惑をも見抜き、崩壊させる力を持っているからだ。

アクロイドはどちらなのだろう。

抗う術を持たないか弱くて脆い存在なのか、それとも…。

「イザベラ様に言ったの？」

踏み入れてはならない領域に踏み込んでしまったかもしれないと罪悪感を感じたのかレディシアは気を取り直して話題を変えた。

先程までイザベラの元にいたシャルルは突然飛び出してきた。偶々そこにいたレディシアに「いつもの場所へ行こう」と誘ったのだ。

勿論、レディシアがシャルルの誘いを拒む理由などなく何の躊躇いもなく頷いたが、イザベラが心配しているのではないかと心配して

いたのだ。黙って出てきたなら即座にイザベラの元へ連れて行かねばならないと感じていたが、心配は無用だった。

「母さんは知ってるよ」

淡々とした声で返答してきた。

「…そ、そうなの」

レディシアはホツとしたと同時に新たな不安を覚えた。

淡々としたものだったからだ。明るく調子に乗って余計な事を洩らす彼はどこに行ってしまったのか…彼はどうしてしまったのか。

(分からないよ、シャルル……)

シャルルの変わっていく姿を見るのが苦しかった。

唯、苦しくて辛かった。

「…シャル少年はどこにいるのか」

殺風景な村を通り過ぎて刑場へ向かうのはホーリアである。

「法王が私を呼んでいたみたいだが…後にしよう。今は…アクロイドの息子を拜んでおきたいのでな」

唸るような低い声で笑いながら足音一つ立てずに進んで行く…幼い子供等はいつたいどこにいるのか分からないが時間は十分にある。何せ子供なのだ、そんなに遠くにはいかないだろう。

アクロイドの息子であるシャル・レイモンド…アクロイドが命を

懸けて守り抜いた息子だ、あの誇り高くて権力に屈しなかったアクロイドが権力に屈して殉死した何よりの理由は幼い息子だ。

「…子供の為なら命をも懸ける事が出来るものなのか？」

ホーリアの脳裏には疑問が浮かんでいた。アクロイドは死をも恐れずに息子達を守り抜き、己の消滅と共に全てを葬り去った事に疑問等が浮かび上がる…どうしてこうなるのか分からないのだ。

「両親とはそういうものなのか？」

もしも両親が子供の為に命をも懸ける事が出来るとするならば自分は…。

「私は………」

ホーリアの顔に陰が差す…先程までの爽やかな青年の顔は何処にいったのだろう、その表情は絶望に満ちていた。

虚無、虚無、虚無…広がっていく底のない無の表情。誰も見る事出来ない無の表情、何も映さない虚ろでおぞましい表情がそこに浮かび上がる。

「……母上」

抑揚のない声が徐々に広がっていくのみ。

カツ、カツ、カツ…。

雑草を踏みしめながら揺ら揺らと漂つように森を歩いていく。

「レディシア、もう遅くなりそうだね」

あまり空が見えない森の中で座って話していたレディシアとシャルル。空がほとんど見えない状況でも時間が分かるようになったのは幼いころから森の中で遊んでいたからだ。時には虫を捕まえたり花を摘んでは指輪や冠を作ったりしているので自然と時間が分かるようになったのだ。

「うん、シャルル…大丈夫なの？」

意外と鋭い少年の気遣いにシャルルは笑いながら頷いた。この笑顔も少年には作り出したもののではないかと思わせてしまうのだろうかと一抹の不安を覚えながら立ち上がり、歩き始めた。

「…何かあったら言ってね…僕、シャルルの力になりたいんだ」

レディシアの心配そうな目にシャルルは相変わらず何も言わずに頷いた。

その後は特に会話をすることもなく黙々と自分達の家を目指して歩いてきた…不気味なほど真っ暗で何も見えない。

レディシアは懸命に恐怖心を抑えながらシャルルの歩調に合わせて進んで行く。置いて行かれまいと必死にシャルルの歩調に合わせて進んで行く。

カツ、カツ、カツ…。

2人の歩調とは明らかに違う…革靴特有の音が反対側から響いてくる。

「!？」

レディシアとシャルルはその音に気付き、警戒しながら進んで行く。もしかしたら悪党なのかもしれないと身構えながら進む。シャルルはレディシアを庇うようにして前に出て進みながら革靴の音の主を確かめようと音を潜めて進んで行く。

「……シャルル・レイモンドか？」

ぴたりと止まり、低い声が彼らに向かって問い掛けている。

「……誰なんだ」

謎の声には答えずシャルルは警戒心を剥き出しにしながら問い掛けた。

「……そこにいるのはシャルル・レイモンドとレディシア・キースだろうか？」

再び問いかけながら声の主は徐々に姿を現す。

ザ……ン。

風の流れが一瞬にして止まったような気がする。

2人の少年たちは風の流れが止まり、時間さえも止まったような感覚に陥り、目の前に現れた男をじっと見つめる。

気品を感じられる物腰と穏やかな口調。しかし、彼を取り巻く穏やかな空気とは裏腹に隙のなさをひしひしと感じる。

「お前が、アクロイド卿の息子かな？ シャー少年」

嘘を許さぬ鋭い目…この目を前にして嘘を言う事はシャルルにはとても難しいように思えた。

「…ええ、シャルル・レイモンドです」

彼らよりも何センチも高い男に向かって答える。その様子に満足そうな表情で頷きながら薄く笑みを浮かべて彼も名前を言う。

「……そうか。私の名前はホーリアだ…本名ではないがな」

本名ではない名前をシャルルに向かって言った後、じっとシャルルを見つめていた。

一番会ってはならない人間と会ってしまったのではないかとシャルルは息をのみながら鋭く切れた目を見つめ返した。

目をそらしてはいけないような気がして、シャルルは恐れながらもレイシアの手を強く握り締めてホーリアと名乗った男の目を見つめた。

全てを凍りつかせる事が出来るのではないかと思わせるような鋭さがその眼差しにはあった…全身から放たれる穏やかな雰囲気とは裏腹な凍てついた眼差し、目の前の人間の真の姿を映しだせずにシャルルは戸惑っていた。

やがて男の方から目を逸らし、シャルルの方に歩み寄って空いているもう一方の手を握り締めて

「君とは近いうちにまた会うかもしれないから一度確かめてみたかったのだ。突然話しかけて済まなかったな」

そう言つて手を放して、背を向けて去る前に一言

「また会おう、シャー少年」

しばしの別れ際の言葉を彼に向かって言い放つて立ち去つた。

シャルルは呆然とその後ろ姿を見つめながら先程ホーリアに握られた手をポケットの中に入れた。

人間味を感じない冷たい手の感触が生々しく残っていた。

「…あの人、どうしてシャルルの事を知ってるのかな」

レイディアが不意にシャルルに向かって疑問を投げかけたが、シャルルは呆然としたまま答えなかった。ホーリアに近づけばアクロイドの事が全てわかるのではないかと彼は思い、その思考に捉われて動けなかった。

そして、ホーリアの姿には常に漆黒の闇が漂っているような気がしてならないとも感じた。

どちらにせよ、彼は危険だとシャルルはごくりと唾を飲み込んだ。

「…帰るよ、レイディア」

一刻も早く此処から立ち去りたいと感じたシャルルはレイディアの手を引っ張ってずんずんと早歩きで帰路を辿っていた。

「…あれが、シャー少年」

成る程、確かにアクロイドよりもキレている。

彼は自覚がないのだろうか頭の回転は普通の少年よりもずっといい気がした。少年ながら思わず尊敬の言葉を洩らしたくなる。

そしてあの瞳。

絶対的な権力に敵わないと絶望しながらも必死に抗おうともがいている。彼の瞳には憎悪と正義という相反する光が交錯していた。

「出会ってはならなかったのかもしれない」

私もお前も別々の世界で生きて行かなくてはならないのかもしれない。逆転した世界で生きる己と少年が今、同じ世界に降り立とうとしている。

「アクロイド卿、貴殿の息子も貴殿と同じ結末を辿ろうとしているぞ？貴殿の想い…無駄になるかもしれない」

残酷な結末を前に少年はどう出るのだろうか…アクロイドのように逃れるために死を選ぶだろうか。それとも彼は死をも恐れず戦うのだろうか。

どちらにせよ、悲劇は終わらない。

「…本当に、また会うのかもしれない」

恐らく彼は己にとって恐れるべき存在であり、尊敬すべき宿敵ライバルなのかも知れない。銀色に輝く髪の少年の端正な顔を森の中にひっそりと佇む廃墟の教会の中で1人ホーリアは物思いに耽っていた。もう決まっているけれども。

「あの少年は私の部下だ」

そして宿敵であり同志だ。

ホーリアはフツと笑って持ってきた紙とペンを取り出して書いた。

推薦状に『採用』と。

そして彼は振り返って下を見て、1つ転がっている血染めのロザリオを手に取った。

そのロザリオは血に染まった己の歩く道を忠実に表現しているようにも見えて仕方なかった。

「…そこにいるのだろうか？」

ホーリアはロザリオを拾いあげると声をかけた。

「気が付いていたのね」

帰って来たのは甲高い女の声だった。

「義母上、私の事は何もかもお見通しなのかな？」

挑むような口調で問い掛けてみると女はヒールの音を響かせながら笑った。

「分からないわ、何でシャールを引き入れようとするのか」

分からないという言葉とは裏腹に勝ち誇ったような笑い声を響かせながらホーリアに向かって更に言った。

「ホーリア、シャルルに何を期待しているのかしら？」

甲高くて冷酷な声が響き渡る。

ホーリアはそれには答えず、姿を現した女に推薦状を渡して言った。

「あの少年は偉大さ、アクロイドよりもずっとな」

確信を得たような言葉に女はさも可笑しいと笑いながら推薦状を受け取って言い返した。

「ならば明日、アルデイ家に連れて来なさいよ。見せてもらうわ、貴方の確信とやらをね」

相変わらず冷酷で勝気な女の甲高い声が響き渡るが、ホーリアは何も言わずに女の顔を見つめていた。

第六節：嫌悪（前書き）

何故繋がってしまおう。繋がってほしくなかった。

僅かな空間だけでもいいから此処にいたかったのに。

繋がってしまったらもうどこにも居場所がない。

知りたくない、認めたくない。

そして、出会いたくない。

願わくは、時間よ、止まれ。

永遠に時間が止まって進まなくなればいいのに。

第六節：嫌悪

運命とはとても恐ろしく、悲しくて憎いものだった。出会いは突然に訪れる。

何故、お前と会う事になるのだろう。

(……イリア)

「法王よ、失礼した。少し用事があってな」

ホーリアは法王の君臨する部屋に入り、対峙する。

「……大方シャルルの事でしょう、兄上」

法王も元を辿れば彼の弟である、兄である彼の行動を理解できず首を傾げていた。理解したいのに出来ず問い詰める事も出来ず彼は悲しかった。

「ああ、シャル少年の事だ」

迷うことなく答えた兄の顔はこの上なく悪魔に近い。

「シャル少年はまだ10歳だ、貴方の部下にするという事は事実上最高幹部になると言う事でもある。貴方には分かっているのですか」

法王は思わず立ち上がって兄に向かって叱咤したが兄はその叱咤さえせせら笑う様に言い放った。

「10歳？私には関係ない事だな」

「兄上！」

法王は言葉を遮ろうと叫んだが無駄だった。

「ほう、お前は私に命令するか。まだ5つだった私を平気で捨てた色狂いの母に軽蔑の言葉さえ言えないお前が？」

「……兄上」

「母やその息子であるカインはシャー少年を大事にしていたと言うではないか……クッククク」

低く、冷たく、唸り、己をこの世に生んだ母や母に関わる存在全てを罵るように彼は笑う。

「壊してやるさ、カインの大事なものを全て奪って壊してやる。愛する存在も全て壊して孤独と言うものがどんなものかを存分に味わうがいい。あんな、色狂いした母の息子など無様な姿を晒して破滅すればいいんだ」

そして彼はギリツと齒軋りを少しして法王に向かって牙を剥く。

「邪魔をするなよ、アイシヤ・エルヴィ・ノール」

「……兄上……」

法王の呟きも虚しく兄であるホーリアには届かない。牙を剥いた後、呆然とする法王を一瞥して彼は黙って身を翻して謁見の間を去った。

「兄上……貴方の憎悪はいつか貴方自身を破滅に導くのに、何故それに気付かないのですか？」

止められなかった。止める事すら出来なかった。

兄が憎むと言うなら己も憎もう、兄が邪魔だと言うなら排除しよう、彼は口に出してこそ言わなかったが幼かったあの日から兄に忠実でありたいと思っていた。だから強く言う事も出来なかった。血は通っていないけれど彼は自分にとって慕うべき唯一人の兄だ。でも、兄は知らないのだ。

「無知は罪と、貴方が私に向かって言った」

兄は母やカインに心を奪われてしまった事を知らないままなのだ。彼は自覚なしに母やカインに愛してほしいと請うている。変わる事が出来るなら、変わってほしい。兄に愛する事を知って欲しい、カインや母を愛して欲しい。それが出来ないなら、カインだけでも愛して欲しい。

「兄上、それは……………」

「くそっ！」

法王であるアイシアは最近己に対してとても煩い。義理の弟でありながら己がつくはずだった法王の地位を奪われたがその事でアイシアを恨んだ事もない。法王の地位など必要ない、欲しいならくれてやる。ただ、許せないのはアイシアに己の心を見抜かれ、踏み込まれる事だ。

「…ラーナの息子だからああなるのか」

ラーナ。その名前にホーリアは忌々しささえ覚える。

ラーナは己の叔母であり母の親友だった。近くにいなながら自分に向かって手を上げる母や色狂いになった父を止めなかった事が忌々しかった。

何度ラーナに助けを求められても「私は何もできない」との一点張りだったラーナが許せなかった。

そのくせあの女は人の心をまるで自分のもののように詳細に読み取って入り込む。

不気味でミステリアスな女。

「ラザニア・エルヴィ・ノール。あの女には相応しい名前ではないか」

そう、あの女は女神のように笑いながら近づく人間を虜にしていられなくなったなら平気で人を斬り捨てる。己もいつあの女に斬り捨てられるのか分からない。

「たくさんだ、振り回されるのもかき乱されるのも」

あの女も数か月前に死んだとされるカインの両親に振り回されるのも。

…愛する事も全て疲れてしまった。

「伯父が死んで、私の心は渴いてしまった」

初めてだった。孤独で無知な自分を慈しんでくれたのはあの伯父が初めてだった。勿論あの伯父の正体も知っている、恐らくあいつも知っているだろう。

「シリウス…何故お前は私を引き取った、お前は私に何が言いたかった」

ホーリアは一人で問いかけながら目を閉じて思い出していた。数ヶ月前、彼はいつも通りに伯父のいる離れの部屋へ向かい、惨劇を見たあの日を。

「伯父上、私です」

いつものように呼んでくれた。

『お帰り、ホーリア』って呼んでくれたから、今日も優しい声で呼んでくれると思っていたのに。

「……伯父上、私です、ホーリアです、いらっしやるのでしょうか？」

何度もドアの前で問い掛ける。

（伯父上、私を呼んで？）

期待を込めてずっと待っていたけれど、いつまで経っても沈黙が続くだけで返事が来る事はなかった。

如何して来ない？

何故返事をしてくれない？

ホーリアはすっかり焦ってしまった。混乱し、わけが分からなくなってしまう。

どうしたらいい？と誰かに助けを求めたくなる。

でも、誰も助けてくれはしない、誰も手を差し伸べてくれはしない。親さえ自分を放り出して逃げ出したのに赤の他人が厄介な自分に手を差し伸べるものか！ホーリアはそう思い、かぶりを振って取っ手

を回して開いた。

「……………あつ……な、何で……………！」

ホーリアはガタガタと身を震わせながらその場に膝をついた。目の前に広がる凄惨な光景、漂う血生臭い香り、流れ落ちる赤く真つ直ぐな筋。

「シリウス……………」

体を震わせながら彼はただ恐れた。

「シリウス、何故こんな事に……………！」

目の前に広がる真つ赤な光景はまるで彼の進む道を示しているかのよう。

「……………こんな事なら、孤独で良かった……………孤独なまま、この家に絶望しておけば良かった……………シリウス」

救い出して、置き去りにして一人で死ぬ位なら。中途半端に手を差し伸べないでくれ、置き去りにして死ぬ位なら救い出さないうで孤独なまま彷徨った方が良かった。

「シリウスーッ……………！」

泣いた。絶望と、悲しみと、孤独に耐えきれずに泣いた。シリウスが何故死んだのか分からないけれど、置き去りにされた事が辛かった。

思い切り泣いた後、フラフラと立ち上がって部屋を立ち去ろうとし

た時だった。

「……セイシエル、何をしているの」

「……ラーナ…様？」

いつの間に部屋から入って来たのだろう。金色の長い髪を靡かせながら暗い部屋の中に佇んでいた女がしゃがみ込んでいる己をじっと見下ろしている。

「何で此処にいるの、そこは許可されていないわよ」

いつもと同じように響く厳しい叱責の音がセイシエルにはいつも聞く彼女の声と一線を画していて混乱してしまった。

憂い、悲しみ、苦悩…それらが多分に含んでいるような声だった。

「申し訳御座いません」

混乱してしまった己の口から咄嗟に出たのは謝罪の言葉。何かいけない事したら叱責を受ける、罰を受ける。少しでも受ける罰を軽くするために跪いて許しを請う。彼にはそれしか術がなかった。

「出て行きなさい」

何も言わずに彼女はこう言った。

セイシエルはオロオロしつつも彼女には逆らえず走って部屋から飛び出した。

考えないようにしたけれど目を閉じればあの時の光景が浮かび上がる。与えてもらえる筈の無いものを求め過ぎて心が渴いてしまった。

正体の無い、けれども確かなもの。それだけが欲しかった、寧ろそれ以外欲しくなかった。

「何で求めてしまうのかな」

1人呟いてホーリアは目を閉じると規則的な呼吸をして眠りに落ちた。

まだ終わらない、求めるものを得る事すら出来そうにない。ただ、待っているのは虚無だけだった。

闇に吞まれてしまうような気がして、底無しの穴に落ちてしまうような気がして、全てを真っ赤に穢してしまうような気がして。

心は荒れ狂うほどに求めているのに、無理をして抑制しようとする。己の女々しさと精神的な脆さに嫌悪し、それに苛まされながらホーリアは意識を手放した。

ガチャリ。

ホーリアが眠っている部屋に入る者がいた。

「ホーリア」

規則正しい呼吸をしながら眠っているホーリアの前に現れたのは彼が恐怖し尚且つ嫌悪する女であった。

「貴方の母親にそっくりね」

穢れの無い寝顔を見ながらぼつりと呟いた。もういなくなつた彼の母親に瓜二つな表情を見つめながら悲しそうな顔をしていた。

「ねえ、ホーリア」

悲しそうな声を発して彼女は言葉を紡ぐ。残酷で、恐ろしい結末を。

「シャー少年は何れ死ぬわよ、貴方が密かに希望を託そうとしていた天才少年はね」

シャルはアクロイドの掴んだ真実を掴もつと背中を追いかけている。もう、彼は後戻りできない。

いや、彼もホーリアも誰もかも後戻りできないところに来た。

「ホーリア、それでも貴方は求めるのかしら？愛情を」

その問いかけにホーリアは答えずに眉を寄せながら眠っているだけだった。その様子に彼女は真つ赤な唇を薄く開いて笑った。

「鳴けないカナリア」

心では求めているも表に出す術を知らずに佇むだけ。心はこんなにも鳴いているのに誰も聞き取る事が出来ない。

綺麗な声で鳴く事が出来ないカナリアはいつになったら己の心を認める事が出来るだろうか。

微笑んだまま彼女はホーリアの部屋を出て行った。

まだ夜は明けない。

彼は気付かないまま、広がっている安らかな闇に意識を預けていた。

「起きて下さいまし」

何だ、この声は？

声にならない声で問い掛けて、ハツとして考えた。

あの女の侍女かも知れないと思い、煩わしい手を振り払った。

「お兄様、起きて下さいまし！」

……お兄様？ではあの女の侍女ではない。じゃあ誰なのだ？

ホーリアは声にならない声で問い掛けてみるがやはり聞こえるはずもなく、心地良い眠りから目覚めて軽く辺りを見回す。

「お兄様、やっと起きて下さったのですね！」

左横を振り向いた時、金色の髪を靡かせた少女が笑顔で此方を見ている。

「……………君は？」

どくん、どくん。

心臓が激しく高鳴っておさまらない。聞きたくないのに何処か心地良い声が骨の髄まで染み渡る。

ああ、この声は……………この声は。

「私？イリアと言います。宜しくお願いしますわ、セイシエルお兄様！」

少女は相変わらず無邪気に笑って名前を言った後、迷うことなく手を差し伸べる。

「……宜しく、イリア」

心臓は鎮まらない、寧ろ早鐘のように鳴り続ける。もう抑え切れない、この激情は。

(母上……シリウス……カイン！)

繋がってしまった輪はもう壊せない。

ホーリアは完全に自分が孤独になってしまった事に気付き、抑え切れない憎悪と悲しみで顔を歪めたが幼い少女には何故彼が顔を歪めるのか分からず、ぼかんとした表情で見つめていた。

第七節：逆転世界（前書き）

元々は交わるはずの無い世界。

綺麗で眩しい箱庭のような世界にいた僕らは、突然暗く醜く残酷な世界に降りた。

否定しないで、その道を選んだのは紛れもなく僕達だった。

君の心の欠片でも理解出来たら、こんな世界、何も怖いものはないのに。

苦しいよ、君の心が全く見えないんだ。

置いて行かないで、破滅でも構わない、一緒に連れて行って。

第七節：逆転世界

「貴方はイザベラ・レイモンドですね？」

シャルルの家に突然やって来たのは黒服の男達だった。

「ええ、貴方達は？」

イザベラは警戒している様子を隠すことなく黒服の男達に向かって問い掛ける。この男達の正体には薄々気付いていたが一応聞いてみる事にした。

「我々はホーリア様から派遣された者です」

「……ホーリア……セイシエル・ドウ・アルデイ様ね」

「おや、よくご存じで」

「カイン様の父親違いの兄ですものね、セイシエル様は」

「流石はイザベラ・アルベルト。我々の下についていたアルベルト家の娘だけはある」

「甘く見ないで頂戴」

イザベラは黒服の男達を睨みつけながら言い放った。

彼女は元々そこそこの地位についていた貴族の娘だったがアルデイ家の策略によつて吸収され、地位を失った。

両親も親戚も彼女は失くした。絶望し、命を断とうとした時に偶々出会ったのは当時はまだ院長の助手を務めていたアクロイドだった。そのアクロイドもいなくなり、彼女は再び孤独になった。

本当はシャルルをアルデイ家の幹部に渡すつもりはなかった。幼い彼には真つ当な道を進んで欲しかった。このような歪な中でなく、無邪気な子供でいてほしかった。

「さて、貴女の御子息であるシャルル・レイモンドを此方に渡して頂こう」

「ええ。言われなくても」

シャルルは諦めたりしないだろう。アクロイドを取り巻いていた環境を知る事を、アクロイドを破滅に追いやった者達を打ちのめす事を、アルデイ家に踏みにじられた事に対する報復を。彼は誰が説得しても聞き入れたりしないだろう。

「シャルル、出てらっしゃい」

レイディアと野原で遊び、家に帰っていたシャルルを呼んだ。

「なあに、母さん」

何も知らない可愛い子供の声を聞いたイザベラは胸が痛かった。

「誰、ですか？」

やや小走りで玄関に来たシャルルは黒服の男達を見上げながら恐る恐る問い掛けたが、薄々は何者なのか知っていた。

男達もシャルルが自分達の事を把握している様子を見て

「君には今からアルデイ家に来てもらいたいんだ」

淡々とした声で端的に言った。

「分かりました」

シャルルは頷き、あっさりと同意した。近いうちにこうなる事は分かっていたが、思いのほか早くて少々戸惑ってしまったけれど。既に手荷物を持っており、行く準備は万端だ。父親の身に着けていたネクタイピンを握り締めて黒服の男達の元へ駆けて行く。

「母さん、行って来る」

「いつてらっしゃい、シャルル」

いつものように言葉を交わし、シャルルは男達と共に玄関を出てアルデイ家に向かつてゆつくりと歩き出した。

道中は無言で、機械的に足を動かしていた。がっちりガードされながら歩く様は非常に惨めで自分には何をする権利もないのかと更に苦しくなったがそれでも無表情で唇を噛み締めて歩いていた。

無意識に手を強く握り締め、自分よりも遥かに高い男達を睨み上げた。

「：シャルル・レイモンド」

「何でしょう？」

自分を困っていた男の一人から声を掛けられ、シャルルは少しだけ上擦った声で返答した。

「疲れたか？」

思わぬ問い掛け。

シャルルはどう答えていいか分からず目を泳がせていた。

「答える事が出来ないほど疲れたみたいだな、シャルル・レイモンド」

シャルルが何も言わないので肯定と受け取った男は立ち止まり、振り向いた。

「なかなか凜としてるな。普通はもつと疲労している筈なんだがそこはやはりアクロイドの息子だな、彼もそんな風にしてた」

アクロイドの事を知っているようだ…シャルルは目を見開いて男の話聞いた。自分達の知らないアクロイドを知っているのだ、聞きたくて仕方なかった。

「彼はなかなか優れていて尚且つ誇り高い人物だった。惜しい男を失ったものだな、我々は」

「…何故、知っているのですか？」

シャルルは思いきつて男に聞いてみた。すると男はフツと笑って言った。

「彼はアルデイ家でも最高の位置についていた。大抵の人間は知っているからお前の事も知っている。アクロイドと同じくキレ者で侮れない少年と」

「……」

男の言葉にシャルルは神妙な顔つきで聞いていたが、彼は沈黙したままのシャルルに向かって手を差し出した。

「俺はアベル・オージリアス・マクレーン」

「アベル・オージリアス・マクレーン…殿」

シャルルは恐る恐る彼の大きい手を握り締めた。

すると黒服を身に纏っていた他の男も彼の方を向いて次々と名乗り

始めた。

「俺はラルク。こっちがルディアスにルキリス」

ブラウン色のショートヘアの男は隣にいる赤髪の男と赤色と茶色が混じった長い髪を靡かせた女を紹介した。

3人ともアベルの補佐として同行していたらしく、一言も発しなかったのだ。自分を連れてくるのはあくまでもアベルらしい。

「シャー少年って呼ばれているんだよな、シャー少年、もう直ぐつくから歩いてくれよ」

「あ、はい」

ルディアスとルキリスは会釈をしただけで直ぐに進行方向を向いたがラルクは笑顔を浮かべながらシャルルを気遣っていた。

人当たりのいいラルクにシャルルは幾らか心を落ち着かせ、頷いてまた歩き始めた。しかし、幾ら人のいい笑顔を浮かべても彼等はシャルルとは反対側の世界に住んでいる人間達だ。いつかは対峙しなければならぬ。

もう戻れない。

逃げる事も許されない虚無の地へ向かおうとしている。

対峙しなければならぬ幾つもの残酷なシーン。

知らないと言って投げだす事はもう許されないのだ、自分には。

自分の目の前に広がるのは、やはり真っ赤に染まった残酷な世界、そう思うと再び悲しみと怒りが込み上げ、表情が引き攣る。

沈黙が訪れ、誰も言葉を発することなくアルディ家へと向かった。

機械的に動く足に感情を失っていく様はやはり歩くことだけを覚えさせられた人形のようなだった。

気がつけばもう大聖堂が見えていたのだ。

「大丈夫か、シャルル」

問い掛けたのはラルクだった。シャルルは首を縦に振ってラルクに答えた。

「もう直ぐホーリア様と謁見する。粗相のないようにな」

今度はアベル、これにもシャルルは首を縦に振って答える。

シャルルが答えたのを見た4人はシャルルをガードしながら大聖堂の入り口まで急ぎ足で向かう。

がやがやと騒ぐ声も祈りを捧げる歌もシャルルには全く耳に入らず、全身の神経が大聖堂の入り口に集中していた。それ以外何も見えない、聞こえない。

アベルが扉の取っ手を握り、それを引いた。

「入れ」

淡々と指示するアベルと呆気無く開いた扉にシャルルは脱力しそうになったが、まだやるべき事は残っていると気を引き締めた。

そしてまた機械人形のように足だけを動かしてアベルについて行った。

「ホーリア様」

気がつけばアベルと自分は何処か隔離された場所にいた。今まで何も見ずにただ歩いていたのだ、きつとかなり歩いたのだろうか不思議

議と足は痛まない。

何だろう、この感覚。

「アベルか、その様子ではシャー少年を連れて来たのだな。お前はもう下がれ、私はシャー少年と2人で話がしたい」

「了解しました。シャル・レイモンド、早く入れ」

アベルはシャルルに入るよう促した直後、踵を返して颯爽と去って行った。

「……どうした？早く入ってくれ」

向こうはかなり苛立っているように聞こえる…シャルルは慌てて取っ手を握って回した。

「失礼します」

一言発した後、彼は恐る恐る中へと入る。

息が詰まるほど苦しく辛い…少しでも気を緩めたらその場で倒れそうだ、それ位緊張している。一方、シャルルの硬直した様子を見たホーリアは不敵な笑みを浮かべながらゆっくりと口を開く。

「優秀な君にまた会えるとは。私はとても嬉しいぞ、シャー少年」

ホーリアの様子は言葉通りだった。純粹にシャルルにあつた喜びと宿敵と対峙する時の闘志で瞳をぎらぎらと光らせ、彼はどんな行動に出るのかと楽しみにしていた。

それがシャルルにも分かるから更に緊張する。

「ホーリア様、私も貴方にお会い出来て光栄です」

やや上擦った声でそれだけが言えた。ホーリアは何の緊張もしておらず、余裕さえ見せながら自分を観察しているその瞳は己の心を暴きそうな程澄み渡り、今にも自分の心身を真つ直ぐと射抜きそうだ。

「申し遅れました、シャル・レイモンドです」

やっとの思いで名乗る事ができ、シャルはホツとしながら座っているホーリアを虚ろな目で見ている。しかしホーリアは既に倒れそうなシャルを余所に話を進めて行く。

「シャー少年、これから君には私の元で働いてもらう。何、心配はいらないさ…部屋の片づけとか床掃除とか…そんなものだ、出来るだろう?」

「え、ええ…」

「…シャー少年?」

返事をした途端、目の前が薄暗くなっていく…ホーリアの声も聞こえない。体が傾いていくのが何となく分かるが踏ん張る力は全くなかった。

「シャル」

完全に意識を飛ばし、倒れかけたシャルをホーリアが受け止めた。銀色のサラサラとした髪が伝わってくる。人形のように動かないシャルの顔を覗き込むホーリア：目を閉じた彼の姿は紛れもなく子供、無垢で純粹な子供、10歳の子供とは思えないほど大人びていたがこうしてみるとやはり彼はまだ幼すぎたと思う。

「シャルル…」

芽生える罪悪感と背徳感。無垢な子供を生贄にする罪悪感と穢れの無いこの少年が憎悪で壊れる姿を見る事が出来ると言う歪んだ快感壊れてしまえ、憎悪に狂い、絶望すればいい。

「……さて、少し寝かすか」

長い間機械のように足を動かし続けた彼の疲労は頂点に達したのか、一向に目が覚める様子もない。今はこのまま眠らせるのも悪くない、本当の地獄を見るのはこれからのだから少しは安らぎを与えなければなるまい。

ホーリアは自分のベッドにシャルルを寝かせ、隅の方に丸めていた毛布を掛けた。

「お休み、シャー少年」

耳元で囁く彼は悪魔か、それとも…。

「今日だったのですか？」

中庭で花畑に座っている金髪の少女。童話の世界にいるのではないかとさえ疑ってしまう。

「ええ、今日…」

レディシアは母の用事でアルディ家の最上階に来ており、当主から少女の遊び相手になってほしいと頼まれたのだ。勿論断る理由はない、ましてや少女はアルディ家当主の娘、イリアである。

「お兄様の元に来る少年は私より幼いのに召使いになるなんて」
「え、ええ…志願しましたから。アルディ家の元で働くのが彼の夢だったので」

イリアはどうやら兄の下についた幼い少年…レディシアにとっては親友であるシャルルの事を聞いていた。

興味があるのだろう、純粹に知りたいと言う瞳の輝き。レディシアにはとても言えなかった。

シャルルが此処に来た本当の理由は忠誠心でも何でも無い、真実を晒し出して復讐すると言うものだ、そんなこと、とてもイリアには言えない。

「会ってみたいわ、名前は何と言うのかしら」

ドキリ。

レディシアは一瞬顔が固まった。

イリアはもう14だ。事情位分かるだろう…シャルルの名前なんか出したら自殺したアクロイドの息子である事など直ぐに分かるだろう。そして彼の目的さえも。

「シャー…シャー少年、皆はシャー少年と言っております」

「シャー少年？」

「はい」

不意に出た呼び名。

あながち嘘でもない。皆はシャー少年とは呼ばないがシャルル少年とは呼んでいるのだから。ホーリアがシャー少年と呼んでいたがあれはわざとだろう。

ホーリアはきつと見抜いている、その妹のイリアだってきつと直ぐに見抜く。

「今度お兄様のところに行つてシャー少年に会つてもいいかつて聞こうかしら。私も彼と話したい。だって有名なんでしょ？」

「え……」

またしても核心を突く言葉にレディシアはドキリとする。いや、イリアは絶対に気付いているだろう。アルデイ家の最高幹部の1人が自殺しているのだから気付かない筈はない。

「シャー少年が羨ましいわ」

不意に出たシャルを羨む言葉に驚いてしまう。何故、シャー少年を羨む言葉が彼女の口から出るのかレディシアには分からない。裕福で恵まれた生活を送っている彼女の苦悩は分かるけれど、シャー少年を羨む事に繋がる理由が分からないのだ。

「だって、彼のお父様やお母様の愛情を感じるんだもの。シャル君はお父様の為に此処に来たのでしょうか？お父様の為なら何だつてする、そんな覚悟をしないと此処には来ないなあと思つて。まだ10歳間近なのに此処に来るなんて普通は考えられないわ」
「……………」

イリアのそんな言葉を聞いていたレディシアは不意に顔を歪めた。今、自分達のやっている事は彼女を含む全員を破滅に追いやるうとしているのだと言う事を改めて思い知らされた。

「レディシア、どうしたの？…暗い話をしてしまつてごめんなさいね、でもどうしても言いたくて」

「え、ええ、大丈夫ですよ、イリア様」

イリアは慌ててレディシアに謝罪する。彼女のその声がますます自分の胸を搔きまわられるようで辛かった。

シャルルを止めなければならぬ？

シャルルの言う事を忠実に従わなければならない？

そのほかに何の選択があるの？

どうすれば憎悪で歪んだ彼を救える？

たった6歳の彼に答え等見つかるはずもなく、頭の中はぐちゃぐちゃだった。ただ一つ分かるのは、行動するにも代償が伴う事を知る。

(こんな世界にいなければ良かったのに)

逆転した世界だった。貧しくても人の心と対峙する場所と豊かでも人の心を踏みにじる事に何の抵抗もない欲望に塗れた世界。逆転し、絶対に交わる事のない世界がどんどん交わっていく。

降り立つてはならない世界に自分達は降りてしまった。

その代償は、きつと…。

第八節：贖罪と相反する感情（前書き）

止められない憎しみが悲劇へと繋がりゆく。激しくて情熱的なこの感情、抑える術も知らないまま進んでゆく。出会わなければ良かったのかもしれない。

出会った瞬間、この目にはお前しか映っていない。

ああ、それが辛い、苦しい、可笑しくなりそうだ。

そう、この出会いこそ悲劇の幕を開けるきっかけになるのだ。

第八節：贖罪と相反する感情

「お兄様、そこにいらっしやるの？」

イリアは無邪気な笑顔で此方に駆け寄つて来た。

「イリア」

取り繕った笑みを浮かべながらイリアに応える。彼女の笑顔は眩しい、思わず目を逸らしたくなる程に。

眩しい程無邪気なその笑顔が時々苦しくなる。

母を思わせる。

自分を置き去りにした母を思い出させる。

イリアが母の娘で自分の妹だと思つと、じわじわと湧き上がる底知れぬ憎しみと悲しみと劣等感、そして嫉妬心。

自分は母に愛された記憶などない、疎まれ、恨まれ、憎まれた記憶しかない。

恨まれて憎まれた果てに逃げられて置き去りにされた。

この少女が苦痛に歪む顔を見たい、そんな事を考える自分は何処かひねくれてしまったのかも知れないと思う。

「お兄様、何の本を読んでいるの？」

不意に問いかけられた私は困り果てた。

本の内容など入らない、どんどん流されていく。

「哲学書かな」

わざと興味なさそうな口調で淡々と返す。
イリアは目を輝かせて再度問いかけた。

「どんな内容なの？」

ああ、そんな眩しい視線を私に向けるな。
お前やカインを憎んでいるのに、破滅させようとしているのに、そんな視線で、そんな笑顔で私に接するのか。
吐き出せない事が尚辛い、深すぎる憎悪を向ける事も出来ないから辛い、今すぐその場から立ち去ってくれたら、どれだけ楽になるのか。

「…ある心理学者が書いたものだ」

耐え切れない、苦しい。

どうか早く侍女達が来てイリアを此処から連れ出して欲しい。
実の妹をそんな風にしか見れず、そんな風にしか思えない自分自身に嫌悪を覚え、こんなにも苦しい思いを抱ききつかけを作った母と伯父に対する憎悪が増す。

(でも、もう憎む対象を失ってしまった)

母も伯父もこの世にはいない。此処に残された自分は誰を憎めばいいのか分からないから母と伯父の子供であるカインやイリアにその憎悪を向けるしかなかった。

分かっている、カインやイリアには何の罪もない。偶々母と伯父の子供としてこの世に生を受け、生まれてきただけなのだ。

そんなこと、分かっている。

しかし心はそんな正論など通じない、どんどん憎悪が増してくる。

(こんな世界にいなければ、カインやイリアを愛する事が出来たのに)

どうしたらカインやイリアを愛せる？

どうしたら彼等に憎悪を向けなくて済む？

抑制できない憎悪、悲しい記憶が容赦なく追い詰める。

耐え切れず眉間に皺を寄せ始めた頃、漸くこの息苦しさから解放される時が来た。

コンコン。

「あら？誰かしら」

イリアは立ち上がって扉の方まで歩き、用件を尋ねる。

「イリア様、えっと…シャルルです。今からお勉強の時間だから来るようにと」

「まあ…」

イリアはパツと目を輝かせながら

「貴方がシャー少年？」

と、扉の向こうのシャルルに向かって聞いてくる。

「ええ…」

「そうなの！会いたかったわ、入って」

「…シャー少年、イリアが会いたがっている…入ってくれ」

戸惑い気味のシャルルの事など知らないでイリアは扉を開いて彼を招き入れる。

「イリア様、初めまして…シャルルと申します、宜しくお願い致します」

「ええ、此方こそ宜しくね！」

イリアはシャルルの手を握りながら目を輝かせている。勉強を口実に使える事を嬉しく思いながら彼女に向かって注意を促す。

「イリア、シャルルとは後でゆつくりと話せばいいだろうか？今は行った方がいいと思うぞ、怒られたら困るだろう」

「まあ、お兄様はいつもきつちりしているのね」

「私が怒られるのが嫌なだけだ」

「そうなの、お兄様の為に行った方がいいわね。シャルル、また後で話しましょう」

笑顔でそう言いながら走って行く彼女の後ろ姿をシャルルは相変わらずぼかんとしたまま見つめていた。どうやら私に妹がいるとは思わなかったようだ。

「シャー少年、何だ」

「い、いえ…妹がいるとは思わず…」

「レディシアが親友なのに知らないとはね」

「……」

シャルルは呆然としたまま立ち尽くしていた。

ふわり、ふわり。

金色の髪を靡かせながら歩く1人の女。

「私には理解できないわ」

金色の髪に白い肌、形の整った真つ赤な唇が言葉を紡ぐ。

そう、ホーリアの叔母にしてはあまりにも若い女性。その名はラザニアことラーナ。

彼女はヒールの音を立てながら険しい道を歩いていった。

「悪く思わないでね、シリウス？」

徐々に計画は進行しつつある、アルデイ家の邪魔になる存在は消す。必ず消さなければならぬ。

目指すはシリウスを匿った人間、聖職者達だった。

ラーナは冷酷な笑みを浮かべながら進む、先へ先へ進む。

暗黒へ、底知れぬ暗黒へ。

程なくして修道院が見えた。シリウスがアルデイ家の監獄から脱走する際の手助けをした反逆者がいる場所。

彼女は見上げた。

「…哀れな子羊たち」

戦慄が走るほど冷酷な笑みを浮かべて裏方へ回った。

悲鳴が木霊する。

次々と流れ落ちる血、傷付ける度に、斬り捨てる度に、本当は今にも狂ってしまいそうな精神。

いつそのこと狂ってしまえば楽だろうに、こんな時に限って酷く冷静だった。

「終わったかしら？」

ラーナは返り血を浴びたまま、部下たちに聞く。しかしかえって来た反応は決して喜ばしいものではなかった。

「いえ、此処にいたはずの女が見つかりません」

「フレアが見つからないの？」

「はっ、如何致しましょうか」

ラーナはしばし考え、そしてこう言った。

「行くわよ、ディアルト様に報告しなくてはね」

相変わらず冷静なまま、ラーナは再び来た道に戻って行った。

ホーリアは相変わらず部屋にいて本を読んでいた。

シャルルは苦しい状況になり、どうやってアクロイドの死の真相を探れば良いのか分からない。

予想以上にホーリアは強敵だ、きっと今だって自分の考えなどお見通しだろう。

不思議なのは彼がこの事について一言も発しないこと。
逆に不気味だ、何故問い詰めない？

「ホーリア様、床の掃除が終わりましたよ」

考えながらも仕事をするのは忘れない、適当にするのは嫌いだからどうせやるのだから与えられた仕事はきちんとこなさなければ。そうするのは彼自身が中途半端な事は嫌いだという性格と一生懸命やることでホーリアが労いの言葉を掛けるだろう…。

「シャルルがいたら部屋が綺麗で落ち着く」と言ってくれて、役に

立つから手放すのは惜しいとか言ってくれるかもしれない。
圧倒的な力の差で足元などに到底及ばないから一生懸命与えられた
仕事をこなすことで、役に立つ事で彼に向かって僅かな抵抗をした
かったのかもしれない。

「御苦労だった、シャー少年。疲れただろう？暫く休むと良い」

ホーリアはシャルルに向かって労いの言葉をかけた。

「…どうした、早く休め」

立ったままのシャルルにもう一度問い掛ける。

「あ、いえ。何でも御座いません、でも…」

「レディシアが心配かな？」

「え、な…そ、それは」

ホーリアにズバリと言い当てられてシャルルは戸惑った。

彼は全て見透かしている。シャルルは体を硬直させながらホーリア
の顔を見ていた。

怖い、怖い怖い。

幾つもの刃に切り裂かれて包んでいたものがバラバラにされて白日
に晒されそうな感覚を覚える。

いっそのこと、今すぐこの身体を切り裂いて跡形もなく消されてし
まったほうがいい。

こんな恐怖心を味わうくらいなら。

「シャー少年」

「は、はい…」

ホーリアに突然呼ばれて慌てたシャルルは上擦った声で返事をした。

「復讐とは辛く苦しいものだ、解放してほしいとさえ思う事だつてある。シャー少年、今のお前はまさしくそんな心理状態にある」

どくん…どくん…どくん…

シャルルの心臓が五月蠅いぐらいに鳴り響く。自分の目的はおるか心理状態さえ言い当てた。

「何か言い返さないのか？シャルル。お前の目的はアクロイドが自殺した理由、自殺に追いやった全ての人間に裁きを下すことだろう？無知だった自分自身にもお前は裁きを下そうとしている。言い返してみる、シャルル・レイモンド」

穏やかな上司から一変して敵意を露わにしたホーリアの鋭い言葉にシャルルは成す術がない、ただ彼に追い詰められていく一方だった。何故こうなったのだろう。

わかつていたのに、ホーリアは自分の事などお見通しで、全てを見抜いていた事など分かっていたのに。

何も言い返せない、歯が立たない。ただホーリアに追い詰められていくしかない。

その時、ホーリアはシャルルに近寄って手を伸ばした。

彼の手が伸びた先はシャルルの頬だった。

「…シャルル、お前には復讐なんか出来ないよ。あまりにも優しすぎた」

シャルルは声を殺して泣いた。

ホーリアに追い詰められて全てを晒されて惨めな思いをした。

父の死を知る事はおろか自分ではどうにも出来ないことが悔しくて悲しくて堪らなかった。

「シャルル」

何故かは分からない、ただそう感じるだけだ。

まるでホーリアがシャルルを慰めていたような感じがする。

「お前なんか嫌いだ、ホーリア…！」

ずるい、散々傷つけておいて最後にはこうして救いの手を差し伸べる。

こいつは悪魔だ。

勝てないなんて考えたらいけない、そもそも10歳の子供がアルデイ家の長男と互角に戦える筈もないのだからそんなこと考えたらいけないけれども。

(勝てない)

勝てないと思った。

「皆どうしてあんなに敵しいのかしら！」

イリアは分厚い本を3冊抱えて部屋に帰ろうとした。彼女の部屋は中庭を通って反対側の城の扉を開けて螺旋階段を上った直ぐ近くに部屋がある。

兄とは対照的に明るくて文句のつけようがない程素晴らしい部屋だった。部屋の扉を開けて真っ先に机に向かって本を乱暴に置くと咳いた。

「お兄様もこつちに来ればいいのに。あんな薄暗い部屋にいたら可笑しくなっちゃうわ」

彼女はまだ知らないのだ、兄は来ないのではない、来れないという事を。

兄の黒く染まった憎悪を彼女はまだ知らずにいたのだ。

「さて、外に行きましょう」

直ぐに走り出し、扉を乱暴に閉めて外に飛び出した。

近くの中庭はとても広いので子供達も遊んでいる…しかしイリアがふと見たその先には、遠くから見ても分かるほど美しい中庭とは似ても似つかない光景が広がっていた。

3人のしつかりした体格の少年が今にも倒れそうな程傷ついている1人の少年に向かって暴力を奮っていた。

イリアは一気に怒りがこみ上げ、少年を助けなければという使命感と共に走った。

「お前、最近生意気なんだよ」

「そつだよ、皆より優れているからつて調子乗ってるんじゃないやねえよ」

「この卑しいやつめ」

育ちのいい騎士見習いの子供が3人位で1人の少年に向かって水をかけたり蹴り飛ばしたりしていた。少年は唇を噛み締めて暴力に耐えていた。

「っ…」

散々殴ったり蹴ったりした為か少年はうめき声をあげて蹲った。此れ以上暴力を振るったら彼等の将来も危ないだろう。

「何をしている！」

怒声が聞こえて来た。

「げ、あれはアルディ家の長男じゃないか」

イリアが駆けつけるより前に来たのはアルディ家の長男であったホーリアと呼ばれている男だった。

少年はもう大丈夫なのかと安堵し、上を見上げた。

「…カイン…大丈夫か…？」

口を開いたのはホーリアだった。

助けられたカインはホーリアに戸惑いつつもゆっくりと身を起こして頷いた。

（何故、俺を助けてくれた？俺を誰よりも憎んでいる貴方が…いつも憎悪の眼差しを向ける貴方が何故、助けてくれたんだ？教えてくれよ）

「…貴方は、セイシエル様…」

カインは漸くその名前を呼んだ。

幼い弟と両親を失い、妹にはなかなか会えない。そんな彼と血が繋がっている人は目の前にいるホーリア以外いなかった。

ホーリアなどと呼べる筈がない。

「酷い怪我だな…すまない、簡単な手当でしか出来ないが」
「…いえ、大丈夫です」

表情を隠すように傷の方ばかりを見ている。決してカインの顔を直視する事はない、ただ事務的に傷の手当てを行うばかりだ。

カインの事など興味がないのか、それともカインを見たくないのか。

(憎んでもいい、ねえ、お願いだから)

“俺の存在だけは否定しないで”

その一言がもう少しで口から出そうになったけれど警鐘が鳴り響く。その言葉は決して目の前にいる彼に向かって言っではいけない。

言えないから、カインは彼をひたすら見つめ続ける。

憎まれてもいい、道具のように使ってくれて構わない。

貴方が俺を見てくれるなら。

兄と少年の様子を遠くから見ているイリアは呆然としたまま立ち尽くしていた。

(…お兄様、どうしてそんなに苦しそうなの?)

遠くから見ているだけだから表情は当然分からないけれど、彼の後ろ姿を見ただけで伝わってくる。

カインを目の前にして治療に励む兄が苦しみ、今にも狂ってしまうのではないか。

イリアは此れ以上カインと兄を見ていられなくなってしまい、身を翻して逃げるようにして自分の部屋に戻って行った。

第九節：贖罪も罰も（前書き）

私に憎悪を向ける貴方の眼差しが辛くて、苦しくて、胸が引き裂かれそうになるけれど、いつしかその痛みが心地良くなってしまった私は狂ってしまった

ああ、薄汚い欲望を持ってしまった私は貴方を闇から救い出すことも出来ない

お前に憎悪の眼差しを向ける事が時に罪だと感じ、心が痛む慕われるほど、大事にされるほど、惨めに感じてしまうのにお前はそんな事さえ分らず私に手を差し伸べる

いつそのこと闇に溺れてしまえばいいのに

一部、同性間の恋愛に近い描写があります

第九節：贖罪〜罪も罰も〜

愛に溺れて憎しみに身を焦がす。

そんな貴方に私は知らず知らず溺れてゆく。

ねえ、私は貴方を殺してしまつう。

「イリア、すまないな……」

「お兄様、気になさらないで。それにしてもどうしてあんな事をされていたのかしら……」

イリアの疑問にセイシエルは沈黙を余儀無くされた。

何と答えていいのか分からない。

分からないから彼はガーゼで巻いたカインの足を見つめるだけだった。

（苦しんで欲しいと望んでいた筈なのに、いざ苦しんでいるのを見たら助けたくなくなる）

カインは自分をどう見ていたのだろう。

光として見たのか？ そうであるなら自分は何と穢らわしい事を考えていたみたいで胸が痛む。

ふとイリアの顔を盗み見た。

頬が赤い、紛れもなくこれは。

「イリア、すっかり気に入ったのだな……この少年のこと」

「ええ」

カインの寝顔を見たままで何の躊躇いもなく彼女は答えた。
セイシエルは更に罪の意識に苛まされる。
イリアは何も知らない、何も知らないままカインに惹かれている。
きつとこれからも彼女は積極的にカインの元に来るだろう。

(……お前達は私から何もかも奪うわけだ)

彼らにそんなつもりはないだろうがカインやイリアが生まれたおかげで自分は何もかも失ってしまった。

カインのようなカリスマ性や才能もなければイリアのような人を惹きつける魅力もない。

実力を伸ばしても伸ばしても手に入らないものを彼らは無条件で手に入れた。

「イリア様！」

扉を叩きながら侍女が呼ぶ。

「イリア、気持ちはわかるが外に出てくれ」

カインの顔を隠すようにしてイリアに向かって強い口調で言った。

「……分かった」

拗ねたような口調だがイリアもカインが寝ているところを侍女に見せるのは良くないと思ったのか急いで表へ出て行った。

「……何でお前を助けたのだろうな、カイン」

近くにあつた椅子をカインの傍に持って来て座つた。
何もしていないのに疲れてしまった。

イリアには後で思い切り八つ当たりされるだろうがそれも仕方無いかと苦笑し、目を閉じた。

いつそのまま何も見えなくなれ。

そう願つたら案外闇は早く訪れた。

「う……ん……」

ホーリアが座つたまま眠りについたら後、カインはゆっくりと目を開けた。

ホーリアが治療をした後の自分はどうしたのだろうかと考えた。

「こ、ここは……」

見た限り此処は高い身分の人間では入れない。

ホーリアかイリアの部屋かとカインは認識した。

「……助けられたんだ、俺は」

足に巻かれた包帯を見て把握した。

はつきり言えば、直ぐにずれる程拙かったが懸命に巻いたであろう跡は見て取れた。

そして側には椅子に腰掛けてうたた寝をしているホーリアがいた。

「……セイシエル」

やはり自分にはホーリアとは呼べない。

セイシエルと呼んだ事が知られたら媚び売るなとまた殴られるが、それでもカインはどうしても出来なかった。

「やはり貴方は……」

整った容姿を見た人はホーリアに注目していた。

無意識だったかも知れない……そつと手を伸ばし、指先が頬に触れた。

ただ触れただけなのに快樂が迸る。

義弟妹は別としてホーリアに会いたいという思いだけでアルデイ家の兵士として志願した彼の願いは思わぬ形で叶った。

しかし叶ってしまったらそれだけに満足出来なくてももっと求めたくなるのが人間の性^{さが}だ。

身を起こし、片手で支えながら彼に触れた。最初は指先だけで頬に触れていたが今は掌で頬を包み、親指があちこちを触っていた。

前髪だつたり目蓋だつたりと。

そして唇に触れた。

カインはいつもしつかりしなければならぬと虚勢を張っていた。

父と母は人から隠れるようにして自分達を養っている。カインは幼い義弟妹の為に弱みを見せてはならなかった。それを辛いと感じた事もある、叫びたくなつた事だつてある。

（俺はこんなに立派じゃない！）

才能がある、もっと成長出来ると言われる度にカインの苦しみは大きくなつた。

こんな時、自分にも兄がいたら良いのにとさえ思った。上がいたら、

きつと直ぐに助けを求めて、語り合えたのに。
絶対にあり得ない事を望んだまま月日が流れたある日、母から兄が
いると言われた時の衝撃はあまりにも大きかった。

(貴方は覚えていないのかもしれない)

そう、母から聞く前からカインはホーリアが兄ではないかと子供心
に思っていた。

幼い頃に観光地でもある大聖堂で一度会った事がある。ボール遊び
をしていて、そのボールが関係者以外入れない場所に転がって行っ
た時、彼はボールを拾って現れた。

「はい、どうぞ」

あの時の優しい瞳が忘れられない。

「あ、ありがとう…」

思わず声の上擦ってしまった程、彼の優しさが心に染みる。場違い
で、他の子供からは笑われたり陰口を叩かれるばかりだったから余
計だ。その時は何故他の子から嫌われるのかなんていう疑問は過り
もしなかったけど。

「カイン、こんなところで遊んだらいけないじゃないの…ちょっと
目を放したらすぐこうじゃない」

ぼんやりとボールを見つめていたまま立ち尽くした己の姿を見た母
が息を切らせて駆け付けた時に、ふと彼を見上げた。

「……」

先程までの優しさを微塵も感じさせない位、眉間に皺を寄せて鋭い目で母を見つめていた。

幼い頃は気がつかなかったけれど今となっては彼が自分達を強く憎んでいることが分かったから。

それが辛かった。

（俺が貴方を追い詰めたのだろうか？）

そんなつもりは決してなかったけれど、自分が一生懸命になる度に彼が陰で苦しんでしまったのだろうか。

あの時から、知った時から望んでいたのは唯一つ。

（貴方の弟になりたかった）

それが叶わない。

気がついた時にはもう歯止めが出来なかった。

弟になりたくて、彼に認めて欲しくて…。

自分は何と欲深いのだろうと自己嫌悪に陥りつつも一度崩壊した理性は戻らなかった。

何もかも叶わないならせめてこの手で感じたかった。

「おい…」

「!？」

カインはハッとしてゆっくりと目を開ける彼から離れた。

「もう、起きたのか…」

「ええ」

何も言わずにそれだけを言ってホーリアは少しだけ身を起こして

「もう少し寝ていたらどうだ？イリアが帰って来るまで待っている
といい」

そうやってホーリアは近くに投げ出していた本を拾って読み始めた。
カインのしたことについては何も言わなかった。

「……」

カインはホーリアに気付かれないようにため息をするとベッドに身を
投げ出した。

暫くすると規則正しい寝息が聞こえてきて、ホーリアは全く読めな
い本をまた近くに置いた。

カインが自分に触れた事について内心では戸惑っていた。

（分からないな）

カインが何故触れたのか…思考回路も何もかも滅茶苦茶になってい
った。

ただ、触れてくるあの手を拒む事が出来なかった。何故だろう？カ
インがあまりにも纯粹過ぎてホーリアの心は罪の意識でいっぱいだ
った。

（罪も罰も覚悟していた筈なのに）

覚悟していた筈なのに、それでもカインやイリアの純粋さが自分の心を締め付けて追い詰める。

無意識に自分の手が自分の頬に触れていた。カインの純粋さが心に染み込んで苦しくなる…これ以上何も考えたくなくてホーリアはまた目を閉じた。

イリアが戻って来るまでいったいどの位掛かるのだろうか？

早く戻って来いとホーリアは心の中で叫び、カインに自分の狂った憎悪を向けまいよう努めていた。

しかし、ホーリアの葛藤を分からない程カインは子供ではなかった。

(やっぱり貴方は優しい)

どんな苦しみもイリアやカインには決して察されないよう努める姿がとても痛々しい。

叶うならこの手で深い苦しみから解放したいとさえ思っけれど、ホーリアのように自分は純粹ではない。

(きつとこの両腕では貴方を救えない)

兄を救えない、触れる事さえ叶わない。

カインは毛布を頭から被って声を殺して泣いた。

「ディアルト様」

アルデイ家の最上階に甲高くて冷たさを帯びた声が響く。

「ラーナか、見つかったのかな？」

「いいえ、見つかりませんでしたわ、フレアは上手く逃げているみたいですね。セレナやソフィアはシリウス思ってたから簡単に仕留めましたけどね」

そう言つてラーナはディアルトに向かつて微笑んだ。

彼女の浮かべる笑顔は恐怖と冷酷さを感じるとディアルトは以前言つたものだ。

ディアルトもまたラーナに向かつて微笑み返す。

「…カインの弟が火事に巻き込まれて死んだようだね？先程あの寂れた村で葬儀が行われていたよ」

「レディシアとシャルルがいないのはそのためですか」

「…カインは一生知ることはないだろうけどね、だってセイシエルに今頃足の手当てをしてもらつて寝ているだろうから」

ふふ、と笑つたディアルトにラーナは少しだけ目を見開いて問い掛ける。

「全部仕組んでいたのですか、恐ろしい人だわ、貴方は」

「君だつてソフィアよりセイシエルを愛してるじゃないか。最も、君はセイシエルを紛れもなく男として愛してるんだらうけど」

「まあ」

くすくすと笑いながらラーナはディアルトに身を預ける。

「ソフィアとシリウスが憎いからつて子供達を利用してカインを迫害する方がいけないと思えますわ」

ラーナはディアルトの膝に腰を掛ける。

美しい女が忠誠を誓つた主に身も心も捧げ、主と己に関わる人間の

為に幾千もの命が散って行く。

彼等は知らない。

今、この瞬間も悲鳴を上げて苦しむ人々がいることを。

彼等は知らない。

救いたくても救えないものを目の前にしてただ泣いている存在があることを。

彼等は知らない。

彼等の野心の犠牲になり、親を憎み、血の繋がった存在を憎むことでしか立ち上がれない程傷付いた存在があることを。

しかし絶望や嘆き、それらの声は彼等には届かない。

夜が更けてラーナはディアルトに問い掛ける。

「フレアはどうするのですか？」

「探すよ、必ず見つけ出さないとね…ラーナ」

「イリアは？」

思わぬ問いにディアルトは一瞬だけ声を詰まらせるが直ぐに元の勝ち気な表情を浮かべると

「イリアも何れ始末するよ、セイシエルを使ってね…」

先程とは打って変わったように低く唸る声でディアルトは答える。

彼の答えを聞いたラーナはそれ以上何も言わず、ディアルトの方に身を寄せて眠る。

まだ夜は明けそうにない。

「イリア様、あまり走らないで下さいまし！」

侍女の悲鳴のような声にイリアは大丈夫と答えて走り出す。

（だってあの子にやっと会えるんだもの、じっとしてられないわ）

今すぐ会いたい。

あの少年に今すぐ会いたい。

苛めを受けていた少年を手当てした後ホーリアが連れてきた。

その時に顔を見ただけでイリアにとって少年はとてもタイプだった。名前はカインと言う。

「カイン…格好良いなあ」

きっと他の女の子にも注目されているはず。

そんな事を考えたらイリアは更に勢いをつけて走り出し、カイン達の元にたどり着こうと急いだ。

「お兄様！」

やっとの思いで2人のいる部屋にたどり着いたイリアは扉を勢い良く開けた。

「イリア、そんなに息を切らしてどうしたんだ？」

流石のホーリアもイリアのあまりの勢いに戸惑い、啞然とした。

「カインは？」

息を切らしながら「カインはまだいるの」と問い掛ける。

「まだ寝ている…イリア、後は頼んだ」

ホーリアはそれだけを伝えると本を抱えて部屋から去って行った。

「変だなあ」

ホーリアが妙に素っ気ない。

何時も口数は少ないが「黙れ」とも言わずに自分の話を聞いていてくれていたから余計だった。

口にこそ出さないが「黙れ」と言われたようで少しだけ寂しかった。

「さてと」

イリアはカインの眠るベッドに向かって足音を立てないように歩いた。

足音を立てず、ベッドの前まで来るとイリアは思わず声を出して言ってしまった。

「綺麗……」

美少年という三文字に相応しく綺麗な顔立ちをしていた。

(睫毛も長いし……)

胸が高鳴る。イリアは呆然としたままカインの顔を見ていた。兄もゾツとする程綺麗な顔立ちをしていたがカインにはそれだけではない、声を掛ける事さえ躊躇うような空気があった。

(いいなあ…お兄様)

初めて兄を羨み、少しだけ嫉妬してしまった。

(そうだ、何か用意しないと！)

頭を軽く横に振ってイリアは再び外に出た。

廊下には料理を運ぶ侍女達が出た。

「丁度良かった！」

「ホーリア様がイリアは今日は別室でという事で…」

「嬉しいわ、ありがとう！」

イリアはそう言って侍女達を部屋に招き入れ、机の上に置いておくよう指示をした。

「ふう、手伝ってくれてありがとう」

侍女達は忙しいのか足早に去って行く。

イリアは持って来てもらった料理をカインの眠るベッドの近くまで向かった。

「……！？」

イリアがベッドまで料理を運んで来た事にカインは驚いた。彼女は安堵し、カインに向かって声を掛ける。

「カインさん、目が覚めたのですか？」

カインは目の前の状況が分からず、目を見開いていた。覚えているのはうたた寝をしているホーリアに触れた事と彼に手当てをしてもらった事と。

状況が分からず混乱するカインにイリアは説明をする。

「ずっと眠っていたんですよ、お兄様が見てくれていたのですか、先程帰ってしまいましたわ」

「…そうでしたか…」

カインは漸く把握した。自分は今まで眠っていたのかと。そして今はホーリアではなく妹であるイリアがいるのだと。

「お兄様ったら今日は素っ気なくて、さっさと帰ってしまいましたわ…どうしたのかしらね。いつも口数は少ないけどあんなに素っ気なくないのに」

イリアが兄の様子を訝しんでいた事にカインは眉間を寄せる。

(やっぱり俺が嫌いなんだ)

カインが暗い面持ちでいることに気付いたイリアは

「多分用事が重なっているみたい。お父様や叔母様が厳しいもの、お兄様はアイシア様からお父様からも叔母様からも期待しているもの」

と言った。

カインは絶対に違うと思い、イリアの笑顔に幾らか救われた。

「イリア様はホーリア様が好きなのですね」

「ええ！口数は少ないしあまり喋らないけど純粹なの」

「そうですね、羨ましいです」

カインは羨ましく思ってしまった。

自分には絶対に向けない眼差しをホーリアはイリアに向けていた。

「あ、カインさんお腹空きませんか？料理があるし食べましょう？」

イリアは机に置いてある料理等を運んで来るとカインにフォークを持たせた。

「お腹が空いたら何もかも上手くいかないもの、私も食べよう」と

イリアはホーリアが座っていた椅子に腰を掛けてフォークをグサリと差して食べる。

そんな彼女の姿にカインは微笑んでいた。

如何にも気品溢れるお嬢様が豪快に食べ物を頬張る姿が面白くて。

「何笑ってるのよ」

「いいえ、何でもありませんよ、イリア様」

「笑い過ぎよ」

イリアが睨んでもカインはずっと笑っていた。

「カインったら！」

あまりにも笑われたイリアは拗ねてしまったのでカインは困ったよ

うに笑いながら

「申し訳ありません、イリア様」

と言ったものだからイリアはわざとカインを挑発する。

「申し訳ないなんてちつとも思っていないくせに」

「本当にそう思っていますよ、イリア様」

「あら、そうなの？」

「ええ」

カインがあまりにも真剣に謝罪の言葉を述べるから笑ってしまふ。一方のカインも笑っていた、何故なら彼女と話すことがとても楽しくなったからだ。先程までの切り裂かれるような苦痛はどこにもなかった。

「父上、お呼びですか？」

突然最上階の部屋に呼び出されたホーリアは憤りを隠せなかった。

此方の事情などまるで無視。

道具のように扱われて我慢ならなかったが逆らっても無駄だと諦めていた。

「セイシエル、よく来てくれたね。カインを助けたらしいね？」

「……」

「心配いらないよ、咎めたりしない。これからお前には僕の側近として働いて貰わないとね……」

ディアルトが自分にどんな命令を下すのか…ホーリアは直ぐに察し

た。

「私にイリアとカインを始末しろと仰るわけですか、ディアルト様」
「何だ、分かっているじゃないか、ホーリア。」

「どんな手を使っても構わない、あの2人を始末してくれ」

ディアルトがホーリアと呼ぶときは大抵何らかの命令を下す時で、自分の手を汚すことなくソフィアやシリウスを始末した時と同様、カインとイリアも自分の手を汚すことなく始末しようとしている。

「…………お断りします」

ホーリアはディアルトにそう答えた。

もし従ったら、結末があまりにも残酷だからだ。

しかし此処でディアルトも引き下がるわけではなく笑いながらホーリアに向かって言い放つ。

「君がフレアを庇ったんだろう？カインの義弟は庇い切れずに死んだけど……………」

「…………！」

ホーリアは目を見開いた。その様子にディアルトはあざ笑うように次々とホーリアの策を指摘する。

「シリウスを庇ったのも君。ソフィアは死んだけどね、シリウスは早期に手当てをしたら助かった。カインには間接的に伝えて任務から帰る時間を遅らせた…………全部バレバレなんだよ、ホーリア」

「……………」

「君がカインを抹殺しなければ僕が直々にイリア諸共抹殺するだけ

「……どうする？」

「イリアとカイン、なかなかいい組み合わせだねえ……心中に見せかけて殺すのも悪くないね」

なかなか答えないホーリアにディアルトはやや痺れを切らし始めていた。

勝てない癖に強情なのはホーリアが憎んでいる母親にそっくりだとディアルトは常々思っていた。

「……いつそ相姦の罪で処刑するよう仕向けるかな……罪人を処刑したら批判は僕に向くことはないだろうし、どうする？」

ディアルトは再度ホーリアに問い掛ける。

「分かっているくせにとホーリアはディアルトを罵りたかったがそれも出来ない。」

「……待って下さい、父上」

「期待しているよ、ホーリア」

「……仰せのままに」

馬鹿にされたも同然だった。

ホーリアはディアルトに背を向けて足早にこの部屋を出て行くことと歩き出した。

「……くっ！」

ディアルトのいる部屋から大分離れた場所でホーリアは崩れ落ちた。

「……っ！」

結局何も出来ないかと改めて思い知らされた。

そして、自分が父親達の道具として生きてきた事を知らないで何不自由なく笑っているカインが憎くて仕方なかった。

何でもいい、誰でもいい。

滅茶苦茶にしてみたい衝動に駆られたが、ホーリアは立ち上がる。

「……カイン……っ！お前さえいなければ……！お前さえいなければ良かったのに……！」

カインがいなければ、彼らを憎んだ故に犯した罪も受ける罰も与えられる事はなかったのに。

カインがいるおかげで自分は何も出来なくなった。

「セレナ殿もイザも死ぬことはなかったんだ……！貴様等がいなければ、2人は殺されずに済んだ！」

セレナ……ソフィアにとって幼なじみでシリウスとソフィアの恋心を知り、2人の逃亡を助けた。

彼女はホーリアが10歳の時に処刑された。

イザはラーナが修道院に放った火から逃れられず死んだ。

「カイン、お前さえいなければ殺されずに生きた人間だっているんだ！」

自分に親身になってくれたセレナ、体が弱くて動く事もままならないイザ、そして自分を陰ながら支えてくれたフレアも狙われた。自分を大事に思ってくれる存在は全てカインが奪い去って行く。

バン！

ホーリアは壁を思い切り叩いた。

「カイン……この手で……！」

憎悪に満ちた声が響き渡る。

カインを憎んだ罪も与えられる罰も膨らんでいく憎悪にはかなわない。

そして、強くなる憎悪は別の感情を呼び起こし、悲劇と繋がる事も知らないままで。

第十節：鳴けぬ金糸雀 鳴いた雛（前書き）

私は鳴けない金糸雀。

ただ、鳴くためだけに生み出されたのに、結局は鳴く事も許されずに沈黙するしか出来ない愚かな鳥。

価値のない金糸雀なら消えてしまえ。

絶望に沈黙する私の耳に突如響き渡る鳴き声。

一匹の雛が鳴いた声だと知ったのは ……。

第十節：鳴けぬ金糸雀 鳴いた雛

俺を捕らえて放さない暗黒。

きつと、同じように捕らえられてしまったのだろう。

俺たちが似ているのは、何となく結末を予知出来るからなのだろう。

『俺の身はどうなってもいいから……』

そんなことを考えられる俺は奴らと同じ最低な人間なんだ、きつと。

葬式は呆気なく終わった。簡単に文章が読まれたけれども誰がまともにも聞いていたのだろうか。

イザを死に追いやったのは病気ではなくて火災。

カインは知らない、いや、長い間知ることには出来ないだろうと薄らと考えていた。

「シャルル君」

悲しみに暮れている己に声を掛けてきたのは俺と同じ年の少年であるジャン・ブルネーゼだった。

「…大丈夫？少し外に出る？」

「……悪いな、ジャン」

「気にするなよ」

ジャンの気遣いには感謝している。流石、家族ぐるみで長い付き合いがあるだけに伝わるものがあるのだろう。

最も、今感じている事は絶対にわからないだろうけど、わからない

ままでいい。

ジャンと歩きながら外に出たら、不釣り合いなくらい空は青かった。

「嘘みたいな天気だよな、不釣り合いすぎて不気味」

「天気は人の死を予知出来ないだろ」

「それもそうかな」

こんな事を見上げて語り合えるようになったジャンと己は少しだけ大人になった気がする。

しかし、視線を前方に戻すと、来る人物を見せてきた。

「……シャル・レイモンド」

ジャンも顔を真っ青にしながら見ている。

しまった、不意打ちだとシャルは苦々しく思いながらも顔には出さず

「ジャン、悪い。席を外す」

と言って目の前の人物、ホーリアについていく。何しに来たんだ、いったい。

「……何の御用で？ホーリア様」

「いきなりで悪いな、しかしお前にはどうしても伝えるべきだと考えたからな」

淡々と、しかし有無を言わず案件を述べようとしているその様はいつもの彼ではない、冷酷そのものだ。

「……カインには一切言うな」

「……！」

「勿論お前に拒否権はない、シャー少年」

あまりの無茶苦茶な命令に目を見開いた。

カインは身内の死を知らないまま、知ることもないまま日常を送る。口封じだ。

何も知らないまま日常を送り、何も知らないまま歩いていく。

「……あまり詮索したらお前やお前に関わる人々の命の保証は出来ない。

黙って従え、それとも……」

ホーリアは口角を上げて不敵に笑う。

「お前は私を止めようとするのかな？」

挑むような眼差し、真剣な勝負を仕掛けてくるホーリアに「いいえ」と答えられるわけがない。

『お前には勝てない』

そうだ、その通りだと分かっているけれど、彼は自分に仕掛けてきた。

勝負を仕掛けて断れる筈がない、此方も相應の態度を示すまでだ。

「止めてみせる……必ず、お前を止めてみせる！」

ホーリアを真っ直ぐに見つめ返す。

自ら後戻り出来ないようにした。

例え残酷な結末であろうと、破滅へ向かおうと、もう躊躇う事はない。

「……良いだろう。ならばやってみるがいい、シャルル」

そう言ってホーリアは背を向けて再び立ち去る。

『始まった…これでもう本当に戻れない』

ホーリアを敵に回すまではもしかしたらまだ戻れたかもしれない。

ただ後悔はない。

彼は最初から予測していたのだろう。いつか、絶対に自分とホーリアは対峙する。

「……ホーリア」

彼の後ろ姿を刻みつけ、ゆっくりと背を向けてイザの眠る場所、レディシア達のいる場所へ戻る。

カツ、カツ、カツ…

履いている靴の音だけが響く。

急速に回り出す運命は高ぶる感情をも巻き込んで回り続ける。

何も考えずにただ機械的に足を動かしていると、前方から息を切らして走って来るレディシアの姿が見えた。

「シャルル、やっと戻ってきた」

レディシアはずっと探していたらしい、自分の姿を見つけてパッと顔を輝かせつつも

「気分は落ち着いた？」

と尋ねる。

相変わらず年相応ではない振る舞いだ。そんな彼がとても頼れる存在であるが、少しだけ…少しだけ苦々しく思う。

「レディシア、わざわざ探してくれたのか。ありがとう」

この子は健気だ。

きつと知らないのだろう、この子の気遣いに甘えている自分の心の醜さなんて知らない。

知らなくていい、この子は何も知らなくていい。

「そろそろ戻ろうか」

「うん、そうだね」

少年が死んだのに、悲惨な事故に巻き込まれて死んだのに、その少年は自分とも親しかったのに。

普通は悲しみに暮れて泣く筈なのに思考は酷く落ち着いていた。目的が近づく度に何もかも失っていくような気がして、どうしようもない虚しさを覚えた。

少年の眠る場所へ、悲しみに暮れる人々が集う場所へ戻る為に歩いていたが

「シャルル！」

レディシアが悲鳴のような声で呼び止めた。

そんな声で呼ばれたらどう返せば良いのか分からず、立ち止まって小さい声で返すしか出来なかった。

「なに？」

知られたくない、今の自分の表情なんか知られて堪るものか。

「…ううん、何でもない！呼んでみただけ」

やっぱり。

明らかに何か言おうとしたのだろっけれど、彼は言うのをやめたらしい。

無理矢理明るい調子で撤回したレディシアがとても可哀想に見えて、何か言わないといけないと思ってみたものの。

「そうか」

自分の口から出たのは淡々とした言葉。

こんなに幼い彼から温かい言葉を掛けられたのに、自分は温かい言葉なんてちつとも思い浮かばない。

虚しくて、苦しいのに。

枯れた頬には涙さえ浮かばなかった。

葬式が行われていた場所から遠ざかったホーリアは険しい顔をしていた。

葬式場所はアルディ家に知られたくなかったのだろう、忌々しい惨劇が起こった刑場のある村より更に遠い場所で行われていた。

憶測でしかないが少年は野原で駆け回るのが好きだったのか大陸の東部と西部を隔てる山々の1つに登って全員が祈っていた。

そう言えばアルディ家が統治する場所は修道院や聖堂が色んなところにあつたなと考える。

(偽善者どもめ)

ホーリアは声にこそ出さないが精一杯心の中で罵った。

憎悪を今剥き出しにしたらそれこそ惨めだ、虚しいだけだ。そんな時に考えるのがシャルルの事だ。

光と影が入り混じる瞳、理性が感情を制御出来ておらず、知らないうちに恐ろしい事を考えて虚しさを覚えて枯れていく。

全部、全部枯れていく。

そして落ちる。

「緩やかに朽ち果てていく…」

見えないけれど朽ち果てていく、自分の中だけの小さくて綺麗な箱庭。

朽ち果てた箱庭にはいられないから外の世界に出て、穢れを知る。

綺麗で思い通りにはいかないのだ。

ホーリアは溜め息をつき、暫くぼんやりとしていた。

何も知らない、ただ父親を失って悲しみ、全てを憎む少年に醜い世界を見せなければならぬ。

あの少年は何処まで耐えられるだろう、あの少年は何処まで受け止められるだろう。

……あの少年は何処まで正気を保てるだろう。

フレアを探さなければならぬという使命を放棄してホーリアはただ考えていた。

シャルルがアクロイドの息子でなかったら、自分がアルデイ家の長男でなかったら、何もかも持っていなくてどこにでもいる平凡な暮らしを営む人間だったら。

もしかしたら…。

分かっているけれど自分がアルデイ家の長男であることが全てを狂わせているようで悲しかった。

アルデイ家に関わっていなければカインもイリアも大切な弟と妹だったのに。

『滅んでしまえ、こんな世界なんか滅んでしまえ』

カインもイリアも憎しみの対象でしかないことが、シャルルを追い詰めることしか出来ないホーリア自身に一番の怒りを感じていた。与えられた使命を果たす気にもならず、微動だにすることなくぼんやりと目の前に広がる景色を眺めていた。

「ホーリア…様」

フレアの居場所が見つからないという報告をしようとしたアベルはホーリアの後ろ姿を見て立ち止まった。

今の彼に話しかけてよいのか分からず、ホーリアと同じようにぼんやりと景色を眺めていた。

こんなにも煌びやかに輝く建物が多いのに、見渡す限りの緑が広が

つていて何一つ不満はないのに不満に思ってしまうのは何故だろう。
そしてアベルにはもう一つ苦々しく思っている事がある。

(フレア姉さん)

今、アベルを含むアルデイ家の全員が追いかけているのが彼の姉だからである。

何故フレアを？

彼女が何をした？

彼女はソフィアとシリウスに利用されたも同然なのにどうして殺さなければならぬ？

フレアの優しさを利用したソフィアとシリウスがアベルにはどうしても許せなかった。

幹部という立場上、当主には逆らえないからフレアを追いかけたいが、もしも他の幹部より早く彼女を見つけ出す事が出来たら救い出す。

その為にシリウスやソフィアに対する憎悪を抑え、ホーリアに従っている。

ホーリアもフレアを救うために当主に対する怒りを抑えている。

「ホーリア様」

躊躇う暇はないのだから、何事も早々に行動しなければならぬ。
彼も自分も今置かれている状況から逃げ出したい気持ちは山々だが、此処で逃げたらフレアは間違いなく死ぬだろう。

これ以上、アルデイ家によって犠牲者を出したくなかった。

「アベル…どうだった」

「いえ、見つかりません…南部だったとしたら厄介ですよ、なかなか

か

「アベルが苦々しく呟くとホーリアも同じく険しい顔で頷いた。

アルデイ家側が管轄している地域は大きく分けて4つあった。

東部や北部や西部は前からアルデイ家に忠実だったのでそれ程でもないが、敵対関係にあるライハード家とも接している南部では不満が大きくなっていった。

今、自分達がいるのは大聖堂に一番近い北部であり、シャルル達がいた村などは東部と北部に面している。

仮にフレアがいるとしたら東部だろうとホーリアもアベルも読んでいた。

元はアルデイ家幹部の1人、誰かの手を借りなければ南部に行くのは不可能だろう。

「ホーリア様、ラーナ様は恐ろしい回転が早い…迷っている隙はありませんよ、それに」

アベルにはごまかしは通じないらしい。

どうやら躊躇う原因はお見通しのようだった。

「カインやイリアに気を取られたら我々が負ける。おわかりですね？ホーリア様」

「…ああ、そうだな」

アベルには何もかもお見通しで、偽ることも隠すことも出来ないみたいだった。

それ以上は何も言わず、アベルは背を向けて再び走り出した。

「…フレア殿…」

助け出せるのだろうか？

両親を引き離す手伝いをした人間を許し、助け出せるのだろうか。もしかしたらできないのかもしれない、ラーナに結局弱音を吐いてしまい、結果的にフレアを殺してしまうのかも知れない。

敵があまりにも多すぎる。それも全て血を分けた者が敵なのだ。

ホーリアは暫く動かない。否、動けなかった。

「……」

一方のカインは今日も傷だらけの身体を引きずって寮に帰るところだった。

昨日、イリアがいつでも休みに来ていいと言ったのだが断った。

彼女と自分は異性である。これ以上一緒にいたら怪しまれるに決まっているだろう。

ホーリアを思えば尚更イリアのそばにいてはいけないような気がする。

ホーリアの事さえ考えなければ、アルデイ家の事さえ考えなければ、もう少し与えられる厚意に対して素直に応える事が出来るかも知れない。

しかしカインにホーリアを切り捨てて誰かの厚意に素直になることは不可能だった。

一番欲しいのは彼の優しさであり、励ましであり、認めてもらうことだった。最初はただ会うだけで良かったのに。

ホーリアに会う事だけを考えて此処に来たはずなのに今度は兄としてそばにいてほしいことを望んでいる。

しかし、彼の優しさは決して自分に向けられる事はないのは知っている。

ホーリア以外の人の厚意に甘えることは彼の自分に対する憎しみが増すだけで意味がないと考えたから甘えられない。自分の望んでいることは、ホーリアに認めてほしいからだ。

「…セイシエル…」

足の痛みも気にならない。頭の中は彼で侵食されてしまった。渴望するあまり、彼に憎まれたという事実の苦しむあまり、もう思考回路が麻痺してしまった自分は駄目なのだと自覚する。

「カイン！」

背後から聞こえた声に振り返るまでは。

「カイン、歩くスピードが早いわ。ねえ、カイン」

「……イリア様！」

漸く気付いた時には、イリアが息を切らながら自分の隣を歩いていた。彼女の呼ぶ声に全く気がつかなかった自分がとても可笑しいと思った。

イリアは心配そうな表情で

「カインったら、さっきまで何度も呼んだのに…何か考え事でもしていたの？」

気遣うように話しかける。

考えていた内容は依存的な望みだった為にイリアには言えなかった。それに、自分も彼女とホーリアと血が繋がっているということなんて口が裂けても言えない。

知らない振りをして、事実を隠し通さなければならぬ。
事実を言えなかったのは、彼女に少なからず惹かれていたからとい
うこともあり、例え言ったところでどうにかなるわけでもないとの
んきに構えていたのもある。

「ありがとうございます、イリア様」

辛い環境の中にいたからなのか彼女の笑顔一つで随分楽になった。
険しい表情から一変したカインに向かってイリアは笑いながら

「カイン、あまり無理はしないでね。」

あ、でも倒れたら毎日カインの看病しに行けるからいいのかな？」

そんなことを平気で言った。

明らかにからかわれた…カインは少しだけムツとして言い返した。

「倒れませんかよ、それに私こう見えて今まで大病を患ったことない
ですからね。仮に患ったとしてもイリア様には頼みませんよ」

「まあ！酷いわ、私の看病が乱暴だというのかしら？」

カインの発言に今度はイリアがムツとして言い返した。

しかし、よく見たら勝ち誇った笑みを浮かべるカインがそこにいて
イリアはますますムツとしてしまった。

やはり何をしててもカインは格好良いと自覚し、イリアは悔しくなっ
て何も言い返せなくなってしまった。

（悔しいくらいに）

本当に悔しい位にカインに惚れてしまった。

「イリア様、如何なさいましたか？」

言い返せなくなってしまうたらムキになってバカと連呼する声が聞こえなくて訝しみ、声を掛けた。

「カイン」

ふわりと唇が重なる。

多分、自分はこうなることを予測出来なかった。

これが最大の失敗であることを予測出来なかった。

実の姉であると知りながらイリアとキスをしてしまった。

……もしもあの時、彼女に声を掛けなければ。

……もしもあの時、彼女に背を向けたままだったら。

これが、ただの戯れだったらどれだけ良いだろう。

カインは子供心に罪の意識に苛まされながらも、イリアから離れなかった。

修道院に戻ったシャルルとレディシアは次々と怒られる羽目になった。

最も、怒りを向けられたのはシャルルであり、こんな時にレディシ

アに探させないでという内容が殆どだった。

しかしレディシアはその度にシャルルを庇ったので益々逆効果で、シャルルが怒られるだけだったが。

その度にシャルルは肩を竦めて謝罪しつつ改めて認識する。

(俺、兄貴分失格かもな)

レディシアを助けなければならぬ、守らなければならない筈の自分が庇われ、守られていた事を知って苦笑する。

レディシアと違って感情のまま走る自分は本当に兄貴分失格なのかもしれない。

そして、自分の為に彼を連れて行ってしまおうと思ったならレディシアに謝りたくなかった。

(…ごめんね、レディン。巻き込んでごめんね、君の優しさにつけ込むような真似をしてごめんね)

何度も何度も心の中で謝罪を繰り返す。

途端に体が浮くような感覚を覚えた。

「シャルル!」

今まで沈黙を守っていたジャンが悲鳴を上げながら真っ先に駆け付けて来たのが分かる。

「…シャルル……シャルル!」

大丈夫と言いたかったが上手く言えない。

朦朧とする意識の中、浮かんだのはレディシアの無邪気な笑顔とホーリアの嘲笑うような台詞だけだった。

何も分からない、何も聞こえなかった。

ただ、闇の中に沈んでいくような気がした。

第十一節：痛み分け（前書き）

終わらぬ憎しみは廻り、追い詰められて捕らわれる。

苦しい、苦しい、誰か助けて。

お前なんか嫌いだ、嫌いだ、嫌い。

『だけどいとおいしい』

咄嗟に吐き捨てた言葉の中にある己の意思さえ知らずに。

第十一節：痛み分け

俺を見てくれたらそれでいい。

憎まれてもいい、道具でも構わないよ。どんな感情でもいい、何時までも俺だけを見てくれるなら何でもするよ。見返りなんかいらない。

（でも、本当はね）

俺を憎まないで、認めてくれよ。

お願いだから、捨てないで。

声にならない悲鳴が響いて、届く前に消えた。

「…暫く待たなければな」

ホーリアもアベルと共に東部へ行きかけたのだが、それは危険だとアベルに止められた。

アルディ家の長男が動き回ったらラーナに察されるかもしれないからだ。

アベルからしたらホーリアは今でも十分動き過ぎて危険だと思っているのだろうが、己の評価は生まれた時から既に地に落ちているからこれ以上落ちないだろうと思う。

それにラーナ達は己の事などどうでもいいのだろう。

（どうせ直ぐに見抜かれる）

ラーナを誤魔化すなど不可能だ。いつでも見抜いてくる。

それが時に疎ましくもあれば時に助かるときもあるから正直言えば複雑だった。

「ソフィアの先輩か何かだったよな」

よく分からない。

思えば自分はソフィアもシリウスもラーナも簡単にしか知らなかったことを認識する。

多分、彼女達を知らなかったから憎むことしか出来ないのかも知れない。

母に捨てられた幼い頃から此処まで来る為には、誰かを憎むことしかなかつたのかもしれない。

何も知ることが出来ないままソフィアもシリウスもいなくなったから余計に誰かを憎まなければならなかった。

全ては事実を受け止められない弱さを認めたくないが故の言い訳であることは知っているが。

知っているが、心がついて行かない。

理性と感情が一緒にならない。

何時になれば誰かを憎むことから解放されるのか自問するがきつと一生解放されないと自答した。

1人でじつとするのも疲れたホーリアはゆっくりと立ち上がり、扉を開けた。

ホーリアは目の前にカインがいることを知り、固まってしまった。しかも彼は途方に暮れている。

「……カイン……？」

何も言わないカインに向かってもう一度呼び掛ける。

それにしても何故ここにいることをカインが知っているのだろうか。シャルルにでも教えてもらったのだろうか。勝手に結論つけ、慌てて部屋に招いた。

「とにかく入れ」

ホーリアの後ろをカインはフラフラしながらついて行った。先程から焦点の定まらないカインを半ば無理矢理椅子に座らせ、向かい側にホーリアが座って事情を聞いた。

「カイン、どうした？」

カインは一切質問に答えず、俯いたままで何かを考えているようだった。

それが無性に腹立たしくなった。

「なにがあった」

訳の分からない苛立ちに任せて問い質せば思ったより厳しい口調になってしまったことを知る。

どうやら此方が苛立っていることに気付いたのか、カインは漸く顔を上げた。

青く澄みきった瞳が自分の姿を映している。

寧ろ自分以外は何も見えていないように感じてホーリアは思わず目を逸らした。

俯いたままのカインに苛立っていたのに何故だろう。今のカインを見るのがとても怖くて目を逸らしたまま…そんな自分が可笑しいと思いつながらホーリアはカインに問い掛ける。

「落ち着いたか？」

出来るだけ感情を抑えて当たり障りのない言葉を選んでカインに言ってみるものの、会話は当然続かない。

どうしたらいい？

気まずい空気が流れて、益々話せなくなる。

何か、何か言わなければならぬのになかなか話せない。

しかも相手はカインだから下手なことは言えない。

元々話すことが苦手で、愛想がよくて話しやすいと感じるイリアとさえまともに会話が続いた覚えがない。

肝心のカインは黙ったままで口を開こうともしない、余計に途方に暮れてしまった。

「…す、すまない…」

途端に口から出たのは謝罪の言葉。

ああ、一体何がしたいのか。

こんなにも憎いのに…恨めしいのに…疎ましいのにどうしてこうなるのだろう。

思考回路が得体の知れないものに侵食されてしまったような気がして余計に怖くなる。

『セイシエル、もう嫌なの。お願いだから近寄らないで』

不意に思い出したのは母に拒絶されて泣いた幼い自分。

得体の知れないものに支配されるのは御免だ、幼い頃に拒絶された

悲しみを知って母に捨てられた絶望と憎悪を知った。
強すぎる感情を抑制する術も知らないまま、大人になった。

今のカインを見るのが辛いのは……。

(やめよう、もう考えるな)

これ以上何も思い出したくなかった
ホーリアはカインから目を背けた
たまま空を見つめていた。

ホーリアの苛立ったような声がしてもカインは顔を上げるだけで何も言わなかった。

何も言わないが、じっとホーリアを見つめていた。

嗚呼、嗚呼何という感情。

俺があなたの瞳の中にいる。俺だけを映している瞳を見て歓喜する。これは一体何だろう。この歓喜を何と呼ぶのだろう。

ねえ、あなたは知ってる？

知ってるなら教えて、お願いだから黙っていないで教えてくれよ。

先程までホーリアは此方を見つめ返してきてくれたのに今は違う。

此方から目を背けたまま違うところを見ていた。

お前なんか見たくない
と全身で訴え、はっきりと拒絶されたことを知りまた苦しむ。

カインが此処に来た理由は彼にイリアの事について相談したかったのだが、もうどうでもよくなってしまった。彼のそばにいてただで悩みは消えてしまう、だからイリアの事は話さなかった。

何故なら「どうした」と言っただけで心配してくれたから。彼から心配されたというだけでかなり楽になったと同時に絶対に変えようもない事実にぶつかって苦しみが増すばかり。

そう、彼が俺を憎んでいること。

彼が心配してくれる理由もきつと後でイリアに五月蠅く言われるからであり、偶々此方の様子を見たからであり、心から心配してくれるわけではないこと。

遠くにいたらきつと何も聞かないだろう。

それどころか、俺が苦しむことを望んでいるだろう。

(…セイシエル様)

心の中で何度も叫んでいても口に出して呼べない。彼の名前を呼ぶこと自体が禁忌であるような気がした。

「……此処は」

白で整えられた部屋、清潔感溢れるベッドで寝ていたシャルルはゆっくりと目を開ける。

どうやら倒れたようだと思えるまでそう時間は掛からなかった。倒れる直前に何か怖いものが脳裏に浮かんで、それが何であるかわかる前に倒れてしまった。

何か、何かとても怖いものが一瞬だけ脳裏に浮かんだのに、分からないなんて。

コンコン

シャルルが物思いに耽っていると扉を叩く音がした。

「誰だ？」

レディシアかジャンのどちらかだと思いつつ問いかけてみると

「僕だよ、シャルル」

返ってきた声の主はやはりジャンだった。

彼はそのまま扉を開けて中に入ってきて来た。

「気分は良くなつたかい？」

「ああ…お前の方こそ長居は良くないんじゃない？」

「大丈夫だよ」

ジャンはにっこりと笑って返した。

シャルルがジャンの事を此処まで心配するのは彼が少し動いたり遠出したりするだけで寝込むことが多いからだ。

それでも幼い頃よりは大分良くなった方だが昔はアクロイドがずっと付きつきりで看病したこともある。

「もう大丈夫だよ、本当に」

「そっか、それなら良いんだが」

「心配しすぎだよ、シャルルは」

ジャンは苦笑しながらシャルルに向かって言う。

本当は心配してくれることがとても嬉しいが、素直になれない性格が邪魔をしてついこんな事を言ってしまう。

そしてシャルルに心配かけるために来たわけではない、彼に少しでも協力できるかもしれないと情報を持って来たわけだ。

「シャルル、ハロルドさんがこの間アルデイ家の専属医師になったの知ってる？」

「…え？」

驚くのはシャルルだ。

ハロルド：ジャンの従兄でアクロイドの下で医師になるための修行を積んでいたではないか。

生憎、彼を覚えていないが。

「ハロルドさんが」

「何かあつたら訪ねて見たら？」

彼は大聖堂にいるから」

またまたシャルルは驚く。

専属医師でも最初は下級の兵士や修行を積む魔術師達のいるサーリイスシティにいるはずなのに。

アルデイ大聖堂にいるとは…。いきなりアルデイ家の大聖堂にいるとは、これでは第二のアクロイドではないかとシャルルは思った。

「分かった、有り難う。明日戻って早速訪ねてみる」

突如湧き出る焦りがジャンに知られないように取り繕うのが精一杯だった。

「うん、シャルル…」

ジャンは再び笑ってシャルルの手を握った。

「シャルル、君の背負うものが何なのか分からないけど、必ず目的を果たして帰って来てよ。」

待ってるから、君が帰って来るのを待ってる。

本当は手伝えたら良いけれど、邪魔になるから…ライハードに住む僕は君の邪魔になるから」

ジャンの寂しそうな表情にシャルルは後ろめたい気持ちになるが頷いた。

「いずれ母さんとヘレナに戻る」

ヘレナ…そう、アクロイドの故郷だ。

シャルルはあまり覚えていないけれど、アクロイドがいなくなるまでヘレナには帰って来ていたのだ。

ジャンの家族ともシャルルやジャンが生まれた頃からずっと付き合いがあった。

今はお互いあまり来れないが。

「あ……ジャン、呼んでるよ。早く行かないと」

前を見れば何時の間にかジャンの両親がいた。

長い間話していたのか気付かず、入って来たのだろう。

なりふり構わず入って来たのはもう直ぐ帰る時間だからだ。

「ほら早く」

寂しそうな表情を浮かべるジャンを無理矢理促して両親の元へ向かう。

「すみません…」

ノックに気付けば良かったと少し後悔したがジャンの両親達は全く気にしていないようだ。

「君が謝ることはない。ただ、私達が何時までも此処にいたら君の立場が悪くなる…アルデイ家に所属する君がライハードの人間と関わっていたらと知れたら…」

「そ、そうですね」

「本当はもつと此処にいたいけど…」

しかしシャルル君、アクロイド様の事は大変無念だと思うが、決して無理はしないでくれ」

「…ありがとうございます、おじさまもおばさまもお気をつけて」

シャルルは深く頭を下げてジャン達の姿が見えなくなるまで送った。

ジャンの父親の警告は遅すぎた。限界はずっと前に越えてしまった気がする。

しかし退くわけにはいかない。

父親の敵を討つためにアルデイ家をじわじわ崩壊させようとしていたのに、進んでいる方向はとてつもない悲劇ではないかとシャルルは思った。

「痛い…今日も厳しかったな」

どうしてこんな目に遭わなければならぬ？とは言わない。

こんな痛み位大して気にするほどではない。

(言っではいけない)

足を引きずりながら警戒する。

同じ訓練に励む彼らは此方の様子を窺っているのだ、少し気を抜けば終わりだ。

しかし思わぬ人物の出現でカインは大して警戒することなく救われる事になる。

「カイン！」

前方から来たのはやはり彼女である。

「イリア様！」

「折角だから来ちゃった」

「大丈夫ですか？」

不安そうに聞いてみたら彼女は首を縦に振って頷く。

「大丈夫よ！今日は勉強もないから自由だし！」

カイン、また怪我してるの？」

イリアは下を向いてやや悲鳴のような声を上げた。

「あ、これなら大丈夫です。いつもの事ですからお気になさらず」

カインはイリアに心配させまいと痛みを堪えて笑っていたが、イリアはカインの額をコツンと叩いて言った。

「こんなに酷いの心配しないわけないでしょ」

「で、でも」

「ほら早く来て。血がたれ落ちる」

イリアはカインの手を引っ張って歩く。そんな事しなくてもいいのにとカインは思ったが、一方では彼女の優しさがとても有り難いと思った。

「…イリア？」

イリアのいる部屋がある城まで歩いて来たのを偶々発見したのはホーリアである。

呆然と立ち尽くすホーリアの登場にイリアは感謝した。

「お兄様なら大丈夫ね！カインを治療室まで連れて行ってくれる？」

有無を言わせない聞き方にホーリアは仕方無くカインの手を引っ張って治療室まで連れて行く。

「行くぞ、カイン。その足では歩くのも辛いだろうがもう少しだ」

治療室は城に入ってすぐのところである。この家は無駄に広すぎると毒づきながらもカインの手を引っ張って足早に歩く。

カインがふらつきながら歩いているのが見えたが止まるわけにはいかなかった。

歩かなければ、早く治療室に行かなければならない思いで必死だった。

「……ホーリア様……」

カインは待つてくれと言わんばかりに名前を呼んできたが聞く耳を持つわけにはいかない。

この声を聞いてしまったら、きつとだめだ。
ああ、でも。

「…辛いのか」

立ち止まり、振り向かないで声を掛けた。

カインは足を引きずるようにして隣に来た。

「大丈夫です、ホーリア様」

いつの間にか手を繋いでいる事に気付いて酷く慌てた。

ああ、本当に嫌だ。

綺麗で細い指が絡められていることを知って更に嫌悪感が増す。

カインのこの手を、この指を拒めそうにない自分がとても嫌いだと
ホーリアは毒づきながら治療室に辿り着く。

（全く…イリアは厄介事を持って来る）

彼女はきつとカインが実の弟であることなんか知らない。

しかも彼女の父親は今当主として君臨しているディアルトじゃなく
て弟のシリウス。

でも、でも彼女はきつとカインを弟だと知って退くだろうか。
いや、そんな事はない。

救急箱を取って蓋を開けて包帯と傷薬とコットンを探しつつ、物思

いに耽る。

(母上にそっくりじゃないか)

不覚にも母とイリアの共通点を知った自分をホーリアは心の中で笑った。未だに母を求める自分があまりにも滑稽で。

あまりにも愚かで健気な自分を笑い続ける。

(そして、イリアの為にこんな事を思いついたなんてな)

ホーリアはカインの傷を傷薬を染み込ませたティッシュで血を拭き取りながらまた笑みを浮かべる。

ガチャリ

「お兄様、無理言っでごめんなさい」

ほら、彼女はカインの居るところならどんなところだって来るだろう。

「イリアとカインが一緒にいたら問題だからな」

事実を知らない召使い達からしたら親しげに歩くカインとイリアの仲を噂するかも知れない。

ありもしない噂を流されてラーナに知られたらどうなるだろう。考えただけでも恐ろしい。

「はい、終わった」

カインの怪我を治療が終わり、立ち上がって救急箱を戻そうとした。

「あ、セイシエル様」

カインに呼ばれて振り向いた。

「どうした、カイン」

声が少し震えていた事に気付く。

カインを目の当たりにすると冷静になれないのは悪い癖だ。

「ありがとうございます、セイシエル様」

本当に、心からの笑顔を浮かべてそんな事を言うなと叫びたい。

カインやイリアを見る度に自分が如何に薄汚い人間であることを自覚してしまうから。

何を返せば良いのか分からず困ったように笑う。

ああ、その笑顔さえ拙いと知っているのに。

「イリア様にも感謝致します」

年齢に似つかわしくないカインの振る舞いにイリアは眉を寄せながら「どういたしまして」と言う。

とても分かり易いイリアの表情にもカインは気付かない。

いや、敢えてイリアによそよそしい態度を取っているのだろうか。

カインは複雑な顔をしていた。

「全く気にしなくていいのよ。ねえお兄様」

イリアは苦笑しながら言ったので慌てて頷いた。

「あ、ああ、気にするな。放っては置けなかったからな」

慌てすぎて咄嗟に出た言葉が嘘かどうかは分からない、しかしカインは驚いたような表情で此方を見ていたのは確かだ。

コンコン

更に慌ててしまったのは侍女がイリアを呼んでいたことに気づかなかった事だ。

「イリア様、先生がお呼びです。すぐ来てほしいと」

「…いきなりどうしたのかしら…」

疑問に思い、一瞬だけ止まったイリアだが直ぐに返事をして部屋を出る。

「ごめん、お兄様、後は任せますわ」

そう言ってイリアは出て行ってしまった。

「…イリア様、大丈夫なのでしょうが」

「大丈夫だ、あまり気にするな」

イリアの勉強を見ている先生は何かとイリアを呼ぶ。理由はイリアが勉強を余りしないものだから説教でもしているのだろう。

「イリア様はセイシエル様を本当に信頼しているんですね」

「…え？」

まただ。

カインの言葉はいつもいきなり此方に来るからこんな返事しか出ない。

「私も兄弟がいれば良かったのに」

どういう意味だろう。

カインは此方に向かって呟いている。

ああ、答えてしまいそうだ。でも許されない、カイン、私とお前は。

「……カイン、イリアの……」

答えられない代わりに口から出た言葉はカインにも自分にもとって余りに無茶苦茶なものだった。

『イリアの護衛になってくれ』

カインは目を見開き、呆然としたまま何も言わなかった。

一方、自分も何も言えずに沈黙するだけだった。

咄嗟に出て来た言葉に驚き、疑問や羞恥を覚えたのは2回目だった。

第十二節：救済への第一歩（前書き）

気付いてしまった。

俺は身勝手な憎悪に苛まされていただけだと。

憎しみは何も生み出さないと気付いてしまった。

途方に暮れた果てに見つけた答えを教えよう。

『救うことが俺の使命なのだ』

流れ落ちる涙が憎しみを浄化してゆく。

生温い涙、則ち血の涙。血の涙を拭い去る力を下さい。

第十二節：救済への第一歩

俺はお前を許さない。

(だから此処にいる)

何でもしてやる。

(手段を選ばず攻勢に出るのは冷酷か?)

邪魔をするな、邪魔をするなら容赦はしない。

(立ちふさがるなら斬り捨てる)

勝つ為には手段を選ぶ暇などないのだ。

(所詮足元にも及ばない)

イザの一件が済んだ後、以前シャルルを迎えに来たアルディ家の幹部の1人であるラルクが待っていた。

「よっ、シャルル少年!」

修道院から戻る途中、ラルクに会ったシャルルは思わず笑った。

「お、レディシア少年も一緒かい?

シャルル少年の知り合いとは知らなかったなあ」

「ラルク様、お久しぶりです」

ラルクに挨拶をするレディシア、やはり幹部になるべき者同士の繋がりだろうか。

ラルクは他の幹部とは違って見えるとシャルルは思った。少なくともシャルルはラルクに好感を覚えたのは確かだった。

「堅苦しいなあ、シャルルもレディシアも。

あ、隣にはイザベラ殿も！」

「…今日は、ラルク様」

イザベラは淡々とラルクに挨拶を述べる。

アルデイ家の幹部に対してあまり良い印象を持っていない。

ラルクに偏見を持つべきではないのだが、そう簡単に信用出来るわけではなかった。

しかしシャルルは村に戻るまでラルクの話に相槌を打ったり答えたり、自分からラルクに話しかけたりした。

ラルクの明るい笑顔に重たかった気持ちが少しだけ軽くなった。

その後も戻るまでラルクはずっと他愛ない話を続けたが、次の彼の一言でシャルルは硬直する事になる。

「そう言えば、シャルルに会いたがっていた人がいたなあ…見るからに医者って感じだったが何か心当たりでもあればメモ渡しておくから聖堂に来たら寄ってみたらどうか」

そう言ってラルクは紙切れを渡した。

“最高幹部：ハロルド”

シャルルは息を呑んでその紙切れを見た。

確かにハロルドと書いてあった。しかも、アルデイ家に所属する医師達を統率する役目でもある。

そのための最高幹部：シャルルはゴクリと息を呑んだ。
圧倒的な力を持つアルディ家にもしかしたら対抗出来るかも知れ
ない。

シャルルの顔には徐々に歪んでいく。
父を奪ったアルディ家に対する憎しみを全面に出した表情に。

しかし彼は知らない。

その表情は隣にいるレディシアを震え上がらせる程のものであるこ
とを。

「シャルル、顔が怖いよ…」

「あ、ごめん」

レディシアが恐る恐る言った言葉にも、シャルルは棒読みで謝った
だけで全く気付かなかった。

もう一人、シャルルの表情を見たラルクは顔にこそ出さないが内心
ではレディシアと同じく怯えていた。

（恐ろしい奴だな… たった10歳の子供があんな顔をするのか…？
そんなにアクロイド卿を？）

ラルクはシャルルが憎悪にとらわれて歪んだ様をありありと見た。
そして、その様から目を逸らしたくても逸らせなかった。

一方、足を怪我したカインの治療をしていたホーリアは平然としつ
つ内心は焦っていた。

『イリアの護衛になつてくれ』

場違いにも程がある言葉にホーリアは慌てるしかなかった。カインも驚きのあまり声すら発せないといった様子だ。どうしてそんな事を言ってしまったのか分からない。

ただ、カインやイリアを見ていたら彼等を一緒にさせたかったのかも知れない。

互いに惹かれ合う彼等に何か強い感情を覚えてしまった。

「い、今の事は忘れてくれ」

居たたまれなくなってそう言った。

「何だ、イリアがカインの事を気に入っているみたいだから…イリアのそばに居てやってくれと言いたかっただけだ。

ほら、そんな目で私を見るな」

カインは暫く此方を見ていたかと思つたら突然笑い出した。

「…あはははっ！せ、セイシエル様…いや、ごめんなさい。おかしくてついつい笑つてしまつて…」

「…五月蠅いぞ、カイン。護衛とかそんな役目ではなくて…ただ、イリアを頼みたいだけだ」

言えば言うほど墓穴を掘るような気もするが言わなければ恥ずかしくて堪らなかつた。それが本音なのかも知れない。

「…貴方って本当にイリア様の事を大切に思っているのですね」

しかしそんな事を言ったら更に彼は笑って言い返した。

「…妹だからな」

それしか言えない事がとても悔しかった。

カインの台詞にいちいち振り回される事がたまらなく悔しくて、しかし悪くないなと思ってしまった。

なあ、カイン。私は多分心の中で望んでいたのかもしれない。いや、今も望んでいるのかもしれない。

ずっと、お前の兄になりたかったんだ。お前の兄になりたくて、ただそばにいたかったんだ。

『叶わないのにな』

どうしてだろうか。

何故、何故。

カイン、お前を憎むことしか出来ないのだろう。

「セイシエル様、どうかなさいましたか？」

「…いや、何でもない」

カインの視線を受け止めるのが辛くて目を逸らした。心配してもらおう資格などなかった。

きっとこれも罰だと思った。

「……もうそろそろなんだけどな、クスクス」

此処はアルディ家の地下室…響き渡るのは悪魔のような笑い声だった。

「ディアルト様…死の契約のことかしら？」

悪魔の隣にいたのはラーナだった。

ディアルトと名乗る悪魔は笑いながらラーナに問い掛ける。

「ラーナ、お前は恨んでいるのかな」

「ええ、でもこの姿になって手に入れたものだってあるから」

「…僕もさ」

「……」

彼が一言発したのを最後に2人は黙ったまま答えなかった。特に、ラーナは答えられなかった。

（ソフィア…）

ソフィア…カインの母親である。

彼女を手にしたのはラーナである。しかしラーナはその事を悔い、ソフィアを殺せと迫った彼を恨んでいた。

未だ鮮明に残っているソフィアの悲鳴が脳内でこだまする。

（ラーナ！？）

(…ソフィア…幸せそうね)

突然のラーナの訪問に驚いたソフィアの声。

(…カインとイリアという可愛い子供が生まれて本当に幸せそう。セイシエルを捨ててお兄ちゃんを捨ててシリウスと結ばれて羨ましいわ)

(…セイシエル…)

(あら、セイシエルの事が少しは気になるのね)

ソフィアに対して冷たく返す自分の声。

(あの子には悪いことをしたと思ってるわ…ラーナ)

ソフィアの事は十分に理解していたとは言え、やはり許せなかった。

彼女はシリウスを愛していた。しかしアルディ家はシリウスとソフィアの結ばれる事を認めなかった。

正しくは当主になるディアルトがそれを許さなかった。分かる、彼女が苦しかったのは分かる。

(でもセイシエルはね、関係ないのよ。あなたの苦しみと悲しみを子供にぶつけていいわけじゃないでしょう？ねえ、ソフィア)

(…ラーナ、聞いて…ねえ、聞いてよ！)

彼女は…ソフィアは気付いてしまったのだ。

きっと私の思いも、これから私が何をするのかも。

私はまだ何もしていないのに。

(ラーナ、聞いてよ。ディアルトは正気じゃないの。どうして貴女は…！)

(そんなの知ってるわよ！)

縋るソフィアの腕を払って叫んだ。
有りつ丈の力で彼女に向かって叫んだ。

(でもソフィア、貴女は逃げただけよ。
貴女が逃げてセイシエルはどうなっているか知ってるの？
貴女とカインを恨むしか出来ないのよ？ 貴女は逃げるべきじゃなかったのに逃げたのよ！)

しかしソフィアは私を睨み、言い返してきた。

(ラーナ、私は貴女のように強くなかった！私だって逃げたいわよ！
ディアルトからも、セイシエルからも！
セイシエルは人の子じゃないのよ！
ディアルトが力を得るために生み出した子なの！私にどうしろって
いうのよ！)

多分、私はあの時。

あの時、ソフィアを撃つたのは。
泣き叫ぶソフィアに向かって私は銃を突き付けた。
彼女はハッとして私を見上げた。
私は多分笑っていた。笑いながら彼女に向かって言ったのだ。

(ソフィア、もう何も言わないで。苦悩する事なんてないから…楽

にしてあげるわ)

彼女を逃がしても良かった。でも、きっと生きているうちは全てに怯えなければならぬ。

彼女を恨むセイシエルが大人になればソフィアを抹殺しようとするかもしれない。

セイシエルに抹殺されるソフィアも、それによって苦しむセイシエルも見なくなかったのかもしれない。

(…痛いのは一瞬よ、ソフィア)

ソフィアは何も言わなかった。

錯覚なのかもしれないけれど、彼女も私と同じように笑っていたように見えた。

それから数分後、私は銃をおろした。

ソフィアは倒れ、辺りには血が飛び散っていた。床にも彼女の頭から流れる血が広がる。

此処に置き去りにしても構わなかったが、それはいけないと誰かの声が木霊する。

そして更に数分後。

(ラーナ様！)

駆けつけてきたのはアルディ家の幹部だった。

(ソフィアを刑場に晒せとディアルト様から命を受けております)

(…そう…遂行して頂戴)

(はっ！)

幹部達がソフィアの遺体を粗末な板に積んで運ぶところを私は見届けた。

銃を撃つ前にソフィアから受け取ったロザリオを握り締め、ゆっくりと彼女の家を立ち去った。

…ソフィア…。

声には出さず、心の中で彼女を呼んだ。

“ごめんね”

撃つた時に聞こえた気がした…ソフィアがセイシエルに対する懺悔の言葉が。

ソフィア、私の方が弱かった。

貴女を、シリウスを守れなかった。

(私の方が酷いわよね、よほど)

兄の味方をして全員を切り捨てる私の方が冷酷だった。

そして、シリウスも手に掛けた私は。

「ラーナ？」

「…あ、申し訳ありませんわ」

しまったとラーナは思った。

「…お前が選んだ結果さ。大切な親友達を捨てられるなら、ね」

ディアルトには何もかも見抜かれていたようで、ラーナは観念した。

「…そうですね」

“愚かな私”

ディアルトに身を委ねた理由があまりにも単純で、自分があまりにも惨めでならないとラーナは思った。

「ラルク様、此処までわざわざ有り難う御座います」

イザベラは淡々とお礼を述べ、頭を下げた。
ラルクは苦笑しながら

「いえ、当然のことをしたまですよ。あはは」

と言って背を向けて足早に去った。

イザベラにどう思われているのか分からないほどラルクは子供ではなかった。

シャルルとレディシアの笑顔が見れて良かったとは思ったが。

此処から大聖堂に戻るには近くの街まで出て馬車に乗らなければならない。
らない。

「此処から一番近い街は…アエタイトかよ。まだまだ歩くぜ」

思えば此処から一番近い修道院も森や険しい道を散々歩き、小さな山を登ったところにあった。

恐らく馬車は走らないため、最低3時間は歩く。
一番近い街に行くにも30分は掛かる。

「見離された村っていう名前がつくのも分かるな」

アベルから聞いたことがあった。

“このアルデイ家周辺には神に見離された村とも呼べぬ小さな集落がある”

神に見離された村の中で一際輝く少年…それがシャルル。
しかしシャルルの事を考えたラルクは思わず身震いした。

『あの子の目は憎悪と怒りで光っている』

きつとそのうちに目から光も消え失せていくのだろう。

そして残るのはまるで人形のような濁った瞳。

ラルクは拳を震わせた。

(だめだ、だめだ。絶対にだめだ)

シャルルには思いとどまって欲しいと願わずにはいられない。

踏みとどまって、考え直してほしいと。

ラルクにとってシャルルは希望だった。

彼が初めてだった…真実を明かすために追求するという志を持って現れたのは。

しかし、高い志を抱いた彼の瞳には光がない。

正しくはぎらつく程の負の感情に苛まされていると言った方が良い

のだろう。

(だめだ、絶対に)

ラルクが首を振っていた時、声は聞こえた。

「ラルク様！」

走って来たのは村に帰った筈のシャルルである。

「…シャル少年、何故此処に？さっきまでイザベラ様と一緒にだったのに」

ラルクが不思議に思うのも無理はない。

シャルルはレディシアや母と故郷に帰ったはずだ。目を点にするラルクにシャルルは説明した。

「ラルク様がいなくなるから慌てて追いかけた。此処まで来るのに時間掛かったし、もうラルクはいなくなったかと思っただけだ」

「こ、こんなところまで…。俺に聞きたいこともあるのか？」

ラルクが問いかけたのを見たシャルルは不敵に笑いながら一言放った。

「分かっているくせに」

分かっているくせに。

ラルクを罵るような、嘲笑うような声。

ラルクは目を伏せた。

「ハロルドさんのところに案内してくれって言われるのがいやでさっさと帰ったんだからね、ラルク様は。違うの？」

違うと言ったら彼は今にも…。

ラルクは観念して「そうだ」と言った。

「やっぱり。だって当主様から信頼されている医者の方であるハロルドさんにたかが召使いが会えるわけない…でもね」

続きを言おうとして、しかしシャルルは何も言えなかった。

「…ラルク？」

そうだ、と言ったきり下を向いたまま何も言わないラルクを不審に思った。

感情的になってしまったと気付いた時には遅かった。

ラルクはガタガタと肩を震わせて泣いていた。

ふと、シャルルは下を向いた。

ポタ、ポタ…

ラルクの瞳から流れ落ちた涙を見て、浄化されていく気がした。もっと近付き手を伸ばして涙を受け止めてみる。

“生温い”

シャルルの素直な感想だった。

自分の流した涙はどうだろう、きっと凍りついた涙だったに違いな

い。

涙の源は血であると、嘗て父は言った。

自分の流してきた涙には血の生温さが無かったのだろうか。

(アルディ家の次期幹部なのに)

ラルクより自分の方が余程冷酷だったという結論を改めて突きつけられた。

自分はなんて醜いのだろう。

そんな事を感じたら惨めで苦しくなった。

生温い涙に洗われていく心。

(どうすればいい?)

戸惑ってしまった。

何故泣いているのかは分からない。しかし、1つだけ分かることがあるならば。

(俺の為に泣いてくれている)

自分は誰かのために泣いただろうか。

(父さん、母さん、俺は…俺は)

誰かのために泣いたことなど全くなかった。

歪んだ心も、父を失った虚しさも、何もかもラルクの流す涙に拭い去られていく。

シャルルは何となく目を閉じた。

たった一筋、生温い涙が流れ落ちるのを感じた。

過ちに気付いてしまった。

凍てついた心が生温さによって解放されていく。

今更気付いたところで遅すぎた。

後戻り出来なくしたのは憎悪に捕らわれた自分だと。

せめて、後戻り出来ないと言っならば。

(ホーリア)

何故かホーリアの不敵な笑顔が浮かんだ。

「……ラルク、泣き止んでよ」

次に頭に思い浮かび咄嗟に言ったのは、目の前で泣くラルクを宥める言葉だった。

(俺なんかのために泣かないでくれよ)

そんな綺麗な涙、自分のために流さないで欲しいと思った。

「ねえ、ラルク……」

宥めることさえ出来ないほど無力だった事実を知る。
今まで見えていなかったものが見えてきた。

そう、答えは。

『救済』

父は命と引き換えに自分たちを救ったのかもしれない。

生かされた命、自分も救わなければならない。

『少年は一步、また一步と進む。』

死をも恐れず、悲劇に向かって進む』

間奏：残響のあとには、（前書き）

堕ちてしまう。

そして、すぐに消えてしまう。

棘の道を歩き、その後には何も残らないと思っていた。

元から何も残っていないければ、失うことの悲しみや苦しみを味わうこともなかったのに。

お前の笑顔が

あなたの穏やかな声が

あの子の活発な話し声が

消えずに残る。

『消えてしまえば楽になるのに！』

響き渡るのは虚しさを含んだ叫び声のみ。

間奏：残響のあとには、

「セイシエル様、有り難う御座いました」

足の手当てを終えたカインはホーリアに礼を述べた。彼は決してホーリアと呼ばないけれど。

「イリア様のところに参ります」

「ああ、イリアも喜ぶ。任せた、カイン」

「…ええ」

カインは眉間に皺を寄せて頷いた。命令には逆らえないのだから仕方無い。何より彼はカインに任せたとまで言ったのだから、断るなど出来るはずがない。

居たたまれなくてカインはもう一度深く頭を下げて早々に出て行った。

パタンと扉が閉まる。

「…カイン、笑ってくれよ、私を」

カインが出て行って少し経った後、ホーリアは呟いた。父親に近付くためにはカインもイリアも消すしかないのだと、仕方無いのだと、何度も言い聞かせた。

『本当に？』

まただ。

不意に問い掛ける声に彼は頷く。

(本当だよ)

そう答えたら声は笑う。

『違うな、お前はカインとイリアが邪魔で仕方ないのだ。事実、お前の母親はカインとイリアは愛したけどお前は愛していなかったじゃないか』

(違う)

否定したら、声はまた笑う。

『認める、お前はカインが憎いのだ』

何度も何度も声は己を苛んだ。

認めたくないと頑なに否定し過ぎて頭痛さえ起こすことがある。

『認めたら楽になるよ、セイシエル』

囁いた声を見殺ししてバツと立ち上がる。

これ以上聞きたくなくて、用があるわけでもないのに外に出た。

(こんな時に限って頼るのが架空の存在とは)

行き先は彼にとって“もう1人の父親”を葬った場所であった。
現実逃避…正直、今の状況から逃げ出したかった。

自分から、カインから、身内から、全てから逃げたかった。

そんな浅はかな事を考えていたら何時の間にか出口まで歩いていった。

『おいでよ、セイシエル』

脳内に響いたのは彼を何処かへ誘う声だった。

(…君は何処にいるのだ?)

無意識に声に向かって問い掛けてみる自分がいた。

『セイシエルが一番知っている場所だよ』

声は問いに答えた後、笑って言った。

『初めて答えてくれたね、セイシエル』

嬉しそうな声が返ってきて彼は困惑した。

思えば誰からも“セイシエル”と呼ばれなくなって密かに嘆いた時も、声の主とカインは自分が忌み嫌っていた“ホーリア”ではなく“セイシエル”と呼ぶ。

希望を持ってない自分のただ1つの希望だった…もう母もいないのに自分を置き去りにした母を許せなくせに本名だけは大事にしていた。

(母上…)

心の中だけで言う。

母に置き去りにされた以来、決して呼ばなかった。

蔑むように“ソフィア”と呼んでいた。何年か経って自分が二桁の

年齢になった際、今度は“シリウス”が自分のそばに来た。

何故来たのかと罵り、お前の顔など見たくないと叫び、母を返せと迫った日々も懐かしい。

シリウスは何も言わなかった。謝りもせず、言い返したりもせず黙って聞いていた。

それが当時の自分には理解できず“何か言え”と叫んだ。

今なら理解できる。シリウスが黙っていたのは償いだったのではないかと。

「シリウス……」

罵られても泣き叫ばれても恨み言や小言をぶつけても、シリウスは弁解しようとも謝罪しようともしなかった。

ただ、一度だけシリウスが自分に向かって怒ったことがあった。

『カイン、幸せなんだろうな。何も知らないで』

シリウスはいつも親子3人で撮った写真を持ち歩いていた。

その写真を見て、不意に言った。

『なあ、あんたとソフィアが逢い引きして生んだ子供がカインだと知ったらどうなるかな？ソフィアには子供も夫もいたのに』

バンッ！

言い切る前にシリウスに打たれた。強い衝撃を受けても倒れなかったのが幸이었다。

『…セイシエル、カインには…カインには手を出さないでくれ』

頬を押さえる自分に向かってシリウスは言った。
もう、我慢の限界だった。

『黙れ…貴様になにがわかる…！』

ソフィアのせいで…あんな女の息子に生まれたせいで惨めな思いをしたのに…カインに手を出すな？笑わせるな！』

『……………』

『ソフィアは死んだ、貴様を庇って死んだ。

憎しみの対象を失った私は誰を憎めばいい？

カインしかない…あいつさえいなければ、カインさえいなければ良かった！

貴様も、カインも、ソフィアも絶対に許さない……………！』

カインさえいなければ良かった。

何もかも恵まれて育ったカインが嫌いで仕方ない。

一方、自分は努力に努力を重ねながら実力をつけた。

愛されていて、才能にも恵まれていて、親友もいるカインが嫌いだった。

ソフィアとカインに対する憎悪だけが努力の支えだった。

『……………』

憎悪のままに吐き捨てた言葉を聞いていたシリウスの表情はどこか寂しそうだった。

しかし、シリウスの寂しそうな表情に構うことなく自分は早足で部屋を出て行った。燃え上がった怒りを鎮めるため、少し歩いていた。

案外、怒りの対象から離れたらすぐに鎮まるものだ実感した後、来た道を通って部屋に戻った。

『セイシエル』

部屋に戻って、驚いた。

『ラーナ、何でラーナが此処にいる？』

そう、叔母であるラーナがシリウスの部屋に入っていたのだ。それも、険しい顔で此方を見ていたのだから更に驚く。

何の話をしていたのだろうと気になったがシリウスは薄く笑って

『セイシエル、君は此処にいちやいけない。もう少しだけ、な？』

と言った。

その笑みの裏にある何かを知りたいが、知る術もない自分は頷いて飛び出すしかなかった。

かれこれ、一週間も続いたのだ。

一週間経って、臆病だった自分を漸く奮い立たせた。その位、シリウスとラーナが何を話していたのか知りたいと思ったのだ。

自分の事であるのは分かる。ラーナがシリウスの元にわざわざ来て、自分に席をはずさせて話をするのだからそれ以外考えられない。

『シリウス』

いつもならシリウスが此方に話しかける。

（セイシエル、昨日はちゃんと寝たか？）とか（遅くまで勉強に熱心なのは感心するが、もう少し早く寝ないと体を壊してしまうよ）とか、本当の親のように声を掛けるのだ。

その事に戸惑いと母を奪われた怒りとでシリウスをきつく睨みつけるのだが、内心ではシリウスを本当の父親のように慕い始めていた。

『何だい、セイシエル』

まただ。

自分に対して優しく微笑むシリウスを目の前にしたら言えない。言ったらどうなるのだろうか、考え始めたら頭が痛くなる。

『き、聞きたい事が、ある…』

聞きたいと言う思いと、聞いたらいけないのではないかと言う不安とで、歯切れが悪い上に途切れたものになってしまった。シリウスも何かを感じたのだろう。

『セイシエル…』

まただ。

カインに対する憎悪を吐き捨てた時に浮かべたシリウスの寂しそうな顔が今、そこにある。

『……それだけは、許して欲しい。君には何も言えないんだ』

許して欲しい？

何も言えないのに、許して欲しい？

……お前が、お前が。

… お前がそんな事を言うのか、シリウス…！

『何も言えないのに、何も教えてくれはしないのに、許して欲しいとお前は言うのか……？私にも聞く権利はあるだろう？』

ラーナは私の事をお前に話しているのに、お前が私に言わないのはどうしてだ？』

『セイシエル…』

『お前の顔など二度と見たくない！』

『…セイシエル！』

『誰も教えてくれない！私が何をしたのかも！母もラーナもお前も私には何も教えてくれない！突然私を疎ましく思っつて、突然私の目の前から消えて、突然弟が出来た…！身勝手だ、母も父もラーナもお前も！』

せり上がる感情をシリウスに向かって叫んだ後、そのまま飛び出した。

シリウスもラーナも、アルディ家に関わること自体が嫌で体力が続く限り走り続けた。

何時の間にか此処まで走っていたのか。

自分が来ていたのは大聖堂ではなく小さな村だった。

しかし、変わらないのは小さいながら立派な教会があるということ。

“此処は神という架空の存在に頼るしかできない滑稽なところ”

考えてみたら可笑しくて笑った。

自分から動かない癖に不平不満を抱いて頼る様が滑稽で、滑稽だと

思う自分もまた架空の存在に頼ろうとしているのだから笑うしかない。

一方、すれ違う村人は自分の姿を見るなり怯えたり逃げ出したりしていた。

当たり前か、自分は権力者なのだから。

もう、怯えられることにも罵られることにも孤立することにも慣れた。

……伴う痛みにはいつまで経っても慣れてはくれなくて知らず知らず憎悪に泣き叫んでは歪んでいく。

考えまいとしても無理で、どうしても色々と考えながら教会の中に入った。

何となく予想していた。此処は人がいないのではないかと。

答えは予想した通り、誰もいなくて悲しみに暮れるには丁度良い場所だった。

家では吐き出せない悲しみを吐き出すために泣いて、心に渦巻く憎悪を吐き出して泣いた。

こんなに泣いたのは久し振りだ。

いつも切り裂かれる痛みに耐えて、何時しか泣くという行為さえ忘れていた気がする。

枯れた頬に伝う涙に心地よさを覚えはじめ、何時までも泣いていた。

……たの？

『……ん』

誰かに呼ばれた？

慌てて顔を上げようとするも机に伏せて泣きすぎたせい気分が悪かった。

『大丈夫か？』

視界がぼやけて見えないが、心配そうな目で此方を見ているのは…。

『…誰？』

『…大聖堂の酒場で一度だけ会った事があるよ。大人に冷たくされて泣いていた』

『ああ…君か』

そう、目の前にいるのは酒場にいた少年だった。

“自分は冷酷無比な当主の息子である”

アルデイ家に仕える一部に自分は毛嫌いされていた。

前当主の次はシリウスが時期当主だったのに、父が無理矢理奪って当主になったから、当然その息子も気に入らないのだろう。

自分を見てくれる人はいなかった。

母はシリウスと結ばれる筈だったのに、当主によって無理矢理身ごもり生まれたのが自分。

母に疎まれ、置き去りにされ、傷ついた心に拍車を掛けるような使用人や同級の非情な言葉や暴力に耐えきれず逃げ出した。

少年と出会ったのはその時。

(どうしたの?)

苛められたと言ったら慰めてくれた。

“あの子たちの言うことは気にしなくていいんだよ”

自分は頷いた。

それから少年とは酒場で何度も出会って一緒に遊んだが、ある日突然消えてしまった。

その時は悲しくて1日中泣いていた気がする。

『君か：！引っ越していたんだね、知らなかった』

『引っ越した…うん、まあ引っ越したのかな?』

少年は困ったように笑っていた。困っている理由が分からず慌てて謝る。

『もし悪いこと言ってしまったらごめんなさい』

『大丈夫だよ、ちょっと悩んでいたただけだから』

自分の謝罪に対し少年は頭をかきながら笑った。

本当に無邪気に笑うこの少年を羨ましく感じてしまうのは、自分にはこんな無邪気な笑顔を浮かべることなどできるはずがないからだ。

『君はいつも謝ったり考えたり怯えたりしているね』

不意に言葉を発した少年に自分は思考を停止させ、少年を見た。

『君はそんなに怖いのか？孤独が』

『えっ……？』

不意に言い放たれた言葉と問いかけに何と答えたらよいのか分からず戸惑った。

きつと間抜けな顔をしているのだろう。自分を見る少年は可笑しいと言わんばかりの笑顔を浮かべていた。

何故だろう、理解できていない。この笑顔が、とても怖かった。何故恐怖を感じるのか、もう分からない。混乱する自分に少年は手を伸ばした。

『大丈夫さ、君には僕がいるからね』

冷たい手が触れた。

まるで、人間とは思えないほどの冷たい手。

『何者だ…君は』

震える声で問いかけてみたら少年は更に笑った。笑うだけで何も言わなかった。

その後、自分はどくなったのか……。

……ル……セイ……ル……！

「セイシエル！」

「!」

大声で名前を呼ばれ、ハツとした。今まで自分は何を考えていたのか、シリウスと暮らした短い時間や少年との話を思い出していたのだ。

目の前で叫ぶ彼女、ラーナの声さえ聞こえないほど。

「ラーナか、どうした」

慌てて取り繕ってみるが、ラーナは怒っていた。“何度も呼んだのに気付かないとはどういうことだ”と言わんばかりの眼差しで。

「いや、何でもないさ」

しかし答えたくなかった。何もかも忘れたい。シリウスのことも少年のことも忘れたい。

……もう、会えないのだから。

「まあいいわ、お兄ちゃんが呼んでいるから早く来てね。来なかったら私が五月蠅く言われるから」

お兄ちゃん…父上のことか。

「ああ、直ぐに行く」

お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん…。
脳内で何度も反芻する。

ああ、もう一つ忘れたいことがあった。

『お兄ちゃん、拾ってくれてありがとう』

まだ幼かったカインが母に連れられて大聖堂に遊びに来た。
転がったボールを拾って手渡した時のカインの無垢な瞳と声。

（今すぐ忘れたい！忘れさせてくれよ！）

今も昔も変わらない無邪気な瞳と笑顔が貫く。

シリウスと過ごした日々、少年との会話、カインとの出会い。

それは、思い出を持たない自分の唯一の思い出。

第十三節：墜落する小鳥達は唄う（前書き）

支配され、墮ちていく。

一度嵌ったら抜けられないと分かっているのに、身を委ねて墮ちていく。

徐々に大きく響き渡る破滅の歌。その歌は、いつ止まるだろう。

第十三節：墜落する小鳥達は唄う

一方、アルデイ家にいたカインは戸惑っていた。

一つ目はイリアの護衛として正式に採用されたこと。

訓練生として今までは動きやすい服装だったのに、良く言えば華麗、悪く言えば派手すぎる服を身に付けていることに戸惑った。

二つ目は兄のそばに居ること。

今以上に兄の近くに居るといふ現実。

覗いてはいけないものを覗くことができるという歓喜と恐怖。

イリアに対しては守りたい、愛したいという感情がある。兄に対しては救いたい、共有したいという感情がある。

兄に対しては純粋なようで歪んだ感情を抱いている気がする。

もっと憎めばいい。自分だけを見てくれるなら、もっと憎めばいい。

…自分を憎んで、壊れてしまえばいい。

どうして兄に対してそう思うのかは分からないが、イリアとは違う好意を抱いてしまったのかも知れない。

“兄がほしい、兄を返してほしい、兄に会いたい、兄と一緒にいたい”

どれも叶わぬ願いなら、自分を憎んで、憎しみのあまり壊れてしまえばいい。

壊れたあなたを助けるから。

なんと便利な口実だろう。

そして自覚する。自分は兄を欲するあまり壊れてしまったのだと。

『セイシエル、イリア様のそばにいる俺は憎いかな？

憎いならそれでいいよ』

兄には流れているだろうか。自分と同じ狂気が流れているだろうか。流れていたなら、いいのに。

でも彼は純粹だとカインは思った。

「カイン、いるの？入ってもいい？」

コンコンとノックが聞こえてきて、問いかける声がして我に返る。

「イリア様…！？え、ええ、どうぞ」

イリアと会うのは何となく気が引けたが、入ることに断る理由もなく、彼女を部屋に招き入れた。

「ごめんなさいね、休憩中だったかしら？」

中に入るなり彼女はこう言った。

…ああ、そうか。

彼女は自分がこの時間帯は訓練に励んでいると思っていたのだなとカインは知る。

「いえ、違うのです。セイシエル様からお聞きにはなりませんでしたか？」

「いいえ。それにお兄様はシャルル君と一緒に行動しているから、お話を聞く機会がなくて……」

……なんだと？

カインは呆然とした。自分が護衛になったことを彼女が知らないという事実など最早どうでも良かった。

シャルルがセイシエルの下についた。これはカインにとって大きな衝撃だった。

(シャルルはセイシエル様を使ってアルデイ家に復讐しようとしている)

アクロイドはアルデイ家によって抹殺されたのだ。シャルルはセイシエルを介して復讐を行おうとしている。

(でも、セイシエル様なら見抜ける筈なのに)

どうして容易く懐を許したのだろう。

カインは悔しかった。セイシエルには近寄ることもできないのに、シャルルはいとも簡単にセイシエルに近寄ったことが。

「カイン、顔色が悪いわ……大丈夫ですか？」

イリアが心配そうに見つめており、はっとしたカインは咄嗟に作った笑顔で頷いた。

「何かあったら遠慮なく言ってね。あと、無理はなさないでね」

「……………！…何でもないですよ、イリア様。申し訳ありません」

カインはまたしても謝罪した。彼はとても生真面目なのだろう、ただ自分は何もカインに言っていないから気にしなくても構わないのに。

イリアはそんな彼を見て苦笑しつつ

「いいのよ、気にしないで。それよりお茶にしませんか？」

と言ってカインを誘ってみる。

「そ、そんなこと……………それにお……………私はイリア様をお守りするといふ任務がありますし……………」

やはり彼は生真面目だった。何でも真面目に応えるカインに益々想いが募っていくのが、イリアには分かった。

「じゃあこれも任務ね。少なくとも童話ではお姫様のお誘いを拒否した召使いは見たことないわよ。だから、カインも私と一緒に……………ね？」

童話……………久しく聞かない単語を彼女から聞いたカインは笑いながら言った。

「喜んで、お姫様？」

「まあ、カインったら。本当にやってくれるなんて思いもしなかったわ」

「お姫様の御要望ですから」

カインは笑い、それにつられてイリアも笑う。

仲睦まじく寄り添い、笑い合う2人。許されないことは知りながら止められない。

互いの欠けたものを埋め合うように、2人は急激に近づく。

シャルたちがいた村から離れた場所でラルクとシャルはひたすら歩いていった。

2人はひたすら沈黙し、道を歩いていったが、目的地が見えてきた。そこで初めてシャルはラルクに対する疑問を口にした。

「ラルク、君は」

「なんだい？」

ラルクはにっこりと笑ってシャルを見つめた。

ふわりと柔らかな笑顔にホツとしたシャルは胸を撫で下ろして聞いた。

「ラルクは他の人とは違う。君に会うとき、いつも感じていた。

レディンからも感じるものがあるけど、君からはもっと強い何かを感じる。

上手く言葉に出来ないけれど、レディンやラルクを見ると苦しくなる」

.....

途端にラルクは微動だにしなくなった。

聞いてはいけなかったとも思い、聞かなければ良かったとも思い、思考がぐるぐる回る。

シャルルが肩を落とす、俯いているのを見たラルクは口を開いた。

「宮仕えは辛いものさ、シャルル」

「…アルデイ家に仕えるのがいやなの？ラルクも…レディンは嫌がつていただけ」

「ああ、毎日上の人間の顔を窺わなければならない…幼い頃からそれを叩き込まれる。

まだまだ遊びたい盛りの頃から『服従』することを叩き込まれ、嫌になるときもある。

少なくともレディシア君は辛いと思うよ……」

ラルクは目を細め、どこか遠くを見つめていた。

彼の話聞いて、幹部たちの事など何も知らなかったと振り返って自分が如何に滑稽で無力なのかを思い知る。

「俺、レディンを利用してた…何も知らなかった……」

シャルルは罪悪感からポツリと呟いた。そばで聞いていたラルクはにっこりと笑い

「君が謝る必要はない。君が愛していた人を失った。アルデイ家が奪ったんだ、アルデイ家を憎むなど言う方がどうにかしている」

と言った。

母以外は誰にも認めてくれなかった感情をラルクは認めてくれた。

まだ、やり直せるのだろうか。ホーリアに勝負を挑み、引き返せないと思っていたけれど、やり直せるのだろうか。

「戻れるかな、俺は引き返せるのかな」

シャルルの問い掛けにラルクは首を大きく縦に振って頷いた。

「いくらでもやり直せるよ、シャルル。君はまだ若いのだから」

ラルクの手温かさを感じながらシャルルは薄らと微笑んだ。この手の温かさがとてもいとおしくて心に染み込んでいくようで、これはどういふものなのだろう。

湧き上がるこの温かい感情を何と呼ぶのだろう。

「ラルク…俺は変われるよね」

「ああ、君は変わるよ」

シャルルが泣きやむまでラルクは微笑みながらシャルルの肩を抱いた。

ラルクの肩に抱かれながらシャルルは思った。

この手の温もりを忘れないように、ラルクの涙を忘れないように、何よりレディシアの優しさを忘れないように。

「じゃあ、行こうか」

ラルクはシャルルの前に立ち、ハロルドのところへ向かった。

一方、アルデイ家より離れた場所、アエタイト。レンガ造りの建物が連なり、アルデイ家の権力者達が集う大聖堂とは違って小規模ながらも多数の人が露店を開いている。そこから少し離れ、煙が立っている家の前で男が立っていた。

「……………ラルク君は大丈夫だろうか」

そう、ラルクが言っていたハロルドである。

元々は大聖堂にいたが、ラルクの勧めでアエタイトに戻って来たのだ。

「ラルク君ならシャルル君を此処まで連れてきてくれるとは思いますが、彼まで狙われたら……………」

ハロルドが心配するのも無理はない。

自分やシャルルに協力してくれているが彼もアルデイ家の幹部見習いだ。

何よりラルクや彼に関わる者達に目をつけられたらと思うと気が気でない。

アクロイドもアルデイ家の方針に逆らってあんなだったのだから。例え子供であろうと容赦はしないだろう。

様々なことが頭に浮かび、ハロルドは落ち着かなかった。ラルク達を待つのも限界だったが、今ここで動くと自分だけでなくラルク達も危なくなるのは明白だった。

「どついたらいいのだろう……………」

彼らを迎えに行くべきか、今ここで待つべきかと考えたら後者の方

が良いのは誰でもわかる。

それにシャルルのいる村からアタイトに来るまではかなりの時間を要する。

焦りすぎだとハロルドは自分自身を戒め、ラルク達を待つことにした。

ハロルドが彼らを待ちかねている頃、ラルクとシャルルは必死に歩いていた。

「馬車が走っていないのは致命的だった」

ラルクはそう言って肩を落とすが、アルデイ家から身を隠していたのだから馬車など走っているわけがない。

「前までは走っていたけど今は走っていないんだ。それに、馬車を走らせたら自分達の居場所をアルデイ家に教えてしまうから」

「まあ、それもそうか。そう考えたら疲れるけどアタイトまで歩くのが正解だな」

そう、アクロイドが死ぬ前までは走っていたのだが、彼の死を聞いた後は此処までの馬車を走らせなくしたのだ。不便ではあるが仕方ないと諦め、アタイトまで歩くことになった。

早く行かなければと思いついて黙って歩こうともしたが、やはりラルクの性には合わなかった。

それに、どうしても聞きたいことがあったからだ。

「シャルル、少し聞きたいことがあるけどいいかな」

「うん、なあに？」

シャルルは頷いて続きを言うようラルクに促した。

「カインってやつ、村にいるよな？」

何故その質問をするのかとシャルルは疑問になった。

カインとラルクは同い年であり、アルディ家の幹部実習や武道訓練も一緒に受けているだから、カインの事情はある程度把握しているはずだ。

「うん、村に住んでいていたよ。今はアルディ家のほうにいて帰って来る機会もなくなっただけど」

「……そつか。いや、あいつ……なんか最近様子が可笑しいからなあ……いや、悪かった。ごめんな」

そう言っただけラルクは急に黙って歩き始めた。

いきなりカインのことを聞かれ、知らないと言ったら歯切れの悪そうな返事をしたラルクにシャルルはまたしても疑問を覚える。

彼は俺達を送るために此処に来たのではない、他に理由があるはずだと思った。

もしかして、彼が此処にやって来たのはカインのことなのかも知れない。

考え始めたら何が何だか分からなくなってちらりとラルクの顔を見てみた。

(険しい)

いつでも陽気で笑顔の耐えない彼からは考えられないぐらい真剣で

険しい顔だった。

カイン……。シャルルは声にならない声でぼつりと呟き、無言で歩くラルクの後を追った。

アエタイトまではまだまだ遠く、酷く疲れた。

聖堂に行った時には感じられなかった疲れが体を襲う。

いつからこんな風に疲れを感じるようになったのか。

この疲れの源は何なのか。

アルデイ家に関わらなければ良かったのに。

アクロイドが関わらなければ、きっと幸せになれたのに。

シャルルは眉間に皺を寄せ、歩き始めた。

「ぶつ……」

溜め息をつくのはイリアだった。

溜め息をつく原因は唯一つ、カインはいつもよそよそしい。

理由は何となく分かるが、はつきりはしていない。しかし、セイシエルが関わっていることだけは明白である。

それとも衝動的にカインにキスしたことを気にしているのだろうか。衝動的に行動を起こすのは悪い癖だとよく言われたものだ。

本当に自分はアルデイ家の血が流れているのだろうか。あの行動はお金持ちのお嬢様がする行動ではない。

どちらかと言うと下品で軽蔑される行動である。

カインを見ていたら得体の知れない感情がどんどん膨らんで、爆発してしまった。

「……お兄様に聞いてみようかしら」

カインのことが知りたい。彼の全てが知りたくて堪らない。ぶつぶつとわき上がる感情は止まることを知らない。それを止める術も分からず、落ち着かない様子で彼を待つこと数分。

「あ、イリア様」

カインが戻って来たのを知り、物凄い勢いで立ち上がってしまった。イリアは恥ずかしくなり、座り直した。

「あ、カイン…あの」

「どうかしましたか？イリア様、セイシェル様がお呼びのようですから、晩食が終わりましたら直ぐに……」

どうやらカインは気にしていない様子。少なくとも感情を表に出さないよう振る舞えるらしい。

自分よりも年下なのに大人っぽいことを知り、イリアはがっくりとしてしまった。

不思議というべきか、見えない何かがあるから引き付けられるのか、カインには惹かれるものがある。自分も引き付けられてしまったのかも知れない。

「……イリア様？」

すっかり黙り込んでしまったイリアを見たカインは心配そうな目で見ていた。

「あ、ごめんなさい。ぼーっとしてしまっていて。呼びましたか？」

「い、いえ……落ち込んでいらした様子ですので……」

カインは薄く笑いながら再び部屋の掃除に戻った。

(……嬉しい)

イリアは素直にそう思った。嬉しいと感じた。相手をいちいち意識してしまつて、離れない。

これが、恋なのか。

恋……それはとても綺麗で美しく、とても恐ろしい。

第十四節：闇を纏う青年（前書き）

力になりたいのに、なれなくて。

泣いて、泣いて、啼いて、崩れ落ちた。

支離滅裂になった思考に新たな悲しみを覚えさせられ、ついに泣き崩れて壊れた。

光に住む僕と、闇に住むあなたの心が一つに重なり、創られた世界は歪む。

第十四節：闇を纏う青年

兄に呼ばれたということを知り、イリアは急いで向かう。あまり言いたくないが兄が可笑しいと彼女は思っていた。

普段から何も話さないが、最近は更に口数が少なくなっている。それだけならまだいつも通りなのだが、違うのは表情に影があること。何時からだろう、彼の顔に影が見え始めたのは。

(……もしかして、カインのことかしら)

長い間アルデイ家を離れていたイリアだが、事情位は知っている。勿論、カインが自分の弟であることも知っている。

知っているが、家族として全く時を刻んでいない彼女からしたらカインが弟であることなど理解出来るはずもない。

世間的にはまずいが、退くつもりなど全くない。それにカインと自分は今全く似ていない。しかし、兄とカインの共通点を見つけられるわけでもない。

いつだってそう、兄と会うときは様々なことを考えてしまい、彼のいる部屋まではあつという間だった。

本家は2つあり、兄は2つ目の中にある最も離れた部屋にいた。

今までの部屋とは違い、深い茶色の重苦しい扉を目の前にしたイリアは思わず腰を引いてしまった。

今までこんなことはなかった。戸惑いはあつたけれど、恐怖を感じることはなかった。

(お兄様は何を考えていらっしやるのかしら……)

そう言えば兄のことがよく分からないとイリアは思った。何を考え

ているのかも、自分のことをどう思っているのかも。一番気になるのは同級生から暴力を受けていたカインを見ていた時の顔。安堵とは違う何かを感じたのは事実。あれは、一体何なのだろう。

自分は様々な感情に日々振り回される気がする。

今更ではあるが、アルデイ家に来た途端に様々な感情に振り回され、疲れ果てていた。

あの少年……シャルルは振り回されてはいないだろうか？

不意に、初めて彼を見た時の事を思い出した。

年相応の子供らしい顔立ちではあったが、時々此方が驚くほど無表情になる。

いや、正しく表現したら人形のような表情だった。兄と同じ、人形のような表情をして何処かを見ていた。

何処かという表現も正しくないかも知れない。

彼の瞳に、光などないのだから。

「……お兄様、入ってもいい？」

意を決して扉越しから声をかける。

「……ああ」

直ぐに兄から返事が返って来た。イリアはノブを回して扉を開き、中に入った。

「……お兄様、お話とは？」

そう言いながらもイリアは兄が何を言おうとしているのかわかってしまった。そして、恐れおののいた。

(怒りを露わにしている)

どうしてだろう。

何故彼が怒りを露わにしているのか、そこだけは全くわからなかった。

一方その頃、漸く険しい道を越え、アエタイトに続く街道を歩くラルクとシャルル。

ラルクは相変わらず黙っていたままで、何か彼の気に障ってしまったのではないかとシャルルは不安になる。

「……ホーリア様が……」

不意にラルクはぼつりと眩き、シャルルは目を見開いた。

そして彼は気付いた。シャルルがとても不安そうな表情で此方を見ていることに。

「シャルル、ごめんな。ずっと考え事をしていたから……」

「そっか……ホーリアがどうかしたの？」

「……シャルル、カインの事は知っているだろう」

「うん」

シャルルが頷いたのを見たラルクの表情は相変わらず重苦しい。

その理由が何であるかはラルクのこの後の言葉ではつきりとする。

「ホーリア様が、カインの兄であることは知っているかな」

……知らなかったと言つのが本当のところである。しかし、そこでシャルルは思い出した。

(……人気のない刑場の跡地に向かう時だったような……ホーリアとすれ違つた時)

そう、家に戻る自分とレディシアは反対方向に歩くホーリアを見た。もしかしたら、あの時ホーリアはカイン達のところに行ったのだろうか。

「……知らなかった……」

シャルルはぽつりと呟いた。勿論、カインの兄がホーリアであることを知らなかったと言つ意味での呟き。

もう一つはホーリアが虚ろな目をしながら歩いていた理由。シャルルが考える間もラルクは話を進める。

「カイン……実際にアルデイ家に来たのはホーリア様に会う為じゃないのかな。でも人はカインを近付けようとしなないだろう。何故なら彼は『死の子供』だからね」

「死の子供？」

シャルルは理解できなくてラルクに問いかけた。

それが、ホーリアの虚ろさを象徴させるものなのだろうか。きっとそれだけではない、あくまでもそれはきつかけに過ぎない。

彼の心を破壊した原因があるはずなのだ。そう、直接破壊した原因が。

「……彼は、ディアルト様の実の子供で、ソフィア様が母親なのだ

けど……彼は生まれるべき子供ではなかった。本来生まれるべきではない子供が生まれたら、光がなくなるって言われているから」

……ラルクの言っている意味が分からない。

シャルルは理解できないと思うと同時に怒りがこみ上げてきた。

もしかしたら、ホーリアも理解できていないのに、絶えず疎まれ続けたのだろうか。

(許せない)

「……アルデイ家の血を引く子供がたくさんいたらアルデイ家の秩序が乱れるらしい。

権力を巡って争うことを恐れているからな……なのにディアルト様は……」

そんな大事なことを何故教えてくれるのだろう。ラルクは流暢に話すが、本来これは秘密ではないか。

シャルルの不安を察したラルクはにっこり笑って言った。

「秘密でも何でもないさ。みんな知ってる、ディアルト様が自分の血を引く子供を当主にして更に権力を手に入れようと画策していることはね」

……本当に？

本当に、そうなのだろうか。

ラルクは、自分の身を犠牲にして教えてくれているのではないか。彼が直接知るのには難しいだろう。彼の後ろに誰がいると考えるより外はない。恐らくハロルドなのだろうか。

自惚れかも知れないがハロルドとラルクは自分を犠牲にして協力してくれているのだと思った。

自惚れなら良い、いや、自惚れであることを願わずにはいられない。もしも自分に協力したとディアルト達に知られたら末路はアクロイドと同じだ。

「ホーリア様はカインを追い詰めるだろう。恐らくイリア様も同時に……。ディアルト様はホーリア様の怒りを利用して決まってる。

だから、ハロルドさんに協力してもらってある方を保護した」

早歩きで進むラルクだったがぴたりと止まり、シャルルに向かって言った。

「シャルル、君は全てを知る義務がある。アクロイド様は全てを知ろうとして逝ってしまった。

君は、アクロイド様の意志を継いで全てを知るべきだよ」

そして、ラルクはシャルルだけに聞こえる程の小さな声で言う。

(例え、残酷な結末が待ち受けていようとも、君は逃げられない)

アルディ家の事情、ラルクの言葉、そんなものは先程の言葉で全て流れた。

(……………やっぱり)

逃げ場など、どこにも存在しないのだ。アルディ家はアクロイドの息子であるシャルルをどこまでも追いかけるだろう。

例え、父に無関心であっても、絶対的な権力を手に入れる為には邪魔な存在は全て排除しなければならない。

「でも、君は大丈夫だよ。逃げられないけれど、捨てることはできるから」

にこりと笑いながら残酷な結末と救いを与えるラルクは味方なのか。彼の言葉全てがシャルルの行く道を表しているようではなかった。

(ラルク、レディシア、ホーリア……みんな、みんな……)

ふと、顔を上げてラルクを見つめていたが、自分は選択を迫られている。分かつている。

逃げるということは自分が守るべきものを全てを捨てる事であり、ホーリアに挑むということは自分を投げ捨てることである。

(どちらも無い道はないの?)

初めて、アクロイドの息子として生まれたことを悔やんだ。そして、改めて自分が無知で無謀で、無力であるかを思い知らされた。

一方、シャルルの隣を歩くラルクは曖昧な答えしか与えられない自分に嫌悪していた。

アクロイドの死に隠された真相を探ることから引いてほしいと思う一方で、どんなことがあっても引かないで真相を突き止めてほしいと思う。

アルデイ家に関わらなければ自分もシャルルも、カインもアクロイドも、誰もかも苦しみを抱える事はなかったのに。

大人だったら、自由に変えられたかも知れないのに。

ラルクは自分が子供であることを悔しく思った。何よりシャルルを守れないことが堪らなく悔しかった。

（もう考えたらだめだ。ハロルド様に会ってから、シャルルが決めるべきだ）

ラルクは今までの思考を振り払うように首を横に振る。全てはハロルドが教えてくれるのだ。

アクロイドが何故アルディ家の幹部になったかも、何故自殺したのかも、イザベラのことシャルルのことも何もかも。

自分の役目はシャルルの不安を煽ることではなく、彼をアエタイトまで連れて行くことだ。

ラルクは自分自身を叱咤した。いちいち考えてしまうのは自分の悪い癖だと苦笑し、不安そうについて来るシャルルを見ながら言った。

「俺、おかしいよな？」

「……いいや」

一瞬間を置いてシャルルは一言だけで答えを返した後、言った。

「いつもお喋りばかりしてはしゃぎすぎなラルクのイメージしかなかったから驚いているけどね」

「あ、そうか…あははは、いつもそうとはいかないさ……」

ラルクは力なく笑って返した後、シャルルの手を引いて言う。

「早く歩かないとアエタイトまで辿り着かないね。君と話すのは色んな意味で楽しいけど」

シャルルはにこりと笑って言い返す。

「うん、俺もラルクと話していると楽しくて……最初は疑ってごめんね、ラルク」

やはりかと、ラルクは苦笑しながら肩を落とす。

普通はそうだろう。例え、幹部の息子で何も知らなくともアルディ家とは繋がっている。

「疑うのは当たり前さ、君が気にすることはない。さあもう少し歩こうか、アエタイトまでもう少しだよ」

先ほどと同じように、力なく笑ったラルクにシャルは不安になった。

ラルクの元気な笑顔が密かにシャルの心にあっただのに、今の力ない笑顔がとても気になった。

一方、ぼんやりと天井を眺めるのはレディシアである。

シャルは何処かへ行ってしまい、隙を持って余っていた。

故郷で過ごす時間はあっという間に過ぎ、アルディ家に戻って堅苦しい勉強をする日々……とても詰まらない、疲れてしまう。

「シャルはずっと別行動だよな……ラルクさんと何処かへ行ってしまったし……僕はどうしたらいいんだろう」

そんなことを呟いては溜め息ばかりついている。故郷に戻ってラルクとシャルが出て行って以来戻っていない。その後直ぐに両親が用意してくれた馬車に揺られながら戻っていた。

「もっと休みたいけどやらなきゃな……」

ゆっくりと起き上がって厚本を開き始める。
そこにはアルデイ家の慣習やら理念やら規律やらがびっちり詰ま
ったものが沢山あった。

「……こんなの、どうやって理解したらいいの」

一時は勉強しようと思ったが、結局厚本を読むのをやめて寝転がっ
た。

シャルルは今頃どうしているだろう、ホーリアの側に近付いて以来
シャルルとは余り話していない。

ホーリアとはどうなっているのか、ラルクとはどうなっているのか、
イザベラ達は元気になっているだろうか。
考え出したら止まらなくなる。

「気分転換でもしてこようかな」

レディシアはそう呟いて立ち上がり、外に出た。幹部候補生は比較
的自由に出歩いても良いとされている。

勿論制限はあるが、召使や兵士達に比べたらずっと少ない。レディ
シアは中庭にでも行こうと決め、廊下を歩いた。

華やかな装飾に白く大きい扉が幾つも存在し、部屋の中央に螺旋階
段がある。

そこを降りたら中庭である。

大聖堂と言うより最早宮殿に近い。昔は全て神を奉るところだった
から大聖堂と呼ばれるだけで、今は中心でもある。

出入り口である扉を押すと、これまた広大な中庭がある。

相変わらず広大な場所で頭が痛くなりそうだ。中庭に行く人が多く
て迷うことが少なかったが、途中入り口は此処だろうかと思ったこ
とも何度あるだろう…数えたらきりが無い。

「座ろうか」

中庭に思い切って突撃し、草村にペタリと座る。噴水や銅像……どこかの絵画に描かれるような庭が目の前に広がる。そこでまた1つ、ため息を零しながらぼんやりとする。

(シャルル、会いたいよ。君に会って、自由になりたいよ。今、とても泣きそうなんだ)

そんなことを思いながら空を見上げた。空を見ると活発で頭が良くて自由なシャルルに無性に会いたくなり、彼のハキハキとした声が恋しくなる。

自分には決して出来ない。

自由に動くことも考えることも積極的に動くことも出来ない。だからシャルルに会いたい、会いたくて堪らない。

レイシアにとってシャルルは憧れであり、遅しくも優しいヒーローだった。

でも今は会えないから、悲しい。

また1つため息をついて、ふと後ろを見る。

(……あれは?)

後ろを向いて、レイシアはハツとした。

金髪の少女に茶髪の青年……イリアとホーリアだ。

(ホーリア様にイリア様、一体何故?)

此処は彼らの場所なのだから気になることでもないが、気になった。理由はいつもホーリアは1人で行動しているからだろう。イリアは

カインと行動しているところをよく見ていたが、ホーリアとイリアが行動しているところは全くと言って良いほど見たことがない。そして、彼等が此方に向かって歩いてくる。

(……ホーリア様の事を知ったら、シャルルに何か言えるかも知れない……)

レディシアはそつと動き、見つからないところに隠れた。他の少年達に紛れたら良かったのだろうが、今日は勉強のため誰もいなかった。

身を屈め、耳をすませた。すると間もなく、ホーリアの声がこちらに聞こえてきた。

「イリア、話というのは他でもない。お前もわかっているだろうが、カインのことだ」

「……わかっているわ、カインと私は姉弟だから結ばれたらいけないということでしょう?」

「……道德心に基づいて言えばそうだが……母もシリウスもライナも同じようなことをしているからどうでもいい……今回は別のことだ」

「……何かしら」

イリアはパツと顔をあげ、ホーリアの言葉を待った。

(……カイン側につくなら、お前もカインと共に葬り去ってやるう……私にとってカインは邪魔だ、目障りだ。忘れるな……あまり、度が過ぎないようにな)

「…………お兄様」

イリアは顔を覆いながら帰って行った。ホーリアが何を言ったのか、イリアは何故顔を覆って泣いたのか、全く分からない。レディシアは少し安堵し、肩を下ろしたが、ホーリアは早足でレディシアの方まで歩き、肩に触れた。

「…………盗み聞きとは悪趣味だな、レディシア・キース」

その様子では最初から知っていたようだ…………レディシアは自分が如何に愚かであることを知る。

ホーリアを欺くことなど出来ないのは知っていたのに、どうしてこんなことをしてしまったのだろう。

なにをされるのだろう…………もしかしたら。しかしホーリアは手を放した。

(えっ…………)

大事な話を聞き出そうとしたのにとレディシアは思った。

しかしホーリアはまるで興味が無さそうな様子で、とくに咎めることもしない。だから不可解で恐怖心が増していく。

彼は何を考えているのか、頭が混乱する。分からなくて顔をしかめていたら通り過ぎようとしたホーリアが振り返って言う。

「レディシア、シャルルを守ってやれ…………闇に吞まれる前に」

第十五節：悪魔の覚醒（前書き）

いい子にしないと喰われるよ、僕の言うこと守っていい子でいてね

言うこと聞かない悪い子は、罰を与えて躰しなくちゃいけないな

躰をしても聞かぬなら、この子は僕の子どもじゃない

僕の子どもじゃないのなら、僕を欺く悪い子だ

人を欺く悪い子は、僕が倒してあげなくちゃ

ああ悲しき哀れな兄弟よ

僕を欺いた罰により

君たち2人は朽ち果てるその時まで

あらゆる痛みに耐えなくちゃ

それが僕が君たちに下す罰なのさ

第十五節：悪魔の覚醒

自分の心は壊れた。

ただ、虚しくて、苦しくて、悲しくて。

壊れた心と身体の行き先は分からぬ。

鳴くことさえ忘れた鳥が静かに流した涙を受け止める術もない。

この子ならシャルを救える。

ホーリアはそう思った。この子の瞳は嘘をつかない、嘘を許さないものだと感じていた。

闇に吞まれそうなシャルを、この子ならきつと救える。まだ幼いから分からないだろうが。

「早く戻れ」

「……ホーリア、様？」

「責任は取れぬ、早く戻れ」

ホーリアの声さえ聞こえず、レディシアはぼんやりとしていた。

嘲笑うような、悲しんでいるような、喜怒哀楽全てが表情に現れているホーリアの笑みに、胸をかきむしりたくなるような痛みを覚えた。

(こんな笑顔、怖いよ)

恐怖だけではない何かで動きがとまる。この笑顔は一体何だろう、泣いてしまいたくなる。

「今の君の立場を考えると。両親に叱られたくないだろう？早く戻れ」
ホーリアは何故そんなことを言うのだろう。レディシアにはよく分からなかったが、彼の笑顔が怖いということだけはわかった。

「……あ、あの……」

「……何だ」

呼び止められたホーリアは眉間に皺を寄せて立ち止まる。
彼の態度に圧倒されたレディシアは、やはり何も言えなかった。

「……いえ、ありがとうございます」

ホーリアは黙って去っていく。その後ろ姿が、とても寂しいとレディシアは感じた。

そして何より気になるのは、彼が何故シャルルを守って欲しいと言ったのか。

シャルルより何もかも劣っていて、足手纏いでもある。そんな自分がシャルルを守る事など出来るはずがない。

（僕には無理だ）

レディシアは呆然としたまま動かなかった。ただ、彼の脳裏にはホーリアが寂しそうに笑う姿と、妹のイリアと2人で歩く姿が刻まれた。

(ホーリア……セイシエル)

果たして彼は敵か、味方か。

レディシアはある決意をした。きっとシャルルの顔は青ざめるに決まっている。

でも、止まらない。

(行くしかない)

レディシアはゴクリと息を飲んだ。そして決意したように立ち上がり、急いで部屋に戻るため歩いた。

まずは勉強をしなければいけない。もう直ぐ両親も戻り、どこまで読み進めて覚えているか確認してくるだろう。

(シャルル……)

レディシアも自分の居るべき場所に戻った。決意を胸に、今は自分の果たすべき事をするために。

長き道を歩いたラルクとシャルル。時には険しい道にうんざりしたこともあったが、歩き続けた。

最初にアベルの提案を無視したことがいけなかったとラルクは思ったが、後悔しても後の祭りである。

道中は他愛もない話で盛り上がったたり、シャルルが語る父親の自慢話を聞いたり、本家内にいる女子のことを話し合っって笑い合ったりもした。

つい先程までシャルルはラルクの事を疑っていたのに、今では前からお互い親友ではないかと思うほどにまで距離は近くなった。

「ラルクは家族とか、いないのか？」

話をしているうちにシャルルはラルクの家族に興味を持った。明るく面白いが、意外と彼は自分を明かそうとしない。

知りたい。シャルルは心からそう思ったが、ラルクは苦笑しながら

「そうだなあ、話すとき長いからまた今度にしよう。さて、もう直ぐアエタイトだよ」

と言つて指を指す。

確かに街並みが見える…此処まで歩くのに何時間掛かっただろうと考えたが、意外にもそんなに時間が立つていない事が分かる。

あの村からアエタイトまでかなりの距離はあるものの歩き慣れている為か、予想していたほど時間はかからない。

「そうだね。ハロルドさんも待つているだろうから」

シャルルは前を見て歩き始めた。

きっとハロルドはラルク達が来るのを待ち切れない様子でいると思つと申し訳なくなる。それに最近のアルデイ家が不穏な空気に包まれていた。シャルルが住むよ小さな村には馬車も走らなくなり、港町の船も乗船券が必要である。券自体は購入も可能だが前の2倍近くのお金が掛かる。したがってシャルル達では購入する事も不可能である。

(ジャンはどうしているだろう……)

広大な海を隔てた大陸の向こうにある、ライハード家の地にあるヘレナの村に住む少年が心配になる。

あの村にはあまり行かないが、父や母はヘレナの事を沢山話してい

たのを思い出す。緑が豊かで静かな村だという。いつか、あの場所に行く事が出来るだろうか。愛する母と父、親友のレディシアと共に、憧れたあの場所に。

ラルクとアエタイトを目指すシャルルの脳裏に、幸せだった思い出が過った。

シャルル達の目指すアエタイトではハロルドが暗い顔で座っていた。毎回訪ねて来るアルディ家の使徒の対応である。前は頻度が少なくなっただが今では毎日此方に訪問する。

聞かれる事は揃ってカインの状況だ。最近、カインはイリアと親密な仲になっている。この状態は非常にまずく当主の思惑通りである。

(このままではカインもイリアも消される。その次はホーリア様だ……あの2人が消えたらホーリア様も邪魔でしかないからな。当主は彼も必ず抹殺する。そうに決まっている)

シリウスとソフィアの間生まれた子供の存在は当主にとっては邪魔でしかない。きつと幼かったホーリアに「母は自分達を捨てて他の男と駆け落ちした」とでも吹聴したに違いない。

ホーリアの近くにいて尚且つ彼を説得できるだろうシャルルに、どうしても彼を説得して貰いたいと思っている。

不思議だがシャルルならホーリアを説得できるという確信がハロルドにはある。

(おや、いらっしやっただようだな)

足音がしたと同時にハロルドは思考を停止し、偵察する使徒に話かける。

「どうでしょう？怪しいものなど私の家には御座いません。これだけ探し回っても疑いがなければ解放して下さいませんか？」

「可笑しなことを言う、貴殿はシャルルだけでなくライハード家の連中とも関係がある。それにアクロイド殿とも親しい関係にあった……疑いの目を向けるのは当然です。当主様は貴殿を警戒していらつしやる」

「アクロイド殿が亡くなってからは私はシャルル様とは滅多に会う事もない。ブルネーゼ一家の事ですか？ましてやライハード家の村に行く事も出来ないと言つにジャンに会う事など出来る筈もありません」

ハロルドは事実を伝えるが使徒は相変わらず不審そうに見ている。シャルルやアクロイドと近い関係にあり、ライハード家の領地に住むブルネーゼ一家と親しい関係にあるのだ、疑つて当然である。勿論ハロルドもアルデイ家に疑いの目を向けられるのは承知の上だが、此処まであからさまに調べられるのは我慢ならない。

これでは自分が反逆者であることと決めつけられているようなものだ。

「まあそんな嘘をよくもまあ言えたものですな。ハロルド殿、笑つていられるのも今のうちです……そのうちどうなつても知りませんからね」

使徒は嘲笑うようにハロルドに言い放つと足音を立てて出て行った直後、バタンと大きな音がした。使徒が苛立ちに任せて扉を閉めた

のだと把握する。

「……死刑宣告でもされたようだな……どうせ私も長くない。シャルに全てを伝えて、後はカイン様とイリア様をお助けしなければならぬ。だからジャン……許しておくれ」

天井を見上げ、彼はそう呟いた。そして周りを見回すと先程の使徒が部屋を散らかした為、無残な姿になっていた。

「片づけるか……」

ハロルドは重い腰を上げ、部屋の片づけに取り掛かる。

アクロイドと作成した論文や医学書、趣味で集めている本や服まで散らばっている。

そこまで疑われなければならない理由などある筈がないのに。考える限り当主は焦っているのだろう。

シリウスとソフィアは抹殺したが、まだフレアとレイが見つからない上にカインとイリアが親密な関係にある。

イリアがカインを恋い慕っているのを利用して始末するつもりだろう。血の繋がった姉弟の恋など許される筈がない。

それにイリアは駄目だと言っても聞かないだろう。

何故なら彼女はカインを弟と言う存在で過ごした事がない。カインも同様だ。姉弟と理解はしていても意識出来ないのだろう。

「ラルク達には早く来て貰わなければ」

1人呟いてハロルドは上を見上げ、また物思いに耽る。

自分はアルデイ家に狙われている。

しかしまだ彼等は自分を消すことはしないはずだ、まだ使い勝手のよい道具だから。

それに自分はまだカインとイリアを守る義務がある。フレアが動き出来ない以上、2人は守らなければならぬ。

誰もいないこの空間で、ハロルドの思いつめた表情と溜め息の音だけが響いていた。

ホーリアにはつきりと言われ、泣きながら自室に戻ったイリアだが、どうしたら良いのか分からなかった。

何故カインを恨むのか、目障りだと思っているのか、イリアには全く分からなかった。

彼女からしてみればホーリアがカインを目障りだと思っている素振りすらなかった。

カインを助けたホーリアが何故？

イリアの脳裏には疑問しかなかった。

「……イリア様？」

扉越しからカインの声がした。いつものように彼は様子を見に来たのだろう。

「……カイン？」

イリアは上擦った声で答えた。その声に異変を感じたカインは扉を開き、部屋の中に入る。

「イリア様？」

中に入った途端にカインは驚き、固まってしまった。

(泣いている……)

一体何があったのだろう。何故、彼女は泣いているのだろう。

カインは黙ってイリアの傍に寄る。

落ち着いたらきつと何があったのか話してくれるだろうから、それまで待とうと思った。

「カイン……！」

落ち着くどころか益々泣き出したイリアは縋るようにカインに身を預ける。

いけないと分かっているけど、彼女の腕を振り払うことも拒絶することもカインには出来なかった。

そろり、そろりと。

恐る恐る腕を伸ばした。

華奢な身体を引き寄せて、抱き締めた。泣いている彼女を見ていられなくて、何かに動かされるように彼女を。

(ああ、貴女に出会いたくなかった。許されるはずはないけれど、今だけは)

一目見た時から彼女を愛してしまったと自覚していた。

優しく笑う彼女を、黙って傍に居てくれる彼女にいつの間にか惹かれ、愛してしまったのだ。

(貴女が姉だと知っているのに、姉と思えない愚かな弟を許して下さい)

しっかりとイリアを抱きしめるカインに応えるように、イリアも腕を伸ばしてカインの背中に手を回した。

許されるはずはない、祝福もされない。

しかし、愛してしまっただけ止まらない。本能のままに、姉弟は踏み越える。

恋とは、愛とは恐ろしいものだ。

『あなたを……』

本能のままに互いを求め、ふと気がつけば夜が更けていた。

「カイン……」

イリアは身を起こしてカインを呼ぶ。

カインは既に立ち上がっている。

イリアの方には振り向く事もしなかった。否、出来なかった。

触れることも愛することも許されないのに、愛し、とつとつ触れてしまった。

「私には、貴女を愛することは許されない。もう、貴女の傍にはいられない」

後ろを向いたまま、カインが辛そうな面持ちでこう言った。

「……何故？私は貴方の姉だから？」

「……それだけではない」

姉であることも一つだった。しかし、もう一つカインにはイリアを拒絶しなければならぬ理由がある。

自分はアルデイ家とは永遠に関わってはいけないと、カインは思っていた。

兄に対する罪悪感と両親を奪われた憎悪を抱える自分とイリアは交わってはならない。

兄は決して自分を許しはしないだろう。

イリアまで、自分の抱えるものの犠牲にしたくなかった。

「貴女には何も言えない。でも、もう貴女の傍には来ない」

はつきりとイリアを拒絶し、カインは足早に部屋を立ち去った。引き止める隙もなく、彼はいなくなつた。

「……………お兄様」

イリアは泣いた。

カインが自分を拒絶するのか、兄はカインを目障りだと言いつつ放つたのか。

両方の事情や想いを把握できない弱さが憎らしい。泣いた。

唯、自分の無力さに泣いた。

いつものように部屋にいて、本を読みふけるホーリアは何かを待っていた。

何かとは、先程中庭にいたレディシア少年である。

彼は何かを言おうとした。でも、シャルルのことが脳裏に過ぎつたのか、何も言えなかつたと思われる。

キーヌ家の一人息子は華やかな両親とは違い、かなり控えめで純粋な目をしていた。

年の割には冷静に行動出来るようだが、両親には逆らえないこととアルデイ家の慣習や規則、その他諸々に嫌気がさしてきたのだろう。見るからに真面目な少年が、勉強も規則も放棄して中庭でぼんやりとしていたのだ。

普段から遊び呆けている者なら気にすることもないが、レディシアは規則や命令には極めて忠実である。健気としか表現出来ないくらい、彼は忠実に従う。

そんな彼が勉強を放棄し、規則を破った事が不可解なのだ。

コンコン

扉の音が響いた。

ホーリアは自分の予想が的中したとニヤリと笑った。

「どつぞ」

返事をした次の瞬間

「レディシア、早く行くわよ」

聞こえたのは彼の母の声だった。

不敵な笑みから一転、予想外の事に驚きを隠せないホーリアは緊張で固まってしまった。

不意をつかれたホーリアのことなど知る由もないレディシアと母が扉を開き、中に入る。

「ホーリア様、レディシアがどうしても貴方に習いたいとのことで連れて参りましたわ。」

是非とも貴方にレディシアに色々と教えてくださいます？
アルデイ家の事を一番ご存知である、貴方ならレディシアを……ね
？」

見下したような言い方にホーリアは腹立たしくなる。

レディシア少年は知らないだろうが、ジェysonやヘレンには昔から腹立たしい思いをさせられた事がある。

彼等は当主の後継者になれないホーリアをいつも陰で罵っていた。勿論、陰で罵っていただけなら彼等を不快に思ったりはしない。

他の連中と違い、露骨に態度に出してきたのだ。

当主の後継者になり得ず、母に見捨てられたホーリアの有りもしない噂を広めた。

それだけではない。ソフィアが殺された理由も勝手に作り上げ、シリウスが謎の死を遂げた理由もホーリアの所為だという噂を広めたりもしていた。

有りもしない噂が広まり、ホーリアは孤立した。アルデイ家の何処にも居場所がない彼は、アルデイ家を飛び出して近くの村に逃げ込んだこともある。

「ホーリア様、後は宜しくお願い致しますね。はあ…さっさと帰らなくちゃ。息が詰まりそうだわ！」

ヘレンは眉間に皺を寄せて早足で歩き、ボタンと乱暴に扉を閉めた。

「……ホーリア様、申し訳ありません」

「気にするな。しかし君も母に散々文句を言われただろう？
これに懲りたら今度からは案内する人を選ぶことだな」

「はい……」

レディシアは頷いた。

彼を見るホーリアは不可解だと思わずにはいられなかった。あの横暴で腹立たしい両親から、どうしたら純粹で健気な少年が生まれるのか。

しかし、今はこのような事を考えている場合ではない。

彼が此処に来た理由を聞かなければならない。

警戒するレディシアにホーリアは言った。

「……心配するな、誰も居ないから。用件は何だ、遠慮なく話してくれ」

笑顔でそう言ったホーリアに、レディシアは安堵を覚えた。

そして、幼い少年はホーリアを真っ直ぐ見つめて問いかける。

「母と父にイリア様とカイン様を消せと命令したのはホーリア様ですか？」

……… 呆然。

ホーリアは立ち尽くすしかなかった。

確かに当主に命令はされた。

しかし、これは内密ではないのか。

「レディシアっ！ どういう事だ！」

ホーリアは詰め寄り、レディシアに問う。

「ジェイソンとヘレンが、そう言ったのか！？ 確かに、そう言ったのか！？」

嘘であってほしい。

これは、父と自分だけの間に交わされたものであってほしい。
しかしホーリアを嘲笑うように、彼を更なる絶望に突き落とすように。

「……………え、ええ」

レディシアは詰め寄られ、戸惑いながらもはつきりと頷いた。

(……………イリア……………カイン……………！)

絶望の淵に突き落とされたような、苦しみと怒りに吞まれるような、
そんな感覚だった。

「父上、どういう事ですか？」

当主と身内、当主に呼ばれた者のみが入る事の出来る部屋で、アイ
シアは当主に問う。

「カインとイリアを排除するとは……………それもホーリアではなく、キ
ース夫妻に頼むとは」

アイシアは不可解でならない。ホーリアに命令した筈の当主が、キ
ース夫妻にも同じ事を頼むのが。

「……………アイシア君、君にはわからないかな？」

当主は楽しそうに、アイシアに言い放つ。

「ライハードのアレンとホーリアが繋がってもらっても困る。ホーリアは、もう余の言いなりにはならない。」

アイシアは血の気が引いていくのを覚えた。

……この人は、手段を選ばない。

顔青ざめながら当主を見るアイシアに、当主は勝ち誇ったように言い放つ。

「……私は『死』を超越し、『固有』を破った。私は最早固有の物体にあらず……私と同じ意志を持つ『暗黒』がライハードにいる。アイシア、意味がわかるね？」

「……それは」

バタン……。

アイシアは膝をついて、当主を見上げる。
今まで味わった事のない恐怖を、圧倒的な力と野心を、目の当たりにした。

「シリウスを庇ったホーリアも、もう僕には不要だ。アイシア、君もあまり僕を困らせないでくれ」

絶対的な力の前に、成す術も持たない。
何も言えず、何も出来ない。

「……ア、ル……様」

これほどまでに恐怖と絶望を覚えたのは、生まれて初めてだった。

(兄上……！)

義兄と共に消されてしまう。成す術も、抗う隙も与えず。

第十六節：僕等は何も出来ない（前書き）

僕達は、自分の事で精一杯だった。

見えていなかった、ずっと潜んでいた歪みを見ることが出来なかった。

一度、歪んでしまったら、きっと戻すことは不可能だ。

所詮、僕等は何も出来ない。

何一つ、出来ることなんてあるわけがなかった。

第十六節：僕等は何も出来ない

僕等は何も出来ない。目の前に危機が迫っても、僕等は何も出来ないんだよ、所詮。

シャルルの住む名もなき村からゆつくりと歩いたラルクとシャルルは漸くアエタイトに辿り着いた。しかし、漸くと言っても出発してから意外と時間は経っていないと感じたのはシャルルだけではなく、ラルクも一緒だった。

「ハロルドさんは何処にいるの？」

アエタイトに来たシャルルはキョロキョロしながら探している。ラルクはシャルルの手を引きながら

「こつちだ」

と言って真つ直ぐ進む。

アエタイトの街はとも入り組んでおり、真つ直ぐ進んだところで煉瓦で組み立てられた壁に当たる。

そこを右に曲がって少し進むと、短いトンネルがあった。ラルクはそのトンネルの中に入り、シャルルを連れて行く。

「このトンネルの先に大きな家があるはずだ。そこにハロルドさんはいるよ」

「うん」

「ちょっと速いかもしれないけど我慢してくれないか」

「わかった」

早口で話すラルクにシャルは頷くしかなかった。

何か大変なことが迫っていると、シャルにもわかったからだ。

ラルクやハロルドが何を話してくれるのか、彼等は何を背負っているのか。そう考えたらシャルは黙ってついて行くしかなかった。

ひたすら沈黙。

ラルクも口を堅く結んだまま目的地へ向かっている。

アエタイトを目指していた時は、あんなに楽しそうな表情で他愛もない話をしていたのに、今では何一つ話さない。

ラルクが緊張している様子がシャルにも伝わってくる。

重苦しい雰囲気を纏ったまま真っ直ぐ進み、トンネルを抜けると街の中にある家の中でも一番大きな家があった。

此処がハロルドの住む家らしい。

「ハロルドさん、いらっしやいますか」

扉の前まで歩き、ラルクは扉を叩いてハロルドを呼び出す。

ガチャリ

ハロルドは直ぐに扉を開いた。

「ああ、ラルク君…来てくれましたか。シャル君も待っていたよ。さあ入って」

ラルクとシャルルは中に入り、ハロルドの後を追う。数メートルはあるだろう通路の壁には珍しい絵画が飾られている。ハロルドは意外と美術品が好きなのだとシャルルは感心しながら進んだ。

奥まで進み、扉を開いたハロルドはラルクとシャルルを右側のソファーへ案内し、ハロルドは向かい側に座る。

「急がせてしまつて悪かつたね。特にシャルル君にはホーリア様の下につかせてしまつて……何も出来なくて申し訳ない」

「そんな前置きはいい。ハロルドさん、シャルルはアクロイド様に何があつたのかを知りたいんだ」

ラルクはきつぱりと言ってハロルドに全てを話すよう促す。シャルルもハロルドの話を聞こうと背筋を伸ばして座り、待機していた。

「もう時間がないんです。俺にも、シャルルにも。アルデイ家は動いている」

苛立ちと不安。

抑えきれない感情からラルクはハロルドにぶつける。

ラルクは危機を感じていると、ハロルドは呼吸をして話し始めた。

「あれは、もう10年経つのだろうか……アクロイド様は」

ハロルドは昔を思い出しながら1つ1つ、話していく。

あれは、10年近く前の話だった。
若くして高い医療の技術を持ったアクロイド様はアルディ家に呼ばれ、当主と謁見する事を許された。
とても名誉な事だったらしい。

当主の名はディアルト。

「やあ、アクロイド殿。此処まで御苦労だった。

「この事はホーリアに案内させるから少し待つてはくれないか？」

「か、畏まりました」

アクロイド様はディアルト様の言うとおり、待つていた。
数分後、アクロイド様の前に現れたのは少年だった。

そう、アクロイド様にとっては、目の前に現れた少年の姿を忘れられるわけがなかった。

少年の名はセイシエル。シャルの住む村にいる、カイン様の兄だった。

正確にはセイシエル様の父はディアルト様、カイン様の父はシリウス様、2人は異父兄弟だった。

「アクロイド様、ホーリアと申します。以後お見知り置きを」

「あ、此方こそ宜しくお願い致します。ホーリア様」

アクロイド様はセイシエル様を恐れた。

彼の母はセイシエルだけを置いてアルディ家から逃げた。しかもそ

れを手伝ったのはアクロイド様だった。
セイシエル様は恨んでいるだろう。母を引き離れたシリウス様と、
それを手伝った存在全てを。

しかし、当時のアクロイド様はソフィア様を見ていらなかったの
だと推測した。

もう正しい事は何も分からないが、こう思ったに違いない。

ソフィア様はシリウス様を愛していらっしやる。しかし、ディアル
ト様はそんな2人の仲を許さなかった。シリウス様からソフィア様
を奪い、身ごもったセイシエル様はディアルト様に瓜二つ。

憔悴し、荒れるソフィア様は幼いセイシエル様に八つ当たりなさる。

アクロイド様は、そんなソフィア様を痛々しくて見ていられなかつ
たのだろう。

シャルル、君が生まれる前、アクロイド様はアルディ家に仕えてい
た。

彼はレイモンド家の息子、レイモンド家はアルディ家の下につき、
アルディ家を守る役目を担っていた。

勿論イザベラ様の生まれであるアルベルト家もアルディ家の下につ
いていた。

レイモンド家とアルベルト家は昔から深い繋がりがあり、互いの家
に男女が生まれたら婚約させようという約束まで交わしていた。

アクロイド様とイザベラ様は、成長したら当然のようにアルディ家
に仕え、イザベラ様は若くしてソフィア様の召使になった。

アクロイド様はお父様の後を継ぎ、医者になる勉強もしていた。
イザベラ様に会いに行く傍ら、ソフィア様とも交流が出来た。

そして、いつしかイザベラ様とアクロイド様とソフィア様はお互い

を親友と思う仲になっていった。

「え、父達3人は親友だったのですか？」

ハロルドはそこで一旦話を止めてシャルルの方を向いた。シャルルが問い掛けたからだ。

「ああ、正確には4人だよ。

フレア（ニケ）様の姉に当たるセレナ様とも交流がありました。が、セレナ様はお亡くなりになったので、フレア様がセレナ様の代わりにアルデイ家に来た」

「えっ」

シャルルは驚きの声を上げた。アクロイドだけでなくイザベラがソフィアと関わりがあったとは。

「フレア様はイザベラ様よりソフィア様と関わる機会は少なかったが、セレナ様とのことで親しくなっていたかな。悲劇に繋がるとも、知らずにね」

そう言っつてハロルドはまた話し始める。

ソフィア様の異変に気付いたアクロイド様とイザベラ様、そしてフレア様。

一体何があったのか、どうしたのか、アクロイド様とイザベラ様は問うとソフィア様が身ごもっていた。もう分かると思うがその子がイリア様だ。

シリウス様については3人とも言わず、ディアルト様の目につかないようレイモンド家とアルベルト家の力を借りてソフィア様を保護

した。

実はシリウス様はレイモンド家のところにおいて、姿と名前を変えて住み込みで働いていたらしい。もうシリウス様もいないからよく分からないけれど。

でも、ソフィア様に複雑な事情はあれどセイシエル様を捨てたのに変わりはない。成長したセイシエル様を見たアクロイド様は自分を責めた。

しかしセイシエル様はアクロイド様に何も言わなかった。

セイシエル様が知らなかったのか、理解していたのか、私にはよく分からない。

セイシエル様に問い詰められるのか、ディアルト様に抹殺されるのか、恐怖と罪悪感にうなされながらアクロイド様はアルデイ家で過ごしたに違いない。

でも、異変が起こったのは5年目。漸く帰ろうとしていた時に、アクロイド様の前にある人物が現れた。

「セイシエル様か？」

ラルクは身を乗り出して問う。するとハロルドは首を振って答えた。

「いいや、違う。ラーナ様だ」

「……！」

シャルルは目を見開いた。ラーナ、聞いたこともない女性の名前で

混乱した。

「ラーナ様はセイシエル様の叔母にあたる。そうですね？ハロルドさん」

「ああ、そうだよ」

ラルクの説明にシャルルはホツとした。アクロイドはイザベラだけなのだ、シャルルは無駄な心配をしたことを恥ずかしく思った。しかし、シャルルの戸惑いに同意を示したハロルドはこう言った。

「シャルル君の思うとおり、アクロイド様のところにいきなりラーナ様が現れるなんておかしな話だね。ラーナ様についても少し説明しよう」

ラーナ様はディアルト様の妹でセイシエル様の叔母にあたる。ソフィア様とも当然関係がある。

それにソフィア様がセイシエル様にあたる様子もラーナ様は見ていたに違いない。

そしてソフィア様がセイシエル様を捨ててアルディ家を去った事も知っていたに違いない。

アクロイド様に問い詰めたか、或いは責め立てたか、それはラーナ様とアクロイド様だけだったから分からない。

アクロイド様の中で何かが壊れてしまったのは確かだ。

故郷に帰る前に私の家に寄り、他愛ない話とこの事を話し、私が場所を離れた間に彼は……。

「……アルディ家にさえいなければアクロイド様はきっとまだ此処にいたかもしれない。」

でも、アクロイド様にとつての罪が暴かれてラーナ様に責められ、シャルル君やイザベラさんにまで影響されたら彼は困るだろう。多分、シャルル君とイザベラさんのことを考えた結果、自分がいなくなればと思つたか、もう責められるのは沢山だと思つたのか」

ハロルドの話がよく聞こえなかった。

ラーナ、その女が父を追い詰めた。

でも父はセイシエルを置き去りにするソフィアを支持した。

ソフィアがセイシエルを置き去りにした。

『皆、自分勝手だ』

シャルルは何かを吐き出したい気分だった。

ソフィア様が可哀想？

セイシエルに何の罪があるの？

ただ父親が違うだけで、母親に疎まれて置き去りにされるの？

「ハロルドさん、ホーリアはどこ！ホーリアはどこにいるんだ！」

「シャルル！」

身を乗り出したシャルルを宥めようとするラルクをハロルドは制止して言った。

「シャルル君、君ならそう言ってくれらと思った。君なら『痛み』がわかると思っていたんだ。

君を待っていたんだ、ずっと。さあ、こっちだ」

ハロルドはシャルルとラルクの2人を連れ、通路を一気に駆け抜け

て外に出た。

外に出て、再び来た道を歩く。トンネルを抜けた後、右に曲がる。そのままアエタイトの街は遠ざかっていく。

2人は何が何だかわけが分からないままついて行ったが、程なくして馬車が見えてきた。

「ハロルドさん！」

そこで声をかけたのはラルクにとっては嬉しい人物の声だった。

「アーサー兄さん！」

そう、ラルクの兄アーサーだった。

「お、シャー少年にハロルド様も？馬車を動かすの苦労したんだぞ」
アーサーはラルクと同じように明るい笑顔を浮かべ、3人に乗るよう促した。

ハロルドは苦笑しながら、ラルクは拗ね、シャーは戸惑っていた。

「ラルク、お兄さんがいたの？」

馬車に乗り込んだシャルはラルクに問い掛け、彼は頷いた。

「ああ。2年前に母親が亡くなって今はアルデイ家に行ったきり帰って来ない父とアーサー兄さんの2人が俺の家族だ」

シャルは納得し、アーサーとラルクを交互に見ていた。

確かにアーサーはラルクとよく似ていた。互いが互いを大切に思っているところも垣間見えた。アーサーはラルクが心配でたまらない

のだろう。

「さあ、行こうか」

ハロルドの声に頷くアーサーとラルクとシャルル。彼の声と同時に馬車は動き出した。

本当に、後には退けない。もう逃げられない。

アルデイ家の稽古場。

カインはイリアに対する想いを断ち切る為、ただひたすら剣を振るっていた。

イリアを愛することは決して許されない。姉であり、彼女はアルデイ家の誇りだと。

(セイシエル様……)

断ち切ろうとすればするほど引き付けられる。

セイシエルの軽蔑の眼差しとイリアの笑顔が交互に浮かび、カインは眉間に皺を寄せる。

イリアの笑顔を失うのは怖い。セイシエルから軽蔑され憎まれるのも怖い。

アルデイ家にも関わりたくない。

結局どれも捨てられず、対峙することも出来ない己が心底腹立たしいとカインは思った。

(……だめだ、こんなことでは)

闇雲に剣を振るい、時には舞いながら剣を振り下ろす。高く飛び上がり、降下と同時に剣を勢いよく下ろす。素早く走って背後に回り込み、斬りつける。

正にカインは今、見えない何かと戦っていた。

気がつけば、夜更け。

カインは汗を流しながら何かを見据えていた。

誰も存在すら確かめられない姿なき何か。カインだけが存在を確かめられる。

「今日は此処までだ」

何かを見据え、言い放ったカインは素早く身を翻し、立ち去った。

中庭を歩きながら自分の部屋へ向かうカイン。

「カイン！」

彼を呼ぶ声が響き渡る。今まで彼が拒み、会いたくないと思っていたイリアの声。

「カイン、待って！待ってよ」

悲痛な声で訴えるイリアにカインはどれほど心を痛めたか分からない。

でも彼女は姉、血の繋がった姉なのだ。

愛することはおろか、姉弟と名乗ることさえ許されない。

しかしイリアは違った。

「カイン！」

真つ直ぐに、彼を追い掛けるイリアの声にカインは拒み切れなかった。

イリアに引つ張られカインは戸惑ったが、結局彼女を愛する想いが強かったと負けを認めた。

何も見えない、前を歩くイリアだけが彼の瞳に映っている。セシエルの事さえ忘れていた。

部屋に辿り着き、イリアはカインに待つよう命令し、近くにあった椅子に座る。

「カイン、私が嫌いなの？」

単刀直入に彼女は問い掛ける。カインは目を見開き、首を大きく横に振る。

「じゃあ、私の命令には何でも従ってくれるのね。だってあなたは私の」

「イリア様！」

カインはイリアを制止し、言い放った。

「あなたは私の姉です。血の繋がった姉弟なのです、あなたの命令には従いますが、あなたを愛することは出来ません」

誰が認めるだろう。実の姉と弟が恋人になることを。

誰も認めない。誰一人として認めない。

しかしイリアは反論する。

「私はあなたを弟だなんて一度も思っていないわ！勝手に決めつけないで！」

「イリア様！」

「私はあなたが好き！愛してる！アルデイ家なんて関係ないわ！」

カインに訴えるイリアがあまりにも痛々しい。彼女は泣き崩れ、カインはイリアに駆け寄る。

「カイン、私はあなたを……」

弱々しい声で何度も訴えるイリアに、カインの中で何かが崩れた。

そう、それは理性。

「私もあなたを愛している……イリア、一目見た時からあなたを姉と
思った事は一度もない」

……ああ、嗚呼。何という愚かで悲劇的だろう。

彼らは禁忌を犯した。

理性を壊し、獣のように混ざり合う男女。

誰も、彼らを止められない。

その頃、ホーリアは当主のいる部屋へ向かっていた。
レディシアの言うことが正しければキース夫妻は既にカイン達を始

未する準備にかかっている。

「悪く思わないでくれ、イリア」

道は違えた。きっと彼らは境界線を壊し禁忌を犯すと、ホーリアにはわかっていた。

人を威圧する扉もホーリアの目には入らない。

「父上、私です」

「……入れ」

直ぐに返答が来た。ホーリアは扉を開け放ち、当主に詰め寄る。

「キース夫妻にカイン達を始末させるとはどういうおつもりですか！カイン達の始末は私の役目ではないか、キース夫妻に任せるとはどういうことですか！」

当主はホーリアを見て、甲高い声で笑った。

「シリウスに洗脳されたお前にカイン達を始末することは不可能だろっ？カイン達には最も惨い死に方してもらわなければならない！ホーリア、カイン達に情を抱いたお前では不可能だ」

「……不可能？」

ホーリアは真つ直ぐと、当主を見据えて言い返す。

「血の繋がった姉と弟が結ばれることは死に値する。彼らはアルデイ家に大きな災いをもたらすでしょう……彼らを裁くのは同じく血の繋がった私がすべきこと。何人足りとも介入することは許さない

……裁くのは私だけだ！」

ホーリアの目が鋭く光る。

当主は不敵に笑い、ホーリアに向かって再び言い放つ。

「ではお前に全て任せよう。ホーリア……彼らを裁いてみせよ、私の目の前で！」

ホーリアは、当主を真っ直ぐと見ていた。
きらりと光る視線は刃の如く。

(2人には地獄に落ちてもらおう)

聞こえるは、哀れな兄の嘆きのみ。

第十七節：一瞬の消失（前書き）

一瞬で、跡形もなく消えてしまった絆。
それは、兄弟という証しだった。

私は、何一つ守れない。

ああ、出来るなら、私を恨め。
願わくば、お前が私に罰を下してくれたなら。

……でも、贅沢な願いだろう。

さようなら、私の全て。

第十七節：一瞬の消失

悪魔に吞まれないで。

あなたはまだ立ち上がった、助けなくてはいけない。
逃げないで、向かい合って。

アーサーの手配した馬車は他とは違い、かなりのスピードで走るようだ。大聖堂に辿り着いたハロルド達は降り、アルデイ家へ向かう。そもそもアエタイトから大聖堂まではそれ程遠くないとアーサーは思ったが、口に出すのは止めようと思った。
大聖堂内に入るとアーサーは言った。

「ラルクと僕は幹部達のところへ向かい、レディシアのところに行きます」

「ああ、任せたよ」

ハロルドとシャルルは左へ、ラルクとアーサーは右へ向かった。
左に向かうハロルドとシャルル。ハロルドはこう言った。

「私はイリア様とカイン様のそばに居ようと思う。君はホーリア様のそばに」

「わかっています」

シャルルは一刻も早く、ホーリアを止めなければならぬと思っていた。

初めて会った時から彼は悪魔に吞まれそうな気がしたからだ。

（同じなんだ、ホーリアは。身勝手な理由で見捨てた全ての存在に怒っている。

俺だって、勝手に自己完結させて逝ってしまった父さんに怒っていた。

今なら分かるんだ）

だからこそ、今にも墮落しそうなホーリアを救いたい。救わなくてはならない。

「シャルル君、私はイリア様の部屋に向かう。君はホーリア様のところへ」

ハロルドに頷き、シャルルはホーリアのいる部屋へ向かった。

出来ることは何一つ無い。でも彼を救いたいという思いがシャルルを駆り立てる。

アクロイドを失ったことに対する復讐心などもう残っていなかった。ホーリアを救いたいと思ったに違いない。謝罪したいと思っていたに違いない。

彼がアルデイ家に来たのはホーリアに対する贖罪を果たすためだ。

「ホーリア様！」

シャルルはホーリアがいつもいる居室に辿り着いた。

……誰からも見向きもされず、孤立した場所に。

「ホーリア様、シャルルです」

必死に彼を呼んだ。

彼に会わなければ、対峙しなければならぬ。アクロイドが遣り残したことを自分が果たさなければならぬのだ。

「ああ、シャルルか。入りなさい」

でも、アクロイドのことも何もかも関係ない。ただ、会いたかった。

……ガチャリ。

そろり、そろりと中に足を踏み入れる。

いつ入っても、恐怖心が募るこの部屋に、恐る恐る足を踏み入れて先に進む。

「……シャルル、どうした」

返事をしたホーリアが第一に見たもの。

強張ったような表情でホーリアを見るシャルル。

今まで彼は敵意を露わにしてこちらを睨んでいた瞳が印象に残りすぎていて戸惑った。それが今では強張った様子で、その中には悲しみも滲ませている。

「ホーリア様……」

言わなければならぬのに言葉が出なかった。何一つ言えず、どう言い表したら良いかも分からず、感情だけが溢れる。

「シャルル、どうかしたか？」

いつもの強気な彼は、怒りに燃えている彼は、一体どこに行ったのか。

悲しそうな顔で、じっとホーリアを見つめ続けるシャルルの瞳から涙が零れる。

怒りでも憎しみでもなく、静かなもの。

何も言わなくても、彼の想いが伝わってくる。

静かな涙は、蓄積していた激しい感情を目覚めさせる。

「……シャルル、行くのだ。もう此処にお前はいてはならない……」

そう言い放ってシャルルから背を向け、ホーリアはある決意を固める。

湧き上がる怒り。

偽りの話を刻みつけられ、弄ばれた屈辱。

都合よく偽られ、思い通りな人形を作り出した父に対する憎しみ。

気に入らないと、愛せないと、いとも簡単に手放した母に対する怨み。

「ホーリア……」

シャルルは引き返すべきだと判断し、ホーリアに背を向けた。

ゆっくりと扉へ向かう。もう一度ホーリアの後ろ姿を見て、出て行った。

（彼が、無謀な真似をしなければ良いのだけど）

それだけを考えながらハロルドの元へ向かう。

まだまだ行動しなければならぬのだから、自分には立ち止まる時間など全くない。

そう考え、走りながらもホーリアの後ろ姿が頭から離れなかった。

出て行くシャルの後ろ姿を見たホーリアは何かを待つように、じつとしてる。

(もうすぐ、来るか)

そう、ホーリアが待っていた人物。

ガチャリ。

「お兄様……」

いつもは入る前に許可を取るが、今日は違う。部屋に入って来たのはイリアだった。

「イリア、体は大丈夫か？」

ホーリアは声を掛けるが、その表情は暗くて険しいものだった。

「お兄様、そんなことはどうでもいいわ。

さっきシャルを見掛けたから……もう、シャルは此処に来ないのでしょうか？」

あなたと話がしたいの」

ホーリアに向かってそう言うイリアの声や表情もまた険しかった。

シャルルがホーリアのところへ向かっている数時間前、イリアはカインと歩いていた。

カインは躊躇していたが、護衛なら一緒にいるべきだと強く言ったイリアにはかなわなかった。

彼と歩いているうちにイリアにはある疑問が浮かぶ。

それは、カインがホーリアを見る表情についてだ。

「カインはお兄様を見る時、とても悲しそうな瞳をするのね」

少しの好奇心と大きな疑問。

ホーリアと接しているカインの瞳はとても悲しそうで苦しそうだったから。

「お兄様のこと、嫌い？」

「いえ！そんなこと……寧ろホーリア様のことは大好きです。偉大ですし、優しいですから」

カインはきっぱりと否定した。

それでは、あの表情にはどのような感情が込められているのか。

真剣な眼差しで、答えを待っているイリアを見たカインは話そうと決めた。

「……そうですね、セイシエル様の方が私を嫌っていると思います。私は、彼から大切なものを全て奪ってしまったから。」

彼は母のことをとても慕っていたから、それを奪った私が憎くて仕方ない……それから、私を選んだ母も憎いでしょう。私は、彼を愛していますが、彼は私の事を消したいと思っているのかもしれない」

カインはホーリアを愛しているのに、ホーリアは何故彼を憎むのだろうか。

「でも、その時までカインは」

母がいなくなつた事は前に聞いたことがある。

カインが生まれる前に母は逃げたのだと。イリアはその話を育ての親から聞いていた。

勿論母とも時々会っていた。カインは父親と一緒にいたから会ったことはなく、弟がいることも知らなかったが。

「カイン、それはあなたのせいじゃないわ……」

「……そうでしょうか……でも、彼にとって私は疎ましい存在で」

イリアに話した直後、カインは泣いた。

どうしたら良いのか分からなくて、ただ泣き続けた。

認めて欲しい、自分をもっと見て欲しい。

憎まないで、捨てないで。

言葉にすればするほど浅ましくて、愚かな。

(カイン……)

泣いているカインの姿を見ているうちに、イリアは兄を心から嫌悪した。

弟であるカインを目障りと言い放った兄が、平気で見捨てようとする兄が、イリアには理解出来なかった。

「……イリア様？」

立ち上がったイリアに今度はカインが驚いた。

もし、今から兄のところへ行くことをカインに話したらきっと彼は止める。

「ちょっと用事を思い出したの。早く行かないと怒られてしまうわ」

「そ、そう……行ってらっしゃいませ」

カインは寂しいと思ったが、仕方ないと考え直し、彼女を見送った。

「すぐ戻るわ」

扉を開ける前にイリアはそう言った。

何もかもお見通しらしい。カインは悔しくなったが、頷いて再度見送った。

勢いで飛び出したのは良いが兄の部屋がよく分からない。

いつも彼の部屋に行く時は案内してもらってはかりだったためだ。

「はあ……どうしよう」

何故か分からないが、気分が悪くなってきた。吐き気がする。

「……なんか、気持ち悪い」

手で口を押さえながら走った。目眩と吐き気に苛まされながら、必死に。

兄はきつと“悪魔”に囚われてしまったのだ。

彼は優しい……カインのことを本当は大切に思っている。

信じたかった。彼は優しいと、信じたかった。

通路を道なりに進み、階段をゆっくりと降りた。兄の部屋は本館の離れにあり、此処から中庭を走っていかなければならない。

階段を降り、別館を出て本館へ向かう途中。

「あの方は……ハロルド様？」

本館中央に向かっていているハロルドの姿を見た。

兄のいる部屋は本館左側の離れにある。中央から行かなければ左側には行けない。

「よし」

気持ちは急ぐが走ってはいけないと、何となく思った。

ゆっくりと、余裕を持って歩く。

相変わらず吐き気や目眩はするが、動けない程ではなかった。

兄に会わなければならぬ、伝えなければならぬ。

彼はきつと分かってくれる。

イリアは、心から信じていた。

それだけを胸に歩いた。

広い庭や長い通路を、ただひたすらに歩いた。

(遠く感じる)

アルデイ家は広いということは前々から思っていた。しかし、一人で歩いていると改めて思う。

とても広くて、隣に誰かがいなければ不安になる。誰でもいいからそばにいてほしかった。

そんな気にさせるほど、アルデイ家は広がった。

歩いて、歩いて、歩いて。

時間的にはそんなに経っていない。しかし、イリアにとっては長い距離だった。

やっとの思いで本館に来たのだ。

「お兄様」

イリアは、また歩いた。

そして、イリアはホーリアの前に立っていた。

お互いに何も言わず、ただじっと見つめている。

張りつめた空気、沈黙。

彼は一向に何も言わない。

だからイリアも何も言えなかった。

（何か言っよ）

沈黙し続けるホーリアに苛立ちと不安が募る一方で、それを抑え切

るのにもかなりのエネルギーが伴う。
それでも、彼女は何も言い出せなかった。

声すらも、発することが出来なかった。

(…怖い)

何故か分からないが、怖いと感じた。
容姿が彼の父に似ているからだろうか？

イリアは考え込んでいたところ、ようやくホーリアがゆっくりと呼ぶ。

「イリア」

ゆっくりしていて、はっきりした声。その中には険しさも含まれていた。

「話とは何だ、イリア」

イリアに問いかけながらもホーリアには話の内容は分かっていた。

『カインのことだろう』

そう考えた。ただ単純にカインの事だけでは無さそうだが主な内容はカインだろう、と。

彼女の怒りの声を、ホーリアは待っていた。

時計の針が動く音、足音すら響かない空間。

拳を震わせながら、イリアは真っ直ぐとホーリアの瞳を見ながら言った。

「お兄様、お聞きしたい事があります」

「……ああ、何だ」

「……カインのことですわ」

「……カインをどう思っているのか。そう聞きたそうだが」

ホーリアは笑いながら言った。

読まれている。自分のことなど全て見透かしている。

しかし、自分からは絶対に牙を剥かない。

相手が牙を剥いた頃には彼は先回りしている。

「そうね。でも、もっと聞きたい事があるわ」

ホーリアの表情を窺いながらイリアは更に続けた。

カインの事よりも長い間、彼女が疑問に思っていたことを。

「いつも、当主様やラサーニア様と何を話しているのかしら」

一瞬だけ、時間が止まった気がする。

「……ははは、ただの世間話さ。特にラサーニアは私の母親のようなものだ」

ホーリアの表情が一瞬だけ曇ったのをイリアは見逃さなかった。

「私がこちらに来たすぐ後、ラサーニア様がお見えになったから気になってしまって……カインと関係があるのかしら」

……見られていた。

ホーリアは表にこそ出さなかったが、しまったと思った。イリアが来た後には必ずラサーニアが此方に来る。

彼女にとってはイリアもカインも警戒すべき存在だった。

何故なら、彼女はソフィアとシリウスのことを、イリア達に知られることを何より恐れたからだ。

まずい、偶々とは言えイリアが見ていたとは思わなかった。

「……ラサーニアは私を見ていただけだ」

ある意味、間違っていない。

ラサーニアのことはイリアには知られなくなかった。

兄の困った様子を見たイリアは、改めて疑問をぶつける。

「もう一度質問するわ……アルデイ家のことについて聞きたい。あなたも、ラサーニア様も、当主様も、みんな、何を考えているの？ アルデイ家は私達に何を隠しているの？ あなたにとってカインと私は何なの？ 全てを知りたいの、答えて」

……答えられない。

ホーリアは思った。

イリアが理解できるよう答える術を自分は持っていない。当主にとってイリア達は忌々しい存在で、自分にとって厄介な存在で。

……本当に？

自分にとってイリアは、カインは厄介な存在だったか？

ただ、父が言うから憎んだ。それだけではないのか？

イリアもカインも守れたのではないのか？

彼らを破滅に追い込むのが自分の望みなのか？

(違う……違う。私にとって、イリアとカインは……)

ああ、心のどこかで気付いていたのに。

……自分は、父の野心の為に都合よく作られた道具だと。

いずれ、自分も消される存在なのに。

「……父にとって、レーザーニアにとって、私にとって……お前たちは何れ災いとなる。」

……災いは、芽のうちに摘まないといけないだろう？」

懐に隠していた刃を出して告げる。

「イリア、お前とカインは私が葬り去ってやるさ」

ボタン！

「セイシエル！」

勢いよく扉をあけ、イリアを庇うようにしてホーリアの前に立ちはだかる人物。

「……………カイン」

ホーリアは、カインを睨んだ。

「セイシエル、どうして兄であるあなたが、イリア様を……………どうして、どうしてこんなことを……………」。

答える…………… どうしてこんなことをしたんだよ…………… 答える！」

詰め寄るカインに、ホーリアの中で何かが壊れた。

ああ、なぜだ。なぜ、これほどまでに。

「…………… お前など、いなければ良かったのに。

お前さえいなければ、私は…………… 母に愛されていたのに。

お前さえ、お前さえ、いなければ、私は……………！」

ホーリアは持っていた刃をカインに突きつけた。それを見たカインも剣を構える。

「…………… お前たちにはいずれ死んでもらう。まずはカイン、お前からだ」

不敵な笑みを浮かべるホーリアに、カインとイリアはハッとして後ろを振り返る。

…………… 隠れていたのだろうか。

兵士たちがカインに銃を向けている。

「カインを連れて行け…ラサーニアの指示だ。いいな？」

「お兄様、やめて！」

イリアは止めるよう訴えるが、ホーリアは嘲笑うだけだった。

「……誰にも、私は止められないよ。」

イリアにも、シャルルにも、誰にも邪魔はさせない。さあ、カインを連れて行け！」

……カインはホーリアを見ていた。しかし、無理矢理兵士達に連れて行かれていく。

イリアは勝ち誇ったように笑うホーリアを見て言った。

「お兄様、私はあなたを許さない……！」

そう吐き捨ててイリアは部屋から出て行った。

……カインを助けるために。

慌ただしかったこの部屋に独り残されたホーリア。

「……私に、お前達を庇う事など出来ないさ」

もう誰もいなくなった。

結局、自分を変えられなかった事実を知ったホーリアは崩れ落ちた。暫く放心したように周りを見つめていた。

止まった思考。

それでも思い浮かぶのは、母とカインの笑顔だった。母に愛されていたカインが羨ましくて仕方なかった。

「……カイン、私を恨め」

ホーリアはそう眩くとゆっくりと立ち上がり、歩き始めた。

ハロルドの元へ急ぐシャルルを追うために。

第十八節：混沌の始まり（前書き）

全てはうまくいく。

無力でも、結束すれば対抗出来ると信じていた。

少しずつ、いい方向に向かっていくと信じていた。

うまく進めば進むほど、疑わなければならぬのに、過信する。

自分は警戒していたはずなのに、少しずつ計算が狂っていた。

しかし、その狂いに気づかず、ただひたすらに前を進む自分こそが愚かだったのだ。

自分の愚かさや無力さに気づかないほど、過信していた。

第十八節：混沌の始まり

なんと愚かで醜い。

それでも、私は願ってしまふのだろう。

決して私とお前は交わらない。

分かっているけれど、私は伝えたい。

伝えられたら、もう、何も……。

お前は自由になれ。

全てを忘れる。

カインが連れて行かれた事は直ちにアルデイ家の間で話題になった。勿論、シャルルの耳にも入っていた。

たった、2時間。

カインが連れて行かれてから、たった2時間。

（ホーリアは何を考えているんだよ）

問い質したくて仕方なかった。

未だハロルドの姿を見つけていないシャルルは悶々としていた。

迷って、迷って、迷って。

くるりと向きを変え、シャルルはホーリアのところへ行こうと決意した。

（ホーリア、待っていてくれよ）

シャルルは急いだ。

ただ、一心不乱にホーリアのもとへ急いだ。

一方、ホーリアのところから早く離れたくて歩くイリア。兄には通じない。

彼はずっと前にラサーニアや当主に取り込まれていたのだから。悔しくて、悲しくて。

結局カインがいなければ何も出来ない自分の無力さに泣いた。

（カインを救えるのはお兄様だけなのに。

彼はお兄様を愛しているのに、どうして目障りだと言っの？お母様だってきつと）

そんなことを考えながら、ふと気がついたら泣いていた。どうして伝わらないのか。

それどころか自分が行動したばかりにカインは捕まった。

自室に戻る気分にもならず、イリアはずっと当てもなく歩いていた。

「イリア様……？」

遠くから聞こえて来た声。イリアはぼんやりと遠くを見つめる。

視界が霞掛かって来た。今にも、倒れそうになる。

「やはり……！イリア様、しっかりしてください！」

「ハロルド……様？」

倒れるイリアを受け止め、必死に呼び掛けるのはハロルドだった。

相変わらず、薄暗い空間。

ホーリアは眉間に皺を寄せつつ広間へと急いだ。

カインは捕らえた。

一応父は信じるだろうが、それからどうするかが問題だった。

欺く事など出来ないかも知れない。下手をしたらカインやイリアだけでなく『子ども達』まで犠牲になる。

どこまで父を欺けるか、どこまで守れるか。

(……母上)

自分の顔を嫌いと言った母の悲しそうな表情が消えない。

偶々、カインと一緒にいた母の幸せそうな表情も消えない。

…母が好きだった。

母に愛されたかった、認めてもらいたかった。

言うことを聞いていたら、いつか母は愛してくれると信じていた。

「お前の顔を見るとうんざりするの！」

望まれて生まれた子供ではないと知ったのは、母がカインを連れて来た時だった。

溺愛と表現するに相応しい。

カインには心からの笑顔を浮かべていた。

自分とは違う母の態度を見た時の衝撃は今でも忘れられない。

母がいなくなってから、父も豹変した。

「あの女は僕達を捨てたんだ。まるでゴミが何かのように捨てたんだ」

呪いのように繰り返す、母に対する憎悪。

子供ながらに、父の母に対する感情は歪だと感じていたが、これほどまで歪んでいたとは思わなかった。

毎日毎日聞かされて、そのうちに父の言うことを信じていった。

『母は私を捨てた。私はいらぬ子供だった』

頭の奥に焼き付いて離れなくなった。

でも、信じたままではいられない。自分は変わったのだ。

『セイシエル、ソフィアは君を間違ひなく愛していた。

ソフィアは君まで道連れにしたくなかったんだ、私達と一緒にいたら君も死んでいた。

ソフィアは、君を守りたかったんだ』

『シリウス、どうしたらいい？私はどうしたらいい？』

『……カインを、いつか、あの子は兄上に目をつけられる。カイン

を、兄上から守ってくれないか』

『……ああ、分かった』

『……セイシエル、出て行きなさい。君は此処にいたらいけないよ』

…シリウスとの、最後の会話だった。彼は確かに言った。

カインを守ってほしいと。

（カイン、お前は私にとって大事な存在だった。誰か、カインに伝えてくれないか）

じっと待っていた。シリウスとの約束を思い浮かべながら、じっと待っていた。

バタン！

……扉が盛大な音を立てて開いた。

「よくやってくれたね？セイシエル」

嘲笑う、悪魔の帰りを。

「……………父上」

今では父が怖くなった。何を企んでいるのか、どれほどの力を持っているのか。

父を恐れて服従した者も多い。

「僕の目の前でカインを斬り捨ててくれ。出来たら苦しみながら死ぬようにしておくれ。
僕のかわいい息子よ」

「……………」

ただ、静寂するしかなかった。

此処は劣悪な環境だと誰かが言った。

当主に逆らえば、此処に連れて行かれ、のた打ち回りながら死んでいくとさえ言われた。

イリアは大丈夫だろうか、彼女の中には新たな生命がいる。

イリアは言わなかったが、カインは何となく気付いていた。

子供を見るまで死ねない。例えホーリアが遮ろうとも。

「セイシエル、俺は貴方を助けてみせるよ」

アルデイ家の呪縛から、彼を解放してみせると決意した。

（セイシエル、悪魔に吞まれないで。あなたは今にも墮ちそうになっている。
あなたは吞まれないで、どうか立ち上がって……………セイシエル）

祈るような想いで、彼が来るのを待っていた。

必ず彼は来る…此処に必ず。

カインは身構えた。

兵士達と彼が来るのを予測して。

「カイン」

見張りをしていた兵士がカインの名前を呼んだ。

「……」

罵倒されるに違いないと更に身構えたが、兵士が次に言った台詞は意外なものだった。

「抱いている感情が強ければ強いほど、動けないものだよ」

…どういうことだ？

カインにはよく分からなかったが、兵士はニコリと笑って言った。

「今しばらく耐えろ、カイン」

一方、最近では勉強を放棄していたレディシアは母と父に呼ばれていた。理由は勿論、同じ幹部を目指す子たちと比べて成績が一気に下がったからだ。

「レディシア、最近どうしたの。規律も守れていないし、勉強そっちのけで遊んでばかりで」

レディシアには特に理由などなかった。

ただ、今の勉強がとてつまらなかつただけなのだ。

多分、シャルルに出会い、彼の見る世界に惹かれたからだ。

自由に動ける彼が見る世界に触れたら、両親達が言う勉強が一気につまらなくなつた。

それに、両親達がカインを抹殺しようと計画している噂まで流れている。

レイシアにとってカインは憧れであり、彼の身に何かあれば助けたいとも思っていた。

とどのつまり、両親達に不信感を持っている。その不信感は日に日に大きくなるばかりだつた。

「……申し訳ありません」

それでもレイシアは謝つた。両親の言いつけを守らなかつたのは事実だ、それに対しては謝罪しなければならぬ。

「……まあいいわ。レイシア、お前のことはホーリアに頼んであるから。今後はホーリアの言うことを聞くのよ」

呆れたように言う母に溜め息をつく父。

レイシアは2人の態度に不快感を覚えた。

ホーリアに対する振る舞い、カインを疎ましいと言わんばかりの表情、傲慢で見下した態度……全てが腹立たしかつた。

彼らにとって自分は何だろう。

自分は何のためにこんな勉強をしたりしているのだろう。

「分かりました……」

レイシアは返事をして部屋を後にした。早く両親から離れたかつたのか、歩くスピードが上がる。

思っていたより両親を嫌っていたことを知る。

(シャルル、君のところへ行くよ)

両親の姿も見ず、レディシアはシャルルの元へ駆けつけようと急ぐ。

(ホーリアはどこにいるんだよ)

シャルルはあちこち見回しながらホーリアを探していた。彼の姿が見当たらない、彼はどこに行ったのだろうか。

「まさか、もうカインさんを……」

いや、そんなはずはないと首を振る。

確証などどこにもないが、彼がカインを殺せるとはどうしても思えなかった。どうしてそう思うのか、自分にも分からなかった。ただ、彼はとても優しい。

一心不乱にホーリアを探すシャルルは、前に人がいることに気付く。

もしかしたら、ホーリアの居場所を知っているかもしれない。

「すみません！」

歩こうとする人を呼び止め、シャルルは問いかけた。どうやら向こうも気付いたようで、立ち止まった。シャルルは走り、漸く追いついた。

「……すみません……」

「……」

息を切らすシャルルを黙って見つめるその人。不意にその人から問いかけられた。

「君は……シャルル・レイモンド……？アクロイド殿のご子息？」

不思議に思ったのはシャルル。

「え、どうして知っているのですか？」

目の前にいる人はシャルルの問いかけに答えた。

「……だって、君のお父さまは有名だから。あ、自己紹介が遅れたね……」

クスクスと笑いながらその人は顔を上げてこう言う。

「僕はアレン。ホーリア様に会いに来たんだ」

「……！あ、あ……」

アレンという名前にシャルルは目を見開き、足を震わせた。

「それより、ホーリアを探そうか。君も探しているのだろう？」

シャルルが呆然としていることにも構わず、彼はシャルルの手首を引っ張って走り始めた。

「ホーリアがどこにいるかは大体察しがついてる」

ハロルドは何人かの召使いを呼び、イリアを近くの医務室のベッドに運んだ。

医務室は何カ所もあり、ホーリアがいる所にもあった。

「イリア様、貴女だけのお身体では御座いませぬ……もう安静に」

「……ありがとうございます」ハロルド

「……カイン様とは……」

「ええ、もう半年前かしら……」

月日が経つのは早い。とても早い。短い間に様々な変化が訪れていた。

「……カイン様はご存じなのですか？」

「……彼は、薄々気づいています……。分かっているわ、こんなこと、許されないのは……でも」

「……もう何も言わないでください。ああ、私は勿論、侍女や医師たちも待機しておりますので、何かありましたら遠慮なくお申し付けください」

「ありがとうございます」

イリアは弱々しく言った。

そんなイリアから離れたハロルドは焦りを覚える。

(イリア様は衰弱しておられる……このままではまずい)

健康に思われがちないリアだが、幼い頃には重病を患い命を落としかけた事もあった。

今は幾分丈夫にはなったようだが、元々体力がないのに食事もあまり取らないためなのか。

それと同時にこの家でかなり気を揉んでいるのか、イリアは前よりやせ細っていた。

「……ハロルド」

イリアが突然呼んだので、ハロルドは駆け付けた。

「イリア様、どうなされましたか？」

「……ご迷惑おかけしてしまい、申し訳ありません。これからは気をつけます」

起き上がったイリアはそう言ってゆっくりとベッドから降りる。

「……ちゃんと食事、してくださいね」

「分かっているわ」

先ほどまでの弱々しい表情から一転、イリアは明るい声で返事をした。

父と分かれたホーリアはある場所へ向かっていた。

勿論イリアの場所だ。少し前に合流したアーサーがイリアのことをホーリアに告げた。

アーサーが言うには、イリアが突然倒れ、ハロルドに保護されたらしい。

計算が合っていれば半年ぐらいだろう。倒れるにしても少し様子が可ましいと感じたのはホーリアだけではない。

アーサーもイリアを心配していた。

「……さて、行きますか」

「……ああ」

アーサーはにつこりと笑い、ホーリアの隣を歩き始めた。

父はこの事を知ったらカインとイリアを何が何でも始末するに違いない。

考えるとホーリアは気分が暗くなっていくのを感じた。

実の姉と弟が結ばれたという事実に対して少し複雑な心境だが、良いのかもしれないと思う。

しかし、問題はカインだ。イリアは相応の年齢だが、カインはまだ子どもだった。カインが背負い込めるとは思えない。

「……許せ」

歩きながら、もうすぐ来るだろうと思いながらひたすら歩き、通路に出ると。

「ホーリア様！」

シャルルの声が聞こえた。ホーリアは呆気にとられ、じっと彼を見ていた。

「シャルル……」

その後ろにいる青年、アレン。

「ホーリア、やっと説得出来たんだ」

「……来たのか」

「当主を説得するのは大変だったからな？さて、僕はどうしたらいい？」

「……こちらで話そう。もうすぐ父が帰る。アレン、フードを被れ」

アレンは毛皮のフードを被り、ホーリアの後をついて行く。

全ては少しずつ、計画通りに進んでいた筈だった。

……進んでいた筈だと、信じて疑わなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1631m/>

緋の剣士に捧ぐ交響曲

2011年11月5日05時13分発行